
Precious Melody -3rd Stories-

七海くれは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Precious Melody - 3rd Stories -

【Nコード】

N24470

【作者名】

七海くれは

【あらすじ】

吹きすさぶ風がいよいよ冷たくなり始めた頃、その少女は帰還を果たす。

神崎都には身寄りがない。懐かしい故郷に戻ったはいいが、先行きは不透明。

そんな中でふらりと立ち寄るは、喫茶店『Hexagram』。

その主人に心を覗かれ、あれよあれよと住み込みの身に。

誰もが夢見る『Precious Melody』を捜し求める青
春ストーリー。

今度の主演は、女の子。

序章：Returner

その少女は、帰ってきた。自らが生まれた、懐かしい故郷に。おぼつかない脚を懸命に動かし、その土地の感触を確かめる。

「ああ……。おれ、帰ってきたんだ……」

彼女の名は神崎都。実に10年ぶりに生まれ故郷に戻る事ができた、17歳の少女だ。

両親とは早々と死に別れたため、幼少期から親戚の家を転々と渡り歩くことを強いられた都。

しかしながら彼女を引き取った親戚には、次々と不幸が舞い降りていく。

そのためいつしか、都は本当の孤児となってしまった。

ある日の深夜、繁華街に独りしているとところを巡回中の警察官に見つかり、職務質問の末補導。

身寄りのない彼女は、児童養護施設に送られる事になったが、そこも脱走。

逃げに逃げた末、自分の記憶を頼りに生まれ故郷への生還を果たしたのだ。

「……っつーか疲れた！ どっか休めるところねえかな……？」

もはや彼女の脚は、自分のものではないような感覚を受けるところまで達していた。

それでもなんとかしばらく歩くと、シックな造りのカフェが彼女の視界に入る。

入り口の前の立て看板には六芒星が描かれており、その中に『Hexagram』と英字で書かれている。どうやらこれが店名らしい。

「え……？ 何て読むんだろ、これ」

しかし都にはその文字が読めなかった……。

「え〜っと、お金はとと……。あちゃ、300円しかねえや。それじゃ泣き落としだな！」

そう言つと都は、雲ひとつない青空を見上げる。そして、なにやらブツブツと呟き始めた。

すると、なんと彼女の瞳には多量の涙が湛えられた。

そのままドアを開け、店内に入る。

「いらつしゃいませ」

店の主人らしき男の落ち着いた声が、静かな店内に響く。

他には若い男性客が2人、テーブルを挟んでなにやら難しい顔をしていたが、都の目には入らなかった。

都は、震える声で訴えた。

「お……おながが空いてもう一步も動けないの……。お願い、何か食べさせて……」

頬を伝う、偽りの涙。これも都の作戦だ。

この街に辿り着くまで、ずっとこうして飢えをしのいでいたのだ。……しかしここでは通用しなかった。店員は視線を都に合わせて諭すように言う。

「嘘はいけないな、お嬢ちゃん」

「……!？」

「こちらも商売ですから、お金をいただけない事には」

「お金ならあります！ ほら……」

そう言いながら都は、男性に全財産を自分の手のひらに乗せて見せる。

するとその時、テーブル席で難しい顔をしていた男性客のうちの一人が叫んだ。

「かてーこと言うなってマスター！ 何だったらオレたちが……」

「ちよ、待てよ圭輔！ たちって何だよ！」

「潤……。お前は旅先で何を学んできたんだ!? 人間誰しもが持ち合わせる博愛の精神を、お前さんは一体どこにやったんだ!？」
「う……………」

「はいはい、静まる。……………ごめんね。あれは自分を客だと勘違いしてる子たちだから、背景だと思っただけだよ」

「ケーツ!」

彼らは、さらに難しい顔をしてテーブルを挟んで向かい合う。

「えっと……………300円か。大丈夫、これなら普通サイズのトリュフパフェが注文できるよ。それでいい?」

「あ……………うん」

わけも分からずうなづく都。マスターと呼ばれた長身の男性はゆっくりと体を起こすと、奥に引っ込んでいった。

「あ、そのカウンター席に座っていいよ」

言われるがままに席に座る都。それと同時に青年2人が都に近寄る。

「なーんかワケありっぽくね? ね、キミ。どこから来たの?」

「つせえな……………」

「え?」

「うるせえって言うてんだよ! こっちは計画がうまくいかなくてへこんでんだ! ほっとけ!」

「うはあ……………怖い怖い」

「へいへい、邪魔者は引っ込んでましょーぜ」

都の一喝で、彼らはそそくさとテーブル席に戻る。

それから2分後、マスターはトレイにパフェを乗せて戻ってきた。
「お待たせいたしました。トリュフパフェでございます。ごゆっくりお召し上がり下さい」
「うわあ……………」

都は、今まで見たこともないメニューに感動し、思わずスプーンを使わずに口をつけてしまった。

「はっははは、逃げたりしないからゆっくり食べなよ」
「うんっ！」

「……食べながらでいいから、聞いてくれるかな？」
「がっ？」

「さっきのうそ泣きだけどさ、あれはどうして？」

「それはおれも聞きたい。なんでうそ泣きだつてわかったの？」

「……心が読めるから、かな。『いつもみために泣き落とせばただで食べ物にありつける』って、キミの心がそう言ってた」

「う……。当たってる」

「もしよければ、名前聞かせてもらってもいいかな？」

「名前？ 都。神崎都だけど、それがどうかしたのかよ？」

「都ちゃんね。……僕はここ、Hexagramの店長やつてる増田六、通称マスターさ。よろしくね」

「げっ！ マスターが本名バラしやがった！ こりゃ明日は津波が起こるぜ！」

「外野うるさいよ。……キミらもこっちきて自己紹介しなよ」

「いや、いい。その子がほっとけて言うから」

「そうなの？」

「……ごめんね、いいよ」

「そうか！ んじゃ行くぜ！」

青年2人は都の許しを得て、ようやく近づく事が出来た。

「んじゃまずはオレから。オレは秋野圭輔ってんだ。都ちゃん、よろしくな！」

「オレは古賀潤。気ままな旅人だ。よろしくな」

「お……。おう。よろしく」

「見たところ高校生みたいだけど、この辺じゃ見かけないね。転校生？」

「……違う。おれは……。10年ぶりに帰ってきたんだ……」

「そう……。か。じゃあもしかして、身寄り……」

「ねえよ。ガキの頃は親戚に預けられもしたけど、おれが行くところ

行くところ全てに不幸が起こりやがる。そんなの……もうたくさんだ！

「え、家なき子って……ことなのか？」

「そうだよ。だからおれは一人でここまで来たんだ。そしてこれからも、ずっと一人でやっていくつもりだ……。でも……」

「でも？」

「ぐすつ、こんなに優しくされたら……また頼っちゃまうじゃねえかよ……！ しかも今度はアカの他人だったのによお……！」

彼女の頬を伝う、真実の涙。これは作戦ではない。彼女の本心だ。そんな都の頭を撫でながら、マスターは囁きかける。

「キミは……温もりが欲しかったんだね。さっきのうそ泣きも、誰かの温もりでありつきたかったからでしょ？」

「ち……違う……！ おれは……そんなんじゃない……！」

「……大丈夫。僕を信じていいよ」

都をまっすぐに見つめるマスターの目。その双眸を前にして、隠し事などできるはずもなかった。

「そんな目で見るなよ！ 隠せねえじゃねえか……！ ……おれ、ずっとさみしかったんだ……！ パパもママもないから……心の拠り所が……欲しかったの……！」

言いながら目を伏せる都。その目から、一滴の涙が零れ落ちる。

「親戚はすぐいなくなっちゃったし、引き取られてもやっぱりそれは本当の親じゃないから……どこか遠慮してた……！ それに……おれが望んだのはそういうのじゃない！」

ひととき大きな声を張り上げ、自分に気合を入れながらさらに続ける。

「普通に暮らして、普通に学校行って、普通に友達作って……っていう、普通の生活がしたかったんだ！ なのにどうしておれだけ……こんな不幸なんだよ……！ ぐすつ……」

涙ながらに訴える都に、圭輔と潤が語りかける。

「大丈夫だよ、都ちゃん。ここにはキミと同じくらいの子たちも来

る。みんないい奴だから、すぐ打ち解けられるよ。それに、オレたちだつて都ちゃんの友達になつてやるからさ！」

「生きてるだけ幸運だと思わなきゃ、な。オレは旅先でもつと恵まれない子たちを見てきた。両親に産んでもらつた事を感謝しようよ。希望を忘れず生きてれば、きつといいことあるから」

「もし……これからどこにも行くところがなければ、うちに住むといい。この敷地に2人は広すぎるからね。都ちゃん、どうかな？」

「マスター……がそれでいいなら。せつかくの故郷なんだから、ここでおれの幸せ、きつと見つけてみせる。圭輔さん、潤さん、よろしくな！」

「おう！ こちらこそよろしくな！」

堅く手を握り合つた3人。都はこの日からマスターの家に住み込む事になつたのだ。

時間が移ろえば、人も移ろう。カフェには新たな音が、舞い込んできた。

第1章：Wild Girl

同じ日の昼過ぎ、ゆっくりとカフェのドアが開けられる。そして、女性が1人入ってくる。

「おはようございます。今日もよろしくお願いします」

独特のテンポで話す彼女の名前は、青山絵実梨。

ここHexagramでウェイトレスとして働いている大学4年生である。

先日、とある企業から就職の内定をもらった事で気が楽になったのだろうか、今までにした事がないというアルバイトをしようと思っただ。

「おはよう、絵実梨ちゃん。あ、今日は新しい子が来たよ」

「新しい子？ 誰ですか？」

「ほれ都ちゃん。あの人、ここで働いてるんだよ。自己紹介してきな」

潤は都の手を引き、絵実梨と対面させる。

「あ……えっと。おれ、神崎都っていうんだ。よっ、よろしく！」

「都ちゃんね……。え？ 都ちゃん……？」

「あれ絵実梨さん、なにか心当たりでも？」

「う……。ここまで出てるのに、最後が出てこない」

どうやら絵実梨は都のことを知っているようだ。

喉元を指差しながら苦悩する彼女に、都本人が助け舟を出した。

「……間違ってたらゴメンだけど、青山果緒梨ちゃん……かおりゆんのお姉さんか？ もしかして」

「あ、そうそう！ そうだよ？ 果緒梨の幼なじみの都ちゃんだよ？」

「何っ！？ 都ちゃん、果緒梨ちゃんと幼なじみだったのか！？」

「おいおい、世間ってホントせつめーなあ……」

「やっぱりそうだ……！ ねえお姉さん！ かおりゆんは元気か！

「？」

「元気すぎるほど元気だよ。こないだあなたの事思い出したみたい〜」

「会いたい！ ねえ、今どこにいるんだ!？」

「わっ、もうすぐ来ると思うよ〜」

「マジか!？ すっげえ〜！ おれ……めっちゃ運がいいじゃねえかよ〜！」

「都は幼なじみに間もなく会える事で、天井を見上げながら呆けていた。」

「それじゃ絵実梨ちゃん。着替えてきちやってね」

「あっ、はい〜」

「……あ、オレそろそろ帰るわ。やらなきゃなんねー事あるし」

「そう言いながら立ち上がった圭輔。専門学校に通っている彼はこの時期、就職活動や卒業製作に追われている。」

「あ、帰るの? ……じゃーオレもそろそろお暇させてもらおうかな」

「圭輔に呼応するかのごとく立ち上がった潤。そんな2人をマスターは茶化す。」

「はい、2名様お帰りで。絵実梨ちゃん、塩持ってきて」

「はい〜」

「鬼！ 絵実梨さんも持ってこなくていいですって！」

「あっははははっ！ ねえ圭輔さん？ みんないつつもこんな調子なのか？」

「そうだなあ。何だかんだ言って、マスターも楽しんでんだよ。……じゃまたな」

「そう言いながら、潤と圭輔は並んでHexagramを後にする。あっ、またなー! ……あ〜かおりゆんまだかな〜? ……来たか!??」

「圭輔たちが出てから間もなくドアが開く音がしたかと思うと、弾

かれたようにドアに向かう都。

……しかし現れたのは、制服姿の男子高校生2人だった。

都は明らかに不満を露にした顔で、吐き捨てるように言う。

「……んだよ、ちげえのかよ。期待させんじゃねえよ」

「こらこら都ちゃん。そんな事言うもんじゃないよ」

「がう。だつてえ」

「あれ、その子誰でっすか？ 見かけねー顔でっすね」

「う……。また女の子なのか……？」

2人は先ほどまで圭輔たちが座っていた所を選んで座ろうとする。都はその2人に話しかけた。

「なあお前ら、かおりゆん知ってるか？」

「え？ 何のことでっすか？」

「何のことでっすか、じゃねーよ！ 知ってるかどうか答える！

こつちは聞いてんだからよ！」

「がっ……。ちよつとマスター！ 何なんでっすかこの子は！」

「ああ。その子、僕の子供。今まで言わなくてごめんよ」

「……マスター、笑えねえ冗談とかやめてくれでっす」

「むう、さすがに無理があつたか。その子はね、身寄りのないかわいそうな子なんだよ」

「……」

「なんだよ、わりーかよ」

「ほれほれ、ケンカ腰もほどほどにね。自己紹介でもしたらどう？」

お互いに、ね」

「……オレっちは原田海斗でっす」

「お……俺は……、稲村竜造……だ……」

都に名乗った2人は、同じ学校に通っている。

部活動も同じ野球部で、竜造の放る球を海斗が受け止めるというバッテリーを組んでいるという。

「あっそ。……で、お前らかおりゆんのこと知ってるのか？」

「だから……そりゃ一体誰の事でっすか!？」

「んだよ、知らねーのかよ。青山果緒梨ちゃん、だからかおりゆんだよ」

「あ……、青山さんなら……お前のクラスに……いたじゃんよ」「本当か!？ ねえ、いつ来るって!？」

竜造の言葉に反応した都は、思わず身を乗り出して聞いていた。そのため、2人の顔はそれこそ目と鼻の先の位置にまで近づいたのだ。

直後、彼は一瞬にして鳥肌を立てるのであった。

「竜造! あーあ……。こいつは女の子にすぎー弱いんでっすよ……」

海斗に支えられながら何とか体勢を立て直した竜造は、蚊の鳴くような声で呟いた。

「うっ……く……。い……。いつ来るかはわからないけど……。こいつが来たんだからそのうち来ると……。お、思う……」

「マジだな!？ 信じたぜ! ああ、待ち遠しいなあ」

「……絵実梨さん、なんなんでっすか?」

「その子ね、果緒梨の幼なじみなんだよ。今日、何年かぶりに帰ってきたんだって……。両親いないから、今日からマスターの家に住むみたい」

「……っ!? ほ、本当でっすか……?」

「……そうだよ。おれは独りぼっちだったんだよ。……でも今は違う。マスターもいるし、みんなもいる。おれはその中で、おれ自身の幸せを見つけてみせる」

握りこぶしを作り、力強く宣言する都。そして、2人の方に向き直った。

「さつきは口悪くなって……。ごめん。初顔合わせだつてえのに……。……」
「都はばつが悪そうに、海斗に向けて頭を下げる。彼は少し慌てながら言った。

「いや、まー、元気があっていいことだっす。……。ん? 果緒梨ちゃんも幼なじみってことは、オレっちたちと同じ年でっすかね?」

「そう……なんのかな。17歳ならおれと同じだよ」

「あ、やっぱりダメでっすね。じゃー別にかしこまらなくてもいいかな……」

「だな。てーかさ、その『でっす』ってのは口グセか何かか?」

「……やっぱりそう思うでっすか。ついつい出ちゃうんだよな」

「ふうん、おもしれえな。……そっちは?」

「ああ、こいつは稲村竜造つつつて、オレっちと同じ部活の奴でっす。女の子が苦手で、話しかけられたり触れられたりすると鳥肌が立つちまうんでっす。だからさつきも……」

「マジ? じゃちよつと試してみつか。……ちよん」

「都是そつと竜造に触れてみる。すると彼はたちまちすくみあがってしまい、突如として汗を吹き出した。」

「うわっ! マジだ! ……おれみたいなのでも反応するってことは、ちゃんとおれも女の子として認められてんだな。それ……ちよつとうれしいな」

「う……う……。お、俺……俺は……」

「まあなんだ。仲良くしようぜ、2人とも! おれ、神崎都つてんだ。よろしくな!」

「もちろんでっす! こつちこそよろしくしてくれでっす。……あと、誰か来たみたいでっすね」

海斗の言葉に反応した都がドアの方を向くと、ブレザー姿の女子高生と思われる3人組が彼女の視界に入ってきた。

その3人の中にこそ、都が捜し求めていた少女、青山果緒梨がいたのだった。

「あ……ああ……。かおりゆん!」

「きゃあつ!」

「ほわ〜い!」

その3人の真ん中にいた少女に抱きつく都。

10年ぶりの再会ではあったが、彼女はしっかりと幼なじみを覚

えていたのだ。

「かおりゆん！！ 会いたかった！ 会いたかったよ！！」

「ちよ、何……？ えっ、もも、もしかして……みやぴよん？ みやぴよんなの！？」

「そう！ そうだよかおりゆん！！ うっわ、マジ会えて嬉しいよ！！」

「あたしも！！ うわ、すっげー久々なんですけど！？」

都につられて、果緒梨も彼女を抱き返す。

このように感動の再会を果たした2人だったが、彼女らに向かって立ち上がる少女もまた2人。

先ほど都に突き飛ばされた、橋本瑞奈と桜庭クリステルだ。

彼女らは2人して都に非難の声を浴びせる。

「へいゆー！ いきなりなにをするですか！ いたいいたいです！」

「そ、そっだよ……。あなた、いつたい何なの……？」

「あ！？ うっせえなあ！ おれか？ おれは神崎都ってんだよ！ 今10年ぶりに懐かしい子と会えたんだ、邪魔すんじゃねえ！」

「ね、みやぴよん。ちよっといい？ この子たちね、あたしの友達なんよ」

「げっ、マジ……？ ぐっ、ごめんよ……。そうとは知らず……」

「……あやまるのはいい事です。ミーはみやこちゃんを許すです。

仲良くするです！ らぶあんどぴーです！」

「あなたもかおりゆんって呼ぶんだね。わたし、橋本瑞奈っていいです。仲良くしてね、神崎さん……？」

「えっ……？ お前ら、おれとも仲良くしてくれる……のか？」

「いえーす！ おふこーす！ あくしゅするです！ あ、ミーは桜庭クリステル言うですよ。クリスと呼ぶと喜ぶです」

「クリスと……瑞奈か。よろしくなっ！ あ、瑞奈。おれのことと呼び捨てでもいいぜ。おれだって呼び捨てなんだし、友達なんだからな！」

そういいながら都は2人の肩を抱く。先ほどの非難の声はどこか

に行ってしまったようだ。

その様子を遠くから見えていた絵実梨は、傍らの妹に声をかける。

「よかったね〜。都ちゃんに会えて〜」

「うんっ！ あたし、もう毎日来る勢いだわ」

都を中心に騒がしくなる店内だったが、店主であるはずのマスターは特に咎める事もせずその様子を見守っていた。

言うまでもなく、他の客はさっさと帰ってしまったのだが。

夜も次第に深まり、客も全てがはけてしまったHexagramでは、若干早い閉店作業が始まっていた。

ウェイトレスの絵実梨は大抵閉店作業も付き合うので、もつしばらく店にとどまる事になる。

そんな彼女にマスターは声をかけた。

「あー絵実梨ちゃん。店の掃除、ちよつとやっとしてくれないかな？ 僕はちよつと都ちゃんと話があるから」

「あ〜、はい〜」

「慌てず、急いでね」

「う〜、難しいよ〜」

「んじゃあ都ちゃん、奥に来てくれるかな」

「あ、うん」

マスターに手を引かれ、都たちはカウンター奥のキッチンに入る。

「がっ………?」

「ま、座ろつか」

「う、うん」

マスターが差し出したイスを受け取り、静かに腰をかける。

「……今日は疲れたろ」

「うっ、うん」

「そっか。これからだけど……本当にいいの？ うちに住み込んで働くってことで」

「当たり前じゃねえか！ だってよお、そうでもしねえとずっとお

うちに引きこもってそうだし。おれ、そういうのってガマンできねえんだよ」

「なるほど。そういう事ならこれ以上は聞かないよ。明日から、絵実梨ちゃんと協力して頑張ってもらおうか」

「おうよ！ わかんねえことばっかだと思っけどよ、頑張るからな！」

「うん、お願いします。あ、そうすると給料だけど……一緒に住むわけだからちよつとだけ絵実梨ちゃんよりは少なくなるけど、それでも大丈夫かな？」

「もちろん！ お小遣い程度でいいって。……っーか、お小遣いみたいにもらえると嬉しいな。給料って形じゃなくてさ」

「そっか……そうだよな……。わかった、じゃあそうしよう。あとそうだ、ちゃんと土日は休みにしてあげるから、みんなと遊んでおいで」

「えっ！？ いいのか！？ がうう！ マスター最高〜！」

「はっははは、ありがと。でも、仕事と遊びのけじめはちゃんとつけるんだぞ。今日みたいな事は、うちの店で働くんだったらちよつと控えてもらいたい。いいね」

「うっ……。は、はい……」

「素直でよろしい。……まあでも、ホントに他のお客さんが一人もいないときなら別にいいけどね」

「……いいのかよ」

「マスター、終わりました〜」

その時、フロアから若干気の抜けた声が聞こえてきた。その声の主は、フロアの掃除を行っていた絵実梨であった。

「終わったみたいだね。行こう」

「うん！」

再びマスターに手を引かれながらフロアに出ていく都。

彼女はきちんと並べられたイスやテーブル、そして塵ひとつない床を見て、素直に感動を覚えたのだった。

「うつわ、すげえ！ 超キレイじゃねえか！」

「え、ホントに？ たぶんね、果緒梨がキレイ好きだから、私もそんなところが出てるのかも」

「そうそう、かおりゆんはキレイ好きだったっけ。あれは……おれらが幼稚園に行ってた頃だな」

都は綺麗になった店内を見渡しながら、昔の事を思い出していた。「おれがおもちゃ出しっぱのまま外に行こうとしたら、かおりゆんにダメだよって言われた記憶があるんだ」

「そうなんだ。すごいね、よく覚えてるね」

「うん……。だって、大切な思い出だからさ……。おれ、この街に帰り着くまでずっとそうだった思い出を支えにしてたんだ」

彼女にはあまりにも悲しい思い出が数多くあるが、それ以上に嬉しい思い出も持っていた。

「それで……やっと帰れたその日にかおりゆんと……。いや、それ以外にもたくさんの人に出会えたし、マスターの家にも住まわせてもらえる事にもなった」

「今日まで、よく頑張ってきたよね。私、尊敬しちゃうよ」

「確かに、身寄りがなくなった時とかマジかよって思った。でも……そういう日々があるから、今のおれがあるんだ。そして今日が、再出発の日なんだ！」

「うんうん、よく言った。……都ちゃん。キミの幸せは、僕らが見つけるものではない。自分の力で見つけるものなんだ。それは分かるよね？」

「う、うん……」

「……だけど、全て一人だけで見つけれられるようなものかと問われたら、僕は違うと答える。簡単なようで、とんでもなく難しいんだなこれが」

マスターは難しい顔で淡々と語る。

飄々としている彼でもこんな顔をするものかと、都は少し不安になった。

「……でも安心して欲しい。僕を始めとしたみんなが、キミのためにいろいろしてくれると思うから。そう、キミの言う『幸せ』を見つけるお手伝いをね」

しかし、そんな懸念を吹き飛ばすかのような言葉を投げかけるマスター。

「うん……うん！ おれ……すっげえ嬉しい……いよ……！ ぐすつ……」

そのマスターの言葉に思わず涙ぐんだ都に近づく絵実梨。そして彼女の頭を撫でながら呟く。

「私も、都ちゃんが帰ってきて嬉しいと思う。果緒梨と、もつともつと仲良くなつてね」

「え……絵実梨さ〜ん！ うわああ〜ん!!」

ついに泣き出した都。そんな彼女を、絵実梨は優しく抱きしめる。その様子を遠目で見ていたマスターも、納得したかのように数回頷いた。

「それじゃ〜、お疲れ様でした〜」

Hexagramの閉店作業も終わり、ようやく絵実梨も帰る事になった。

「じゃあなー絵実梨さ〜ん！ かおりゆんによろしくな〜！」

「さっ、都ちゃん。家に入るよ」

「うん！」

都はマスターに手を引かれ、店の裏手に回る。するとそこには別にドアがあった。ここから2F、3Fの住居部分に入るようだ。

「へえ、こっちにもドアがあったんだ」

「そういうこと。ここから家に入るわけだ。もちろん、今日からキミの家でもあるけどね」

マスターはポケットから鍵束を取り出し、手際よく開錠する。

ドアを開けた先には階段があり、そこを数段上ると右手の方向に再びドアが現れた。

「ここが2Fだ。こっちは実はあまり使っていないからちよつど良かったよ。この2Fを、自分の部屋にするといい」

「う、うん……。でも……」

「でも?」

「がう……。今日だけでいいから……マスターと一緒に寝たいなあ……なんて。ほら、おれって両親いねえじゃん? だから……そういうぬくもりみたいなよく知らないんだ」

「なるほどね。わかりました、じゃあ今日は一緒に寝ましょうか。なんなら今後ずっとでもいいけど」

「うん……。でも、基本自分の部屋で寝るよ。さみしくなったら……そうさせてもらうから」

「はいはい。んじゃ上行こうか」

さらに階段を上ると、今度は正面にドアが現れた。

「主に生活してるのはこっちなね。千奈美さん帰ってるかな?」

「ちなみさん、って?」

「ああ、僕の奥さんだよ。学校の先生やってるんだ」

「……そう。奥さんいたんだ」

「まあね。……あ、鍵開いてる。帰ってるみたいだね」

そのままマスターがドアを開けると、奥から女性が小走りで駆け寄り、マスターに抱きついた。

突然の事に困惑した都は思わず手で顔を覆ってしまった。

「だ〜り〜ん、おかえり〜! も〜、さみしかったの〜!」

「ごめんね、遅くなって。……あ、今日は会って欲しい子がいるんだ」

「ふみゆ? だーれ?」

「ほら、この子だよ。都ちゃん、挨拶しな」

「うん……。お……。おれ、神崎都。今日からここに住むことになりました……。よろしく」

「都ちゃんね、よろしくつ。私は増田千奈美だよ。……? ここに住むって? おうちは?」

「この子はね、身寄りが無いんだ。幼くして両親を亡くして、親戚もいなくて、今日この街に帰ってきて店に来たんだよ。つまり、家なき子ってわけだ」

「……………！ そう……………なの……………」

「そんな子をほっとくなんてできるかい？ だから、この子の気が済むまでうちに置いてあげようと思うんだけど、どうかな？」

「もちろんいいよ！ 苦労したんだね……………本当に。今日から、私たちの事を本当の親と違っていいのよ。……………えへっ。子供が出来たみたいだね、だーりん」

「あはっ、ホントに2人は仲がいいんだなっ！」

「そーなの〜！ 私があ、だーりんのこと大好きなの〜」

「わかるわかる。おれもこの人だったらいいなーって思ったぜ」

「だーりんもてだ〜。このこの」

「ははは……………。じゃあそろそろ夕飯にしよっか。千奈美さん、都ちゃん。手伝ってくれるかな？」

「いいともっ！」

マスターの呼びかけに全く同時に反応した千奈美と都であった。

日付が変わろうとする頃、3人は布団の中にいた。

都を中心に、川の字になって横たわる。

「へへっ……………。なんかこういうの、うれしいな」

「都ちゃんさえよければ毎日でもやってあげるよ。ねっ、だーりん」
「？」

「まあね。でもそうになると、千奈美さんは僕と離れる事になっちゃっしょっ？」

「ふみゆ〜。そこはガマンするもん。代わりに都ちゃんをだっこする〜！」

「……………ママ……………」

「えっ？」

「ねえ、ちなみさん……………？ 今日だけでいいから……………ママって呼ん

でもいいか……?」

「もつちろん! じゃあ、だーりんはパパかな?」

「……それでいいのか?」

「もちろんさ。都ちゃんがそうしたいなら」

「……! パパ……! ママ……! ううっ……。おれ……やっと

家族のぬくもりってのを……体感できて……うれし……!」

「うん……うん……。よしよし……」

千奈美に抱かれ、赤子のように泣きじゃくる都。

17歳という、もつとも多感な時期である彼女がようやく見つけたひとつの幸せ。それは『あたたかな家族』であった。

翌朝……都は誰かにしがみ付かれたような感覚を受けて目覚めた。

「わわっ!? な……なんなんだ!?!」

「だーりん　すりすり」

「ちなみさん! おれはマスターじゃないって〜! 助けてえ〜!」

その声を聞きつけたマスターがゆっくりと姿を現す。その姿は、とても先ほどまで眠っていたとは思えないほど整っていた。

「……朝からずいぶんとぎやかだねえ、キミたち。千奈美さん、僕はここだよ。それは都ちゃんだ、残念だったね」

その声にようやく我に返った千奈美は、ぺたりと布団に座り込む。

「ふみゆ〜……。だーりんもう起きてたんだ……。ごめんね〜都ちやん……」

「えへへ、でもうれしかったな。つーかマスター、毎朝こんな感じなのか?」

「う……まあ……ね。ぼ、僕もイヤじゃ……ないからさ」

「あー! マスターの顔が真っ赤だ!」

「だーりんかわいい〜! ぎゅ〜〜〜!」

千奈美は不意に立ち上がり、マスターを抱きしめる。

「ははは……。それじゃ、2人とも起きたね? んじゃあそろそろ朝ごはんを作り始めようか」

マスターは緩みきつた顔を少し戻し、2人に指示を出す。

「千奈美さんは布団を片付けて、都ちゃんは僕を手伝って欲しい。ま、食器並べしてくれるだけでいいから。わかりましたか？」

「はい！」

昨晩に引き続き、またも声が揃ってしまふ2人であった。

「それじゃだーりん、都ちゃん。行ってきまーす！」

「うん、いつてらっしやい。気をつけてね」

「はい！ だーりんもね！」

足取りも軽く出かけていった千奈美。残されたマスターは、都を連れて店の前の掃除を始めた。

と、そこに髪を無造作に伸ばした青年が現れる。自称バツクパッカー、古賀潤だ。

そんな彼は、開店作業中の2人に馴れ馴れしく声をかける。

「やつ、マスター。それに都ちゃん。おはよーさん」

「おっ、潤くんか。早いんだな」

「まあね。あ、今日からだっけ？ 都ちゃんのHexagramデビュー」

「あつ、そっか……。おれ、今日から実際に働くんだったな」

「楽しみにしてるぜ！ ウェイトレス姿！」

「なっ……。！ からかうなよー！」

「へへっ、耳まで真っ赤だぜ！ ……入ってもいい？」

「ああ、別にいいよ。待つてな、今鍵開けるから」

マスターがドアの鍵を開けると同時に店内へと入っていく潤。

彼が来るようになってから、店内には怪しげなオブジェが目立つようになっていた。

彼曰く『旅先で手に入れたもの』だそうだが、一部に『MADE IN JAPAN』と明記されているものもあり、信憑性には乏しかった。

しかしながら、その変わった雰囲気は功を奏したか、客足は以前

と比べて少しばかり伸びてきたとの事だ。

彼は、一見すると象だかサイだか判別が付かないような木彫りの像の位置を何度も変えながら、誰かに電話をかけていた。

「あー、オレオレ。いや、詐欺じゃなくて。……うん。だからさ……。え？ マジ？ いや、表面温度とか考えたか？ ……あ、その上でか。ああ……。じゃそれで打ち出してみようか。おう、頼んだ。後でブツは用意するよ。んじやな」

潤は満足げに携帯電話を閉じる。そして彼が顔を上げると、マスターと都の姿が目の前にあった。店の前の掃除を終えて、店内に戻ってきたようだ。

「また顕共堂かい？」

「そう。なんか氷がいるんだってさ。ったく、そんなくねー自分で用意しろって話だよ。……まあでも、歴史的な一歩になるのかも知れないけどさ」

「ねえ潤さん、『顕共堂』って……」

突如、マスターの口から出てきた聞きなれない言葉に疑問を覚えた都は潤に尋ねた。しかし……。

「ほれ都ちゃん。仕込みやつちゃおうね」

「あー待って、潤さん！」

マスターに手を引かれ、カウンターの奥に強制連行されてしまう。結局この日は謎の組織『顕共堂』について聞きだすことは出来なかった。

それから数分後……都はウェイトレス姿となって店内に現れた。

その格好を見た潤は立ち上がり、しばし目配せをした後叫んだ。

「うおおお~~~~!!! かわいい！ すっげーかわいいじゃねえか都ちゃん!!」

「ええ？ そうか？ スカートなんて久々ってか幼稚園以来だから動きづれえよ。それにこの服、無意味にひらひらしてっしょあ。あと、なんで頭にこんなのつける必要があるんだ？」

言いながら、頭部のヘッドドレスの位置を気にする都。その位置を調整しながらマスターが続ける。

「ある意味、ここの名物だからね。一回その服着せた子を店に入れてみたら、お客さん来るわ来るわ。みんな好きなんだよなあ、そういう服が。それ以来女性従業員はその服なんだ」

「絵実梨さんもなかなかだけど、都ちゃんもかわいいですな。はっはっは」

「そ、そうかな？　へへっ、なんかうれしいな。そう言われると」
「やや照れを見せながら、その場で軽く一回転を試みせる都であった。

「ま、おおむね好評って事でよかったよ。さて……、今日も開店だ」

時刻はちょうど午前10時。カフェHexagramの開店時間はまさにこの時であった。

第2章：Kidding

「んよーう、潤！」

人の姿がまばらな店内に響き渡る軽い声。そしてそれに反応した声もまた軽かった。

「おーう圭輔！ 例のブツの事か？」

「そそ。用意できたか？」

「いんや、まだだ。あとでコンビニで買うよ。あの透明な、純水でできてるの」

「コンビニのか……。できれば水道水で作ったのがいいんだけどよ」「そうなのか？ 純水の方がいいんじゃない……」

「チツチツチ、お前はまだ顕共堂の事をよく分かってない。とにかく、オレの言う通りにしろ。わかったな？」

「わーったよ。で、数の問題だけど……20個で足りるか？」

「んーまあ、そんなもんだろ。数はアバウトでいいんだよ……って、おおっ！？ そこにいるのは都ちゃんじゃないかあー！！」

店に入るやいなや潤と密談を始めた圭輔であったが、ウエイトレ姿の都を見た途端に彼との会話を強引に打ち切ってしまった。

「いや、かわいいなあ。こんな娘がいたら毎日でも来たくなくなっちゃうな」

「同意！ 絵実梨さんと合わせて、まさに両手に花！ ええですなぐぐへへへへ」

「ほーお？ じゃあキミたちは、都ちゃんや絵実梨ちゃんがいないかなったら、こんな所来てられっかボケ！ とでも言いたいのかい？ そういう事ならこっちにも考えがある」

マスターはしばし考えるように2人の周りを歩き始める。そしてこう言い放った。

「そうだな……。よし、こうしよう。今日から精算の時、キミたちからは通常の3割増しの代金を請求する事にしよう！ うん、それ

「がいい」

「ちよつと待つてよ！ 一人で納得しないでつてば！ しかも3割増しつていやに現実的だから余計怖いし！」

「わっははは！ 冗談さ冗談。特に圭輔くんなんか、いつぞやの音遠ちゃんの時も同じような事言つてた覚えがあるぞ」

「そうだったっけ……。ああ、あの娘もかわいかったなあ……。うおおあああ！！ 今考えてもあいつには勿体なさすぎる！」

圭輔は何かを思い出し、怒りをあらわにした。

「あいつらめ、今じゃキャンパス内で知らない奴はいないつてくらのバカツプルらしいじゃねーか！ くそ……。翔司め、今度会つたら脳を塩素系洗剤に浸してやる！」

「お……。おいどうしたよ圭輔。落ち着けて」

「ふふ……。まだ火はつかないみたいだな」

「むむむ……。い、今はほら、顕共堂もあるし、就活に卒業制作もあるしで、正直そーゆーのでアップアップなんだよね。恋とか愛とか変とかしてるヒマない、みたいな？」

「そうかい。ま、それならわりと自由の利くオレが心置きなく都ちやんと仲良くなれるわけだな」

「えっ！？ ……お、おれと！？ ……がう……。……」

「へへっ、冗談だつてーの！ オレだつて何だかんだで忙しいのさ」

「んだよ、冗談かよ……。あ、そうそう。ずっと気になってるんだけどよ、顕共堂つて……」

「……。あ、お客さんが来たみたいだね。さあ都ちゃん、席に案内してあげて」

「ええ〜！？ またかよ〜！」

都はしぶしぶその客のところに行く。つかえながらも滞りなく座席に案内できたこの瞬間は、彼女にとって初の接客の仕事となつたのだ。

そして1時間が経過した。先ほどから潤と圭輔がおとなしいと思

い、思わずそちらの方を見てしまう都。

彼らは、厳しい顔でノートパソコンに向かっている。

都はその様子を興味深げに見ていたが、さすがに話しかけることはしなかった。

と、その時であった。2人は、突然思い立ったように立ち上がると、そのまま店を出て行ってしまった。会計もせずに。

「あつ、ありがとうございますー！ ……なんなんだよ、さっさと帰っちまって」

「まあ、あの子たちは何かと忙しいのさ。それよりほれ、3番の食器残ってるよ」

「あつ、はいーい！ ……んしょ。くそ、持てるかなこんなにいっぱい……」

都は4、5種類はあった様々な食器を、自分の智恵を絞って安全に持ち運ぼうとした。

まぶしい日差しが店内を包み込む。時はすでに正午を回っていた。その頃、女性客が2人でやってきた。カフェの常連、原田みさきと南野優香だ。

「ハイー！ ……あり？ その子誰？」

「あら……見かけない方ですね。新しく雇いましたの？」

「うん、まあね。詳しい話はその子から直接聞いて。僕ちよっと手が離せなくてさ……」

マスターはカウンターに姿を見せず、奥のキッチンから話しかけてきた。どうやら手が離せないのは本当らしい。

「いらっしやいませっ！ お二人さん、ここにはよく来るのか？」

「まーねン。ねー、お嬢？」

「ええ。おかげさまで、快く利用させていただいてますわ」

「ねね、アンタの名前はなんてーの？」

「おれは神崎都っていうんだ！ そっちは？」

「アタシは原田みさき！ なーんか、アンタとは仲良くなれそーな

気がするのよねー。しくよろねっ！」

「私は南野優香と申します。都さんですね。よろしくお願いいたします」

「みさき姐さんと、優香姐さん、ね。よろしくなっ！……あれ？

もしかしてみさき姐さんは、海斗くんのお姉さんかなにかか？」

「あーら、よく知ってるじゃん。そうよ、アタシはあのバ海斗のおねーさんよー！」

「みさきさん……。自分のご兄弟を馬鹿呼ばわりしてはなりませんわ」

「いーじゃん別に！ マジでバカなんだからさー！」

その頃……。

「……うほつくすそあい！」

「どした？ 海斗。風邪か？ しかし随分変わったクシャミするんだな」

「さあ……わかんねーでっす。もしかして、誰かがオレっちのウワサしてるとか！？ くうう！ 人気者はつれ〜でっすね〜！」

「言ってる、バ海斗が」

「あはははっ！ やっぱり2人ともおもしれえや！ じゃあさ、席に案内するからな」

「うん、サンキュ」

都の案内で、店内のやや奥まった場所にある2人がけの席に座るみさきと優香。彼女らはその直後に都の腕を掴む。

「わっ、何すんだ！？」

「マスター！ ちょっとこの子借りるよー！」

「レンタル料は1時間500円ねー！」

「そんなお金はございませんことよー！」

「……はい、決定。都ちゃん、話そーよ！」

「賛成ですわ。都さん、私どもにいろいろお話していただいただけませんか？ お互いを知るためには、腹を割った対話が一番ですからね」

「がう……。いいのかな？お仕事ほっぽらかしちまうぜ」

「いーのいーの！ どーせマスターがぜーんぶやっっちゃうんだから！ ほれほれ、観念して喋っちゃいなさい！」

こうして彼女は、半ば強制的に2人に自分の身边を打ち明けさせられることになったのだった。

……当然その途中、自分には身寄りがなく、マスターの家に住まわせてもらっている事も話に盛り込む事になったのだが。

「そつ……なの……」

「……都ちゃん。アンタ絶対負けるんじゃないわよ！ 困った事があつたらこのおねーさん達になんでも相談しなさい！ いいわよね、お嬢！？」

「当然ですわ。困っている方に対して見て見ぬふりをするなど、この私のもっとも嫌うことですから」

「あり……がとう……！ ……つたくよお！ このカフェの連中はよお、なんでこんなにお人よしばかりなんだよ……！」

「簡単よ。マスターがお人よしだから。類は友を呼ぶ、お人よしの周りには必然的にお人よしばかりが集まるってことじゃん」

「うふふ……。非常に的を射た回答ですわね」

「姐さん……。おれ……。なんかすっげえうれしいよ……。……つとそうだ。注文、何にする？」

その目に涙をためながら、都は2人にオーダーを聞いた。

こうして、何かといろいろあつた都の初めての労働も、間もなく終わりを告げようとしている。

そんな彼女の額に光るものは、カフェの電灯に反射して美しく煌いた。

「お疲れさん。よく頑張った、偉いぞ！」

マスターが都の頭を撫でると、都は頬に手を当てて顔を赤らめた。
「がう……。なんだか……。すげえうれしいや……」

「さて、帰ろうか」

「うん！」

店の鍵をかけ、裏手に回る。この日は何事もなく、平穩に過ぎようとしていた。

都がカフェで働くようになってから2週間、ようやく仕事にも慣れ始めてきた頃、マスターは彼女にひとつの提案をした。

「どうだい都ちゃん、そろそろキッチンにも入ってみるかい？」

「へっ！？ き、キッチンだって？ ってことは……。おれが料理作るのか？」

「そういうこと。男だから女だからってんじゃない、料理くらい出来ておいた方がいいと思ってるね」

「そうだよ……。うん、おれ、やってみるよ」

「やってくれる？ そうだな……。じゃあまずは皿洗いから始めてもらおうか」

「えっっ！？ なんだよそれ〜！」

このように他愛もない会話が出る、開店直後のHexagramであった。

だが、そんな平穩な空気を台無しにするひとつの存在が、まさに疾風のごとく現れた。

「ぜえ……。ぜえ……。た、助かった……」

「ど、どうしたんだい潤くん？ そんなに息を切らせて……」

「聞いてくれよ！ それがさあ……」

「ふむ」

「ほら、今の時間って10時ちょっと過ぎじゃん」

「そうだね。ここも開店したばかりだし」

「だから……。パチンコ屋に並ぶ人がいるわけ」

「そうなのか？」

「そうなんだよ都ちゃん。でな……？　なんかみんなピリピリしてるわけ」

「……なるほどな」

「マスター、わかったみたいだな。でも最後まで言わせて。……オレはそんなつもりなかったんだけど、なーんか今肩に触れただろとか因縁つけられて……」

「それで逃げてきたのか？」

「そうそう」

「なんだよだらしねえな！　そんな奴、ブン殴っちまえればよかったのに！」

「まあまあ、暴力沙汰はどんな事があってもしてはいけないよ。争いからは憎しみと悲しみしか生まれえないからな」

「そうそう。それに、こんなにかわいい都ちゃんにブン殴っちまえなんて言葉は似合わないって！」

「なっ！？　……がう、潤さんっていつもそう言うのな。うれしくなっちゃうじゃねえかよ……！」

「こらこら、うちのウェイトレスをナンパしないで欲しいな。……しかし潤くん、キミにも特定の相手はいないのか？　こりゃ、圭輔くんと新たにモテないギルドでも結成した方がいいね」

「チツチツチ、甘いぜマスター！　実はもう結成しているのさ！！
『モテないギルド・改』という名称でな！」

潤は両腕を広げながら、芝居がかった声で淡々と言葉を紡いでゆく。

「……その昔、この世には全く女性に縁のない2人がいました。名前は秋野圭輔、そして森野翔司といました」

「じゅ……潤さん？」

「彼らは、その似通いすぎた境遇をお互いに慰めるかのように、自然と惹かれあつていくのでした。そしていつしか彼らは『モテないギルド』なる組合を結成するに至ったのです」

「……はあ、また圭輔くんは変な事を吹き込んだな」

「目には見えないが、最高に固い絆で結ばれた2人は、いつまでもこの状態が続くと思っただけでした。……しかし！」

「はいっ、続きはCMのあと！」

「ちよつと待つて！ CM入らない！ ……コホン」

マスターの茶々にも負けず、潤は再び始めた。

「ギルドの片割れ森野翔司は、あるうことか一人の少女に愛を語り、なんと男女交際を始めるという暴挙に出たのです！ これは同胞、秋野圭輔の心を激しく揺さぶりました」

「ふんふん、それで？」

都は、いつの間にか興味津々に彼の話の話を耳を傾け始めている。それに気をよくした潤はさらに声を作る。

「無二の親友の幸せを祝福した圭輔でしたが、心の傷は癒える事はありませんでした。以来、抜け殻状態の彼は自室に引きこもってしまっています」

「そ……そんな！ 圭輔さんそこまで落ち込んだのか……!？」

「……そんな彼の部屋のドアを、このオレは軽くノックした。そしてこう言っただけさ」

「なんて!？」

「裏切り者の事なんか忘れっちまえ！ そして、このオレがお前と再び『モテないギルド』を結成してやるうじゃないか！ そう、『モテないギルド・改』と名称を改めてな！」

「か……かっこいい……!! 超カツコいいじゃねえか！ 潤さん、マジ男だぜ！」

「はっはっは！ ……オレはあいつを裏切らない。これは本気だ」
「どうだかねえ。都ちゃんをナンパするあたり、疑わしいもんだけどな」

「いやー、アレは社交辞令つつーか、挨拶に近いもんだよ。この広い世界にはな……いろんな形の挨拶があるんだ。もつと世界に目を向けようぜ。……ん？」

そんな風に自己弁護をした潤の携帯がカバンの中で震え始めた。彼はカバンをまさぐり、応対する。

「ああ、オレだ。どうした？ ……マジか！？ それならアレが再現できるな。 ……まだ材料は残ってるか？ ……そうか。もう残っていないか。この目で確認できなかったのは残念だが、これでまた一步前進したって事だな。ともかくでかした！ 今日はオレがカフェで昼飯おごるぜ！」

恐らくは圭輔であろう電話の相手との通話を切った潤は、思わず都に抱きついていてた。

「ひゃんっ！？ ……はっ、離れろお！！」

突然の事に動揺を隠せない都は潤を突き飛ばした。だが、加減をせずに突き飛ばしたため、彼は近くのテーブルに頭を強打してしまっただ。

「……！ ごっ、ごめん！ 大丈夫か……？」

「あたた……。へへっ、オレもまだまだだな」

「ごめんね……。立てるか？」

都は座り込んだままの潤に対して手を差し伸べる。しかし彼はその手を取ることなく立ち上がる。

「いや、必要ない。自分で立てる。 ……もとよりオレは、いつだって一人で立ち上がってきたんだ。都ちゃんだってそうだろう？」

「がっ……？」

「親も、親戚もいないってのにたった一人でここまで帰ってきたんだから。オレ、都ちゃんのそこをすげー尊敬してるよ。都ちゃんはすげえ事をやってのけたんだ、自信を持ちな」

潤の言葉を噛みしめるように聞き入る都。その時、彼女は自分の体温が不意に上昇していくのを感じ取る事が出来たようだ。

「潤さん……。へへっ、照れくせえや。うれしくなっちゃったじゃねえか！」

「まーた顔真っ赤にしちまって。すぐそうなるんだな、都ちゃんは」「う、うん……。 ……がっ」

「……？」

顔を紅潮させたまま、潤から視線を逸らした都。その時、その様子を半笑いで見守っていたマスターが彼女に声をかけた。

「さあ、おしゃべりはここまでだ。そろそろお客さん来るだろうから、準備しといて」

「つて、オレ客だし！ もう来てるし！」

「なにも注文しない人を客と認める気は毛頭ございません」

「暴君！」

「はいはい。暴君だろうが冬將軍だろうが、なんとも好きに呼んでくださいって感じです」

マスターが潤を軽くあしらうと、堰を切ったように続々と客が入ってくる。

「おっ、ゾロゾロと来たな。……いらっしやいませ」

その瞬間、マスターは仕事人へと変貌していた。都も慌てて我に返り、接客をこなしてゆく。

「……へーいへい、オレも圭輔が来るまでおとなしくしてますか」

10月の秋風は、爽やかだった。

「みやびよ〜ん！」

「わーい！ かおりゆ〜ん！」

この日の果緒梨は、珍しく一人で来ていた。そしておもむろに、都と抱擁を交わす。もう毎日の事なので、他の客も気に留めることはなかった。

「ね、今日はなににする？」

「えっとねえ、みやびよんの作ったのが食べたいなあ」

「えっ！？ お、おれの！？ がう〜。マスター、どうしよう？」

「やってみれば？ 実践で積む経験は、練習よりもずっと大きいからね。大丈夫、僕も見てあげられるから。……悪いね絵実梨ちゃん、ちよっとフロア見ててくれないかな？」

「あっ、はい〜」

「よろしくね、おねーちゃん！」
「ありがとうね。それじゃ果緒梨ちゃん、何がいいかな？」
「ん〜……。やっぱ、トリユフパフェで決まりでしょー！」
「かしこまりました。さっ都ちゃん、行こうか」
「待ってるよかおりゆん！ おいしいの作ってくるからな！」
「うん！ 楽しみにしてる！」
マスターに背中を押され、意気揚々とカウンター奥に引っ込んでいく都であった。

それと同時に、店に長身の青年がやってきた。潤の待ち人、圭輔だ。

「おつ、やっと来たなこいつ。待ってたぜ」
「わりーわりー。いやな、一次試験の結果待ってたんだよ」
「なに！？ どど、どうだった？」

「フッフッフ……。見事ダメでしたっつっ！！」
「はあ……。そんなこつたるーと思つたよ。元気出せや。今日とは言わず、明日もオレがおごつてやつからよ」

「いらっしやいませ〜圭輔くん〜。一次、落ちちゃつたの〜？」
「ええ、まあ……。いいよなー絵実梨さんは、すぐ決まっちゃつてね、なんかコツとかないの？」

「コツ〜？ う〜なんだろ〜……。私もよくわかんないけど、面接ではとにかく自分をアピールしていけばいいと思うよ〜？ 自分は〜、一人しかいないんだから〜」

「そ……そうか……」

「あと〜、緊張しないことと〜、身なりを整えることかな〜」

「そりゃな。こんないかにも『浮浪者ですー』みたいなカツコじやアカンべさ。髪くらい切つたら？ それ、都ちゃんより長くね？」

後ろで縛つた圭輔の髪に触れながら潤が言う。圭輔もその点を認めているのか、反論はしない。

「くっ、いつまでも安っぽいプライドなんかにしがみつくんじゃねーって事か……。そうだよな、プライドを捨てるのもまた勇気だつ

てどっかで聞いたことあるし。……サンキユ、絵実梨さん」

「私で役に立てたく？ うれしいな」

「それじゃ明日にでも美容院行つてくつかないかな……」

「あら、美容院に行かれるのですか？」

「ああ、まあ……って優香ちゃん！？ いつからそこに？」

いつの間にかカフェに来ていた優香が、ウエーブ状になった髪を揺らしながら彼らの会話の中に割って入ってくる。

そのことに圭輔が驚いて飛び上がったも、彼女は表情ひとつ変えずに淡々と言葉を紡ぐのだった。

「つい先ほどからですわ。ねえ、古賀さん？」

「お、おう……」

「でしたら、私がよいお店を知っていますわ。もしよろしければ、ご案内をして差し上げますが……？」

「マジで？ そー言やなんか優香ちゃん、最近髪型変えたよな。その店でやってもらったのか？ すげー似合ってるぜ」

「……な、ななっ！？ ……もうっ、からかわないで下さいっ！

……どうしますの？ 行きますの、行きませんか？」

「あー、行く行く。場所さえ教えてくれれば、オレ一人で行くからさ」

「あら、そうですか？ でしたら只今簡単な地図を描きますので、少々お待ちください。……」

優香は小さなバッグの中から紙とペン、そして定規を取り出してせっせと作業を始めた。

彼女はつい最近、生まれて初めて美容院という所に出向き、髪型の大幅なイメージチェンジを試みたのだ。

そのおかげかどうかは定かではないが、以前ほど他人との間に壁を作らなくなった。

そして5分後……彼女は圭輔に紙片を手渡した。

「できましたわ。どうぞ」

「ん。……って、なんじゃこりゃ!?!」

「どれどれ見して……うおっ! マジかよ優香さん!」

「うわ〜、キレイ〜」

彼女の描いた地図は、まるで街角に設置されている道しるべの地図を見ているようであった。

「急ぎ足で描きましたので、少々線がゆがんでしまいました……それでわかりますか?」

「わかるわかる、超わかるよ! マジありがとな!」

「……では、お代として500円いただきますわ」

「おいしいいいい!」

「冗談ですわ。うふふふ……」

「だから現実的過ぎて怖いってば……。しかしホント性格変わったよな……」

圭輔がため息をつくとき、ウェイトレス姿の都がカウンターから姿を現した。その手に持ったトレイには、お世辞にも整った形とは言えないトリュフパフェが乗っている。

「おっ、何だよそのおかしな形の?」

あっけらかんと言いつつ潤。

しかしその言葉は鋭利な刃物へと姿を変え……都を深く深く傷つける。

「お……おかしな……?」

「そーそー。随分前衛的な芸術だよなー、みたいなの? ある意味ウケるってそれ! ……あ、だからお菓子って言うんだな。やー、愉快愉快」

彼の言葉のナイフは、都の心の奥底まで突き刺す。

彼女の怒りは頂点に達し、やがて爆発した。

「ば……ばっ……。……バツキャロー……!!!」

「んどうわっ!?!」

「これ……。おれがかおりゅんのために一生懸命作ったんだぞ!? そりゃ確かにマスターみたいにくまうまはいかなかったよ。でも、

マスターも『初めてにしては上出来だ』って褒めてくれたんだよ！
それなのに……そんな事言わなくなっちゃっていいじゃねえか！！！」
トレイを持つ手を震わせながら、都はさらに続ける。

「ひでえよ……潤さん……！おれ……ずっとうれしかったのに……
！ ウエイトレス姿、似合ってるよとかかわいいとか言ってくれて、
おれすっげえうれしかったのに！！！」

「み……都ちゃん……。オレ、そういうつもりじゃ……」

「言い訳なんか聞きたくねえよ！！！！ ぐすっ……。ぐぐっ……。
ばっ……。バツカヤロ~~~~~！！！！！！ うわあああ~~~~~
くん！！！！！」

持っていたトレイをパフェごと床に叩きつけた都は、号泣したまま
ま店から出て行ってしまった。

「あーらら、やっちゃった。バーカ」

「自業自得ですわ。猛省なさい」

「ちよつとかわいそうだよ……。うう、心配だなあ……。……」
「……」

パシィィ……。ン。

無言で潤の頬を叩いた果緒梨。彼女もまた、カフェを出てゆく。

「みやびよん！ 待って！」

泣きながら走り抜ける都を、果緒梨は必死に追いかける。

だが彼女は、実は走る事が得意ではなかった。

行動はせっかちすぎるほどに速いが、それが運動能力にも作用し
ているとは限らないようだ。

そのため、いくら追いかけても前を走る都との距離を縮める事が
出来ないばかりか、逆にますます差を広げられてしまう。

「はあ……はあ……。みやびよん……。……あ……」

肩で息をしながら立ち止まる果緒梨の隣に一台の自転車が停まる。そこに乗っていたのは圭輔だった。

「追うんだろ？ 乗んな」

「……うん！」

果緒梨を乗せ、圭輔がペダルをひとこぎする。すると通常の自転車とは明らかに違うスタートを切ったではないか。

「うわあっ！ け、圭輔さん！ な、なんなのこれ!？」

「これか？ 文明の利器、電動自転車だ！ これなら坂道もラクラクだ！ 最高速も速いからすぐに追いつけるぜ！」

最近入手したという彼の自転車は、一気に都との距離を縮めてゆき、ついにその距離はなくなった。

「かおりゆん……。それに、圭輔さんも……」

「……圭輔さん、ちよつと外してくれる？」

「わかつてる。んじゃな」

圭輔は多くを語らず、直後に引き返す。

残された親友2人の間には気まずい沈黙が流れていた。

その嫌な流れを断ち切ったのは、都の方だった。

「何しに来たんだ……？」

「みやびよんに……ありがとうって言おうと」

「ありがとう、って？」

「ほら、さっきの。あたしのために作ったって言ってたじゃない。

あたし、すっごい嬉しかったんだから！」

「がう……。だけど、あんないびつな形のやつじゃ、かおりゆん喜んでくれないだろ……？」

「うづん、違う。あたしは、みやびよんがあたしのために一生懸命作ってくれた……。それだけで嬉しかったんだ。味とか形なんか関係ない。料理は心だよ、みやびよん」

「……」

「潤さんが言った事なんか気にしちゃダメだよ。いつもの冗談なんだから。ちよつと心無いけどさ……」

「おれ……潤さんがあんなひでえ事言うなんて思わなかった！この服が似合うとか、かわいいとか言ってくれたのが……なんだか知らないけど、死ぬほどうれしかったのに！」

顔を赤らめながらも、目には涙がたまっている。少しのきっかけで、一気に溢れそうなほど。

「……だから！ さっきのあれを冗談って認めちゃったら……おれがうれしいと思つた事も……冗談になつちやいそうだから！ だから……」

「みやびよん……もしかして……？」

「……それ以上言わないで。まだ、自分で整理できてねえから……。向こうだって、おれのことなんかどうとも思つてないかも知れない。……ぐすっ」

彼女の足元に、黒い点が作られてゆく。一つ、また一つ。

「……だけど！ 少なくともおれがうれしいって思つた言葉だけは……信じたいんだ！ 信じさせて……」

「そうなんだ……。ね、みやびよん。思い切つて、潤さんに自分の気持ちを打ち明けてみたら？」

「えっ……？ なんでだよ？」

「だって……今のみやびよん見てると、凄くツラそうだから……。ため込むより、吐き出しちゃつたほうが楽だよ絶対」

「がっ……。でも……そんな事できねえよ……。おれなんかどうせダメだからよ……」

「どうせ？ おれなんか？ ……みやびよん、まだやってもいないのに勝手に決め付けちゃえるの？」

「う……」

「やりもしないうちから諦めちゃうのは、一番いけないことだよ。やってみなくちゃわからないじゃない。信じてやってみよう、ね？」

果緒梨は都にゆつくりと手を差し出す……が、都はそれを拒んだ。

「……くっ！ ごめんかおりゅん！ おれ……やっぱそんな事できねえ！」

「……バカ！！！」

煮え切らない態度の都に、果緒梨は先ほど潤にしたように平手打ちを見舞う。

都もまた、自分の頬に熱っばさを覚えた瞬間に果緒梨にやり返した。

だが都は加減を知らず、果緒梨は思わずしりもちをつく。

「……察しろよ！ かおりゅん……。おれの事なんか、もう忘れちまったんだな。かおりゅんは……。かおりゅんだけはおれの事わかってくれてると思ったのに……！」

「違う……！ あたしはみやびよんのこと誰よりもわかってるつもり！ だから言ってるの……！」

「うるせえ！！ もう……誰も信じられねえよ！！！」

そこまで言っただけは、頭につけていたヘッドドレスを地面に叩きつけながら立ち去ろうとしたが……先ほど立ち去ったはずの圭輔に阻まれる。

「待ちな。まだ話は終わっていないぞ」

「どけよ！ おれの勝手だろ！？」

「確かにそうだ。どこに行こうとも、それは都ちゃんの勝手だろう。……だったら、ここでオレがキミを邪魔するのもオレの勝手だ。だから、どかない」

「どけってんだよ！ くそっ！」

立ちふさがる圭輔を避けようと目もくも、長身の彼に頭から押さえつけられてしまうと、文字通り手も足も出せなかった。

おとなしく抵抗をやめた都はその場にへたり込み、再び地面に黒点を作る。

「ひぐっ……えぐっ……。どうして……。どうしておれの思う通りになんねえんだよ……。今までは……。ちょっとそ泣きすりゃ誰だって何かしらしてくれたのに……！」

「それが普通だ。この世の中で、自分の思うとおり、事に運ぶ場合なんざ、めつたやたらにあるもんじゃない。全部そうだったらつまんねーじゃん？」

圭輔はひざまづいた都と視線を合わせるようにしやがみ込む。彼女は顔を伏せたまま、動かない。

「苦労して苦労してもがきまくってようやく掴んだその瞬間、本当の達成感と喜びを得る事ができたよ。なんでも」

「……」

「オレだつてさ……今、なかなか就活がうまくいかねーし、すんなり決まっちゃうた絵実梨さんをうらやましく思うよ」

しやがんだまま視線を上げた圭輔は、ため息交じりに漏らす。

「でもさ……絵実梨さんだつてただばわくんってしてるだけじゃない。やる事はちゃんとやってんだ。その辺は果緒梨ちゃん、よく知ってるだろ？」

「う、うん。おねーちゃん凄かったんだわマジで。ほっとんど家にいなかったし、たまにいても勉強勉強ばかりでちよつと怖かったんだから」

「だろ？ その結果がアレだ、今カフェでウエイトレスやって社会勉強してるってわけだ」

「……何が言いてえんだよ」

「都ちゃん。オレはキミが嫌いだからとか、憎いからこんな事してんじゃない。都ちゃんに、もっとすばらしい女性になってもらいたいから仕方なしにやってんだ」

「ホントかなあ……」

「外野、余計な口挟まない！ ……都ちゃんはさ、幼くして両親を亡くしてるから、こんな風に言われた事とかねーだろ？」

「う、うん……」

「だったら余計にそうだ。このままだと都ちゃん、きっと社会に出たらつまづくぜ。今はカフェで働いてるから大丈夫かも知れないけど、あくまでもそれは今に限定しての事だ」

「つつても、先のことなんてわかんねえよ」

「まあそうだけど、将来的な事を考えたら……な。アレだよ、マスターが寛大すぎるから何も言わないだけで、それ以外のところ行ったらボロクソに言われんぜ、絶対」

「がっ……」

圭輔に諭され、都の心は揺れ動く。

不意に通り返した風は、冬を思わせるかのように冷たかった。

第3章：Finding Happiness

その頃、いまだ先ほどの空気が抜け切らないカフェでは、潤が皆から非難の声を浴びていた。

「もーバカ！ 無神経男！」

「都ちゃんがかわいそう……」

「せっかくせっかくみゃこちゃんとすてでいになれたなのに、いないのはさびしいです！」

「潤さん……。あなたは同じ男として許しちゃおけねーです。覚悟はいいですな……？」

「……お、おい海斗！？ お前一体何をするつもりだよ？」

「竜造はちつと黙っててくれです！ オレっちなりの正義を振りかざす！」

海斗はゆっくりと潤の前に歩み寄り、彼の額を指で弾いた。

「……デコピン？」

「オレっちの究極技、10年殺しです。……反省したですか？」

「はいはい、しましたました！ オレが全部わりーんだよ。そうだろ。……どれ、ちよつくら都ちゃんに謝ってくらあ。そこ、どいてくんな」

潤は海斗に弾かれた額をさすりながら、ふてくされた様子でカフェを出て行ってしまふ。

「なによあの態度！ ムツカつくわね！」

「ねーちゃん、珍しく同意見のようですな」

「当たり前じゃん！ ねえみんな!？」

みさきの言葉に、一同はうんうんと頷く。

そんな中、優香が不意に口を開いた。

「とても反省しているようには見えませんでしたわ。昔から……本当に変わらないのね……」

「おりよ？ お嬢、あれの事知ってる口ぶりじゃん」

「ええ、まあ……。古賀さんは私と同じ中学校に通っていただけ。部活も同じでしたわ」

「あんな人がお姉様と同じ部活にいたなんて……。何か変な事されませんでしたか!？」

「瑞奈、落ち着きなさいな。……あの方は少々精神的に未熟な面がありました。部活へ向ける情熱は確かでした。ですから、先ほどあまり大きく言えなかったのです」

優香はグラスの水を飲み干し、さらに続ける。

「高校でのあの方の事は私も存じませんが、いつの間にか彼の興味は諸国漫遊になっていたのです。その過程で、自分なりの哲学を見つけたようです」

「お姉様、グラスお預かりします」

「ありがとうございます。それだけならよいのですが、どうやら彼はその哲学を他人にも押し付けるといふ悪癖を、趣味の過程でつけてしまったようです」

「……だから、自分の思った事をそのまま言っちゃうのね。相手の気持ちとかは二の次にして。……都ちゃんがどんな気持ちでアレを作ったと思ってるのかしら、アイツは!」

「潤くんも、あれは本気で言ったんじゃないと思うけど……やっぱりあれはちょっと酷かったよ……。都ちゃん、素直だから、その言葉のまま受け止めちゃったんだよ」

「うーん……。ミーにはちょっと難しですけど、じゅんさんはみやこちゃんみたいにもっと素直になつた方がよいと思つたです」

何を言おうかずっと考えていたクリスがようやくここで口を開く。彼女は手を上げながら話し始めた。

「じゅんさんも、ホントはミーたちともっとふれんどりいになりたはずです。でも、自分のふらいどがおじゃまして、なかなかそうできない……」

「クリスちゃんの言い分はよくわかるです。……もしあの方が、自分からそうできねーってんなら、オレっちたちがそうできるよう

に働きかけるってのはどうでっすか？」

「そうか？ 結局それじゃ、自分からそうしようと思ってる事にはならないだろ。俺らが口で言うのは簡単だけだよ、それじゃ根本的な解決にはなんねーよ。だろ？ 海斗」

「そーよねー竜造くん。いい子いい子」

「うっ……！」

みさきに頭を撫でられた竜造は直立不動の体勢になり、一気に冷や汗を噴出し始める。

「あらら、ごっめーん」

「ワザとだ……ぜつてえワザとやった……がつ!？」

小声でそう呟いた海斗のつま先を、履いていた靴のかかとで力任せに踏みつけるみさき。彼女がこの時履いていた靴はスニーカーではなく、ハイヒールであった。

「バ海斗は黙ってなさい! ……ま、とにかく。アタシはもうおせつかいは疲れたのよ。それに、自分のためにならないって事もわかったし」

両掌を天に向けつつ、みさきは困惑のジェスチャーを取る。そのどこか達観した表情が、その場にいた全ての者に寂しげに映る。

「だからって見捨てたわけじゃないけどさ、アイツも全然気づかないほどバカじゃないだろーし、アタシらはもうちょい待ってみようよ、ねっ?」

「いたた……。ま、いいんじゃないでっすか?」

「ミーもそうするです!」

「そういうところ、見習いたいです……」

「う……。そ……。そうだ……。ね……」

「ふふっ……。その気風のよい姐御肌は、いつ見ても爽快ですわ」
「な……。なによーみんなして! そんなにアタシって頼りになる? よーし! ここは姐御として、みんなにおごっちゃうもんね!」

声高らかに宣言したみさき。だが彼女の財布の中身は若干の余裕

もなかったりするのだが。

その事実を知っているのは、他でもない弟の海斗だけであった。

(あーあ……オレっち知らねーぞ)

心が大きく揺れ動く都だが、なんとか涙声で圭輔に対して言葉を放つ。

「でも……だつたらおれはどうすりゃいいんだ!? わかんねえんだよ! 自分の気持ちがい……うぐっ……」

「わからなくなっちゃった。……ただ、逃げるなど。わかんないでもいい、その気持ちから目を背けるな、と。……なあ都ちゃん。何が一体キミをそうさせた?」

「わかんねえ……わかんねえよ!! 自分の気持ちから逃げるなどか簡単に言うけどよお、じゃあどうすればいいってんだよ!! それがわかんねえって言うてるじゃねえか……」

「そんな事はない。出来ないってんなら、それは心がないって事になっちゃう。だつたら都ちゃんは、ロボットか何かかって事になるぜ。違うだろ? 都ちゃんは立派な人間なんだろ?」

「……近づくな!」

詰め寄ってくる圭輔から逃げるように後ずさりをする都。

だが、彼女の背後には巨木が控えており、これ以上は後退できない。……と、その時だった。

「やめて! 圭輔さん!!」

2人の間に果緒梨が割って入る。先ほどから2人のやり取りを離れたところで見守っていたが、たまらず駆け寄ってきていた。

彼女は都を抱きしめると、圭輔の方を向いてこう言った。

「もうやめてあげて……ね? みゃびよんは今……いろんな事が起こりすぎて、自分の中で整理が出来てないんだよ」

その懇願するような表情に、思わず後ずさりをする圭輔であった。

「あたしも……さっきまでわかってあげられなかったね……。ごめんね……ホントにごめんね……」

「かおりゆん……」

「……わり、また空気読めてなかった。果緒梨ちゃん、あと頼むわ。……あれ、潤？」

圭輔がその場を立ち去ろうとして振り向いたら、彼の視界に潤が入ってきた。

「ここにいたのか……探したぜ」

できるだけ穏やかに話しかけたつもりだったが、果緒梨は潤を明らかに敵視していた。

「何しにきたの？ 今更」

完全に感情を押し殺した声で尋ねる果緒梨。潤は額に手をやり、おどけた様子でため息交じりで言う。

「……へへ、ずいぶん嫌われっちまったもんだな」

「当たり前じゃない！！ 元はと言えば潤さんが、みやびよんの気持ちを踏みにじってあんな事言うからじゃない！」

「みなまで言うな。わかってるよ、オレが悪かった事くらい。だから……」

言いながら彼は跪き、頭を地面に触れさせる。

「都ちゃん……すまなかった。今更許してくれなんて言わないけど……オレなりの誠意を伝えたい」

その言葉とともに彼は頭をあげ、一気に地面に叩きつける。……何度も。

「潤！？ お前っ……」

さしもの圭輔も、彼のこの行為には驚きを隠せない。

数回繰り返した後、彼はその行為をやめる。だが、土下座の体勢は崩さない。

彼の額からは、うつすらと赤い液体が漏れ始めてきていた。

「潤さん……。そこまでしなくなつて……」

「いや、こうでもしないとオレの気が済まない。こんな事しても意味ないって言われるのも覚悟している」

「バツカみたい。みやびよんがどう思おうと、あたしは絶対許さな

いからね」

ここまでやってても、果緒梨には誠意が届かなかった。かけがえのない親友を傷つけられた怒りは、この程度では消えなかったのだ。

「やっぱそつだよな。だけどオレにはこれしかできない。だから……オレの気が済むまでこうさせてやってくれ……頼む」

彼はまだ頭を上げない。そのままの体勢で、嫌な沈黙が流れていた。

「……かおりゆん、離して」

不意に都は潤に近づき、彼の頭を支えて自分の正面に向けさせる。

「都……ちゃん……？」

「やめてくれよ……。そんな事されてもおれ、なんて言っていないかわかんねえからよ」

「何も言わなくていい。ただ、オレが悪いんだからその罪を償わせてほしいだけなんだ」

「お願いだからもうやめて……。悲しくなるから……」

「潤さん、またみやびよんを泣かすの？ 次そんなことしたらどうなるかわからないよ」

「……わかった」

潤はここでようやく立ち上がり、都と視線を合わせる。

「あれからよく考えてみたんだ、潤さんが言ったことを。潤さんは何の気なしに言っただろうに、おれが大げさに考えちまったから、こうしてみんなにすっげえ迷惑かけてるんだって」

都が初めて自分の手で作り上げた、彼女の気持ちが進められたパフェ。

潤はそれを、形が悪いからという理由で笑い飛ばしてしまった。その行為にショックを受けた都が泣きながら店を飛び出してしまったことが、事の発端だ。

だが、逃げているうちに、自分にも責任があると思いはじめてきたようだ。

「かおりゆんとか他のみんなは、潤さんだけが悪いように言うけど、
だったらおれだって同じように……ううん、おれの方が悪いよ」

「どうしてだよ。オレがあんなこと言わなければこんな事には……」
「潤さんは自分の率直な感想を言ったただけだろ？ だったらおれは
それをバネにしなくちゃなんないのに、ブチキレて飛び出しちゃっ
たから……」

「……だったら、このままじゃダメだよな」

潤は傍らに置いていたカバンから先ほど都が手放したヘッドドレ
スを取り出し、もとあった場所に戻す。

「へへ。かわいいぜ、都ちゃん。やっぱ、都ちゃんはこうでなくっ
ちゃ」

「……っ!!」

限界だった。都はあふれる想いを全て彼にぶつけていた。

「……潤さ〜ん!!」

「うごっ!?!」

(何い!?)

(うわわ〜……)

嬉しさのあまり潤に抱きつき、口づけをした都。

「おれ……。またひとつ幸せ見つけちゃった……! それは……、
好きな人が出来た事!」

「えっ……?」

「おれ……潤さんの事が好き! だ〜い好き!!」

「うごああっ!?!」

そのあふれる想いを表現する都を、潤は必死で受け止めようとす
る……が、彼女の想いの強さを全て受け止める事は出来なかった。

「あ……あんにやる!! 何てうらやまし……じゃなかった。『モ
テないギルド・改』はどうなっちまうんだよ!?!」

「みやびよん……よかったね。……ねえ、圭輔さん? なんか悔し
いから、あたしたちも付き合っちゃおう?」

「な、何っ!?! ……かつ、果緒梨ちゃんさえよければオレは全然

オツケーだよ!!」

「うっそぴょくん うっさぴょくん おもちつき」

「なんだよそれ、きめえ!! はあゝあ……また先越されっちまった……」

子供のように喜びを表現する都を見守りながら、2人は小さく微笑むのだった。

「たっだいまゝ!!」

「はあ……はあ……」

満面の笑みでカフェのドアをくぐる都。その右手は、潤の左腕を掴んでいた。どうやら先ほどまでいた場所からずっと引つ張ってたようだ。

「お帰り、都ちゃん。自分の気持ちに、整理はついたかい？」

職務を放棄したはずの都を咎める事もせず、マスターは彼女に優しく語りかける。

「もっちろん！ その結果は……こーゆーこった!! ……うりやつ！」

「うっ……!!」

言いながら都は、潤にキスをする。あまりにも突然の出来事に、さしものマスターも動揺を隠せないでいた。

「い……いつの間に……？ 圭輔くん、また先を越されちゃったじゃないか」

マスターは、いつの間にか戻っていた圭輔に哀れみの目を向けながら言った。

「くっ……。恨むぞ潤!!」

「うっせーよ。こうなっちまったもんは仕方ねーだろ。……都ちゃん、そろそろ離してくれないか？」

「がうゝ……。うん」

残念そうに彼との接点を経つ都。仕方なく、マスターの隣に行く。「今日はもう疲れたろ。あがっちゃっていいよ。……ほい、鍵。自

分の部屋で休んできな」

「いいのか!? ありがとっ! ……潤さん、呼んでいいかな?」

「彼の都合聞いてからね」

「うん! ……ね、潤さん。今日この後、何もねえよな?」

「……いや、わりー。ちよっとやる事があるんだ。……な、圭輔」

「へ? ……ああ、そうだったな」

「そういう事だ。それに……マスターに迷惑かけてもアレだしよ。

だから今日はごめん、な?」

「でも……! その額の傷も、治してあげたいんだよ……! おれのせいでそうさせちまったんだから……!」

「いや、いい。こんなの、なめときゃ治る。それより、今度この埋め合わせはするから。……じゃ圭輔、行くぞ」

「……おう」

潤は圭輔を連れて、足早にカフェから出て行く。

「なあ潤。なんなんだいったい? 顕共堂か何か?」

2人はカフェから少し離れた公園のベンチに腰掛けていた。

「それでもいいよ。とにかく……あの場から離れる口実が欲しかった」

「はあ? どういうことだよ?」

「都ちゃんだよ。オレを好きになってくれた事は正直嬉しいよ。だけれどよお、あんな事になるとは思わなかったんだよ!」

「あんな事、とは?」

「だから……その……なんだ。都ちゃんが、オレに向ける気持ちの……大きかったの? 正直、オレにはでかすぎる。全てを許容する事なんてできっこない」

「くけえーっ! このわがまま小僧! せっかくあそこまで好きになっってくれる相手が見つかったのにそういう事言つかあ?」

圭輔は心底呆れていた。そして、なんと贅沢な悩みなのだと絶望していた。

「今どきいねーぞ？ あんな風に素直に自分の恋心をぶつけてくる娘なんて」

「圭輔！！ ひがんでんじゃねえよ！！ こっちは真剣なんだよ、察してくれよ！ それだけじゃねーんだよ。まだあるよ」

「なんだよ？」

「ほら、一応オレらって『モテないギルド・改』の盟約を結んでるわけじゃんか。そんなオレがお前を裏切るなんて……人としてありえねーだろ？」

「ぶ……っははははははは！！ おっお前、本気でそう思ったのかよ！？」

「おい、いい加減にしろよ。そうだよ、こっちは本気でそう思ってたよ。バカな事だとは知りつつな。けどよ、そこまで笑うこたねーだろ！！ こっちは真剣に相談してるんだ！」

「……笑ったのは謝ろう。だがな？ お前はひとつ見落としている事がある」

「見落としてる事？」

「都ちゃんの気持ち、だ。さっきのは、お前を茶化して言ったわけじゃない。だったら、お前に好きだって言ったあの娘の気持ちは一体どうなっちゃうんだ？」

先ほどまでの緩みきった表情を一変させ、まっすぐに潤を見据える圭輔。

「気持ちがかすぎる云々言う前に、そっちの方を考えるのが先決なんじゃないのか？」

「オレの気持ちも考えてくれ……頼むから。このまま付き合ったら、きつとオレも都ちゃんも満足できない。オレがそんな気分じゃないしな」

潤は圭輔から視線を外し、呟くように言う。

「それに、そんな奴とあの娘を付き合わせたくない。あの娘には、もっと広く世界を見てもらいたいんだ。今まで……かなり狭い世界で生きてきたみたいだからよ」

「確かに、な。言っちゃ悪いが、あの娘は常識が欠落してる。だからオレ、言っちゃったよ」

「そうか……。まあ、オレなんかよりもっと素晴らしい男はたくさんいる。もしそういう奴が見つかったらそいつに乗り換えりゃいいし、見つからなかったらオレが覚悟を決める」

「潤……。お前、結構考えてたんだな。思いつきであの場を抜け出したのかと思っただぜ」

「甘いな。オレはこう見えて結構思慮深いんだぜ。自分で言うのもアレだけど。……。まあ、なんだ。都ちゃんは焦りすぎてるよ」

「焦りすぎ？」

「考えてもみる。オレらはまだ、あの娘と出会ってから2週間程度しか経ってないんだ。そんな短い期間で全てを知る事が出来るか？ できねーだろ？」

「まあ、無理だ。四六時中一緒にいるってんなら話は違ってくるかもしれないが」

「だから、あの娘はオレの表面しか見えてないんだ。オレだって都ちゃんのことよく知らねーしさ」

「……。わかった。確かにそうだ。今付き合ってもうまくいかねーって思ってるんなら、ちよつと時間空けたほうがいいのかもな。……。で、どうするんだ？」

「しばらく距離置いて、適度な温度になるまで待ってみようかって思ってる。みんなには逃げとか思われるだろうけど、んな事気にしてちゃやってらんねーし。またどっか行くかな……」

「お前はそれができるからなあ。不自然さがないし。どこ行くんだ？」

「うーん……。今回は旅すること自体が目的じゃないから、サツと済むような近場でいいんだよな。……。よし、決めた」

「おお！……。オレも連れてって」

「バーカ。何が悲しくて野郎2人で諸国漫遊しなきゃなんねーんだよ。それにお前さんには、就活とか卒業制作だかあんだろ？ そう

いづのから目を背けてもいいのか？」

「て、てめえ……。自分の事は棚に上げやがって……。！」

「決まりだな。……。じゃあ、話を戻すぞ。オレはもう、今週末には現地に飛ぶ。いつ戻るかは分からない。都ちゃんにはうまいこと言っておいてくれや。あの子、携帯持ってるねーだろ？」

「そうだな……。連絡手段としたら直接カフェ行つて伝えるしかねーからな。よし、オレがその役割引き受けてやるよ。さっきの件についての詫びつてわけでもないけどさ」

「恩に着るぜ、ありがとよ」

男2人は拳を突きあわせ、握手を交わす。そして圭輔はカフェに戻つていった。潤はそんな彼を見守るのだった。

夕焼けの向こうに消えた親友の背中、どこか哀愁を漂わせていた。

翌日から、潤はカフェに現れなくなつてしまった。その真相を知るのは圭輔のみだが、彼は言う機会を見計らつていた。

もちろん、毎日のようにカフェにいる都が気にならないはずはない。だが彼はまだ言わない。

都が苛立ちを募らせるまで、その時間はかからなかった。

「あ~~~~~!!! 潤さんはいったいどうしちゃったんだ!」

風呂場に響き渡る都の怒声。そして、水面を握り拳で殴る。

それによつて発生した水しぶきは、不運にも彼女の目を襲つこととなつた。

「……いつてえ〜! たくよお! なんてこうなんだよおお!!」

彼女の怒りの原因は、自分の幸せのパートナーになつたはずの潤が、ここ最近カフェはおるか誰の話題にも上がらない事をよく思つていないからだつた。

「つたく……。なんでだ？ 潤さん、おれじゃダメなのかな……？
おれ、自分で言うのもあれだけどスタイルは悪くないと思うんだ
けどな」

揺れる水面越しではわからないが、確かに彼女の体型はなかなか
見ごたえがあるものとなっている。

「そりゃ優香姐さんとかクリスには敵いそうにねえけど、かおりゆ
んには負けてないはずなのに……。はあ……。逢いてえよ」
！！ 潤さ～～～～ん！！

そこまで言っつて、鼻の下まで湯につかる都。再び握り拳を作り、
怒りや不安の入り混じった感情を湧き上がらせている。

翌日以降も、やはり潤はカフェに現れることなく正午が過ぎてい
った。

都はたまらず、キッチンから戻ってきた絵実梨を捕まえて問い詰
めた。

「なあ絵実梨さんっ！！ 潤さんのこと、何か聞いてない！？」

「わっ、知らないよ。あの子のことだから、またどこか行っ
ちやったんじゃないの？」

「マジかよ……！ ひどいぜひどすぎるぜ潤さん！ おれを置いて
いくなんて……！ おれを連れてってくれたのなら、あっちで潤さ
んとふたりつきりになれたっつてのに……！！」

「でも、まだそうと決まったわけじゃないよ？ 体調崩して寝
込んでるのかも知れないし」

「だったら、おれが潤さんの看病をしてあげる！ 完全に治るまで、
ずっとそばにいてあげるんだ！」

「すごいね。都ちゃんは、ホントに潤くんのが好きなんだ
ね」

「もっちらん！ だって……キスだってしちゃったんだもん……。
がう」

「うっ、都ちゃんがかわいくてたままないよ。なでなで」

「あゝ……、早く逢いたいなあゝ……」
天井を見上げながら呟く都。カフェの中には、誰もいない。

いつもの常連客が顔を見せ始めたのは、間もなく日が暮れようという午後5時を回ってからであつた。

すっかり日に焼けた2人が、心地よい疲労の色を見せながらやつてきた。

「いらつしゃいませつ！ あつ、海斗くんに竜造くんじゃねえか」

「ちつす、都ちゃん。頑張ってるみたいでつすね」

「おうよ！ そつちも頑張ってきたみてえだな」

「そうでつすね。しつかし、こいつが思いつきり投げってくるもんだから、捕るオレつちは手が痛くて痛くて」

「へへ。すげえんだな」

「う……」

「んー？」

都は訝しげに竜造の顔を覗き込む。その途端、彼の額から大量の汗が噴出してきた。

「わわつ！ ちょ、大丈夫かよ！？ ……おしほり持つてくつから待つてな」

「別にほつといてもいいんだけど……。いつもの事だし」

「うう……。め、面目ない……。はあ、なんで俺つてこうなんだろうな……」

「竜造、おまえはもーちつと女の子に慣れるべきでつす。あんな事があつたのは深手かもしれねーでつすけど、そんなんじゃこの先やつてけねーでつすよ！」

「わかつてるなら……。口を挟まないでくれ……。あれだけはまだ……消せない……」

「そうだ！ オレつちのねーちゃん貸すから、それで慣れるといい」
「みさきさんを……。？ そんな事言つていいのか？」

「いいでつすよ、あんなバカ女のことなんか。聞いてくれよ！ 最

近ガサツさにさらに磨きをかけやがって、まさにテレビでやってる片付けられない女そのものでっすよ!」

「や、やめとけよ……」

「あんなのを飼育してるオレっちの身にもなってくれって感じですよ。あ、あれじゃ女の子に慣れるなんてできなさそうだ。だって、もはや女の子って言えるトシじゃねーでっすから」

姉がいないのをいいことに、ここぞとばかりに暴言を並べる海斗。しかし竜造は、その余りある殺意を敏感に感じ取り、海斗から離れてゆくのだった。

「あれ？ 竜造、どうして離れるでっすか？ ……って、後ろから殺意のオーラが……?」

「俺、さっき止めたからな」

「りゅ、竜造……! あのグラウンドで交わした誓いを忘れたでっす……か……」

言い終わらぬうちに誰かに肩を掴まれた海斗は、観念して後ろを振り向いた。

するとそこには、口は笑っているが目は笑っていないという表情の姉、みさきがいた。

彼女は海斗を掴む手を離すと、ボキボキと指を鳴らしながらゆっくり近づく。

「か〜い〜と〜……! アンタって奴は、いつになったらその減らず口が治るのかしらね……!?」

「も……申し訳ねえでっす……。だから……ヒールの部分で足踏むのだけはお願いだからやめてくれでっす……」

「やめてやるわよ。踏んづけてたら、アンタを蹴れないじゃないの、よっ!」

「がはっ!?!」

みさきは海斗のすねの部分に乱暴に蹴り飛ばした。たまらず苦悶の表情を浮かべる海斗に、更なる追い討ちが降りかかる。

「い……いてえ……。……ぐっ!?!」

「反省の色なし、ね。来なさい」

「竜造……。都ちゃん……。ま、マスター……。助けて……」
「だ……。ま……。りなさい！ ふんぬっ！！」

ガキヤアアアア！！

通常の殴打では考えられない音を発生させたみさき。

その被害を受けた海斗は、力なく倒れこんだ。そして彼の首根っこを掴み、外に出てゆく。

しばらくの間、海斗もカフェに姿を見せなくなったのは言うまでもない。

「海斗……。お前こそお姉さんに慣れるや」

「すっげえ……。さっすが姐さんだ……。っと、ほれ、おしぼりだ。汗拭きなよ」

「あ……。あり……。がとう……」
期せずして都と二人きりになってしまった竜造。

マスターはこういう時の空気の読み方に定評があり、普段は取らない休憩を取っていた。

もちろん、絵実梨にも店長権限で休憩を無理矢理取らせていた。

「……。なあ、そんなにおれがダメか？」

「いや……。都さんがダメってわけじゃないんだ。恥ずかしいけど……俺、家族や親戚以外の女性が近くにいるとどうしても……。こうなっちゃうんだ」

「なんでだよ？」

「……。話さなきゃダメなのか？」

「いや、無理ならいいよ。ごめんね」

「謝る事はない……。元は俺が悪いんだし」

「……。あのさ、もしよければいいんだけど……。おれで少し慣れてみねえか？」

「慣れるって……。どうして？」

「だってよお、カフェには女の子いっぱい来るのに、学校にだって女子いるんだろっし、そのたんびにそうなってちゃ竜造くんだって体もたねえだろ？ それに……なんか悪い気がしてさ……」

「う……。そ……。それでいいのか……？」

「いいんだよ！ おれが言いって言ってんだから。……よし！ 竜造くん、次の土日ってヒマか？」

「え？ まあ……。自主トレだから空けようと思えば空けられるけど、どうしたんだ？」

「そりゃいいや！ おれとキミの2人だけでどっか遊びに行こうぜ！」

「……え！？ 2人だけで!？」

「うん、2人だけで。おれ、土日は休みだから。……潤さんもいねえし、さみしいんだ……」

「え……。えつと……。お、俺は……。別に……。いい……。よ……」

「そんじゃ決まりだな。土曜日に行こうぜ」

「早っ……。でも、どこ行くんだ？」

「それなんだよ問題は！ ほら、おれってついこないだこっち戻ってきたばかりだからよ、まだどんな場所があるか全然わかんねえんだよ。竜造くんはそういうの詳しいか？」

「いや、残念ながら全く知らない。行くとしたら、このカフェくらいだよ」

「っちや〜……。それ厳しいな……。なあ絵実梨さん、なんか知らねえか……。つていねえし。ねー絵実梨さん！ ちょっと来てー！」「な〜に〜?」

休憩に入るのも唐突なら、それが終わるのも唐突だった。

絵実梨は店内から呼ばれ、マスターに淹れてもらったコーヒーを中途半端に残しつつフロアに現れる。

「どうしたの〜?」

「絵実梨さん！ おれたち今度の土曜日に遊びに行くことにしたんだけど、揃いも揃ってここ以外に遊べるところ知らねえと来たもんだ。

だから聞こうと思って」

「うっ……。私も、オーシャンズオリエントくらいしかわかんないよ」

「何それ。すげえ気になんだけど」

「知らないの？ そこね、おっきな遊園地なんだよ。いろんながあるし、広いし、デートスポットにはもってこいだよ」

竜造は絵実梨の『デート』という言葉に一瞬背筋を凍らせたが、誰にも気づかれなかった。

「でも……。休みの日は人いっぱいいるから、すっごく並ぶよ？」

「じゃダメだ。おれ、並ぶのキライだもん」

「俺もだ。並んでる暇があるならその間に出来ることをしたい」

「さて困ったぞ。どうするかな……。って、あんたは優香姐さん！」

3人の近くにはいつの間にか優香が佇んでいた。

このあとの彼女の提案が、都たちの行く先を指し示す事になった。

第4章：Substitution?

3人の前に突如として現れた優香は、マイペースで近くのテーブルに落ち着き、小さく微笑んで挨拶をする。

「こんばんは、お三方。ご相談ですか？」

「う、うん。土日、遊びに行く事にしたんだけど」

「あら、そうでしたの。ですが、都さんはこちらに戻ってきたばかりで、遊ぶ場所など存じませんか？」

「そうなんだよ……。だから悩んでんだ。なあ優香姐さん、どこか知らねえか？」

「……申し訳ないですが、私もそちらの方は疎いので。みさきさんならば詳しいでしょうが……」

「みさき姐さんか……。さつき帰っちゃったからな……」

「でしたら、私の方からみさきさんに打診してみますわ。少々お待ち下さい……」

「マジで！？ ありがとう……って、何それ!？」

都は、優香が取り出した異様な物を見て素直に驚いた。

どうやら携帯電話のようだが、それに付属しているアクセサリなどがあまりにも多いので、電話機本体がどこにあるか一目では判断しづらかった。

「もしもし……。はい、私です。あの……突然なのですが、この辺りで遊べるような所を知りたいのですが……。はい、カフェとオーシャンズオリエント以外で」

「なんかあるといいけどなあ。な、竜造くん？」

「あ、ああ」

「はい。まあ……そのような場所がありましたの。初耳でしたわ。……ええ、大丈夫でしょう。ありがとございました。今度カフェでコーヒーをご馳走いたします」

「わあ、優香ちゃんがおごるなんて、めったにないよ」

「……もうっ、ほっといて下さいな。それでは、ごきげんよう」
通話を切った優香は3人の方を向き、小さな笑みを浮かべながら言う。

「さすがはみさきさんですわ。この近くにショッピングモールなる場所がある事を教えていただけました」

「ショッピングモール……ねえ。心当たりある？」

「話だけは聞いたことがある。確か……ベイサイドアベニューっていう所かと」

「え……？ ……っえ？ なんだそりゃ？」

「ベイサイドアベニューとは平たく言えば商店街ですが、それではあまりにも味気ないのでそういったハイカラな名称にしたのでしよう。まあ、それなりに楽しいところだとは思いますが」

「その割には、あまり勧めてるようには聞こえなかったよ？」

「そ……それは……。あ、あそこに行きますとどうしても……財布の紐がゆるくなってしまふので……」

「あはは。優香ちゃんらしいね」

「まあでも、あのみさき姐さんが一押しってんなら間違いないな。よっし決まりだ！ 竜造くん、土曜はそこ行こうぜ！」

「あ、ああ……」

「あら？ 都さん、お一人で行かれるのではなかったのですか？」

「うん、そうだよ。おれ、竜造くんの女の子嫌いを治してやりてえからよ、ちよっと一肌脱ごうかって」

「そうでしたの。健気というか……いじらしいというか……」

「そうかな？ 竜造くんに教えてあげたいんだ、女の子はそんなに怖がるもんじゃねえって事をさ。それに……」

「それに？」

「がっ……。お、おれ自身男の子の事よく知らねえしさ、ちよっどいい機会なのかなって……」

「ま、まあ……何にせよ、俺のために何かしらしてくるって事みたいだからさ、ありがとう。俺もよくわからないけど、よろしくな」

「おう！ よろしくっ！」

その声とともに、都は竜造の手を取った。そして竜造の様子を伺う。だが彼には動揺の色は見えなかった。

「……大丈夫なの？」

「……大丈夫だった。やっぱり少しずつではあるけど慣れてきてるみたいだ」

「そうか……？ それってアレだよな、竜造くんがおれに心を開いてくれたって事だよ……。へへっ、なんかうれしいな」

鼻の頭をかきながら照れ笑いを浮かべる都。竜造はそんな彼女のしぐさに見とれてしまっていた。

そして土曜日を迎えた。2人はカフェの前で待ち合わせをしていたが、約束の時間になっても都は現れない。

腕時計で確認したその時刻は、すでに約束の時間を10分ほど過ぎていた。

「都さんおっせーなあ……。まだ寝てんのかな？ それとも俺が早く来すぎちゃったのかな？ ……よっし！」

何かを決心した竜造は、カフェのドアの硝子に映る自分の姿に向けてシャドウピッチングを始めた。

生粋の野球好きである彼は、暇あらばこうして肩慣らしをしているとの事だ。

……その時、カフェの裏手からドアの開く音とともに人影が姿を現した。その人影は、紛れもなく都その人だった。

「わりい！ 待った？」

「いや、今来たところだよ」

「ウソつくなよ！ 待ってたから投げる真似してたんだろ？」

「……当たり前。本当は15分くらい待った」

「ごめんなーマジで。昼メシおごるからさ」

「いや、いいよ。てか、出せるのか？」

「へへーん。実はマスターからおこづかいもらっちゃったから余裕あるんだぜー」

「へえ、よかつたな。……立ち話もなんだからさ、そろそろ行くところよ」

「あ、そうだな」

2人は肩を並べて歩き始めた……が、身長差があるため、本当の意味で肩を並べることは出来なかった。

しばらくとりとめのない話をしていたら、不意に竜造が都を引き寄せた。

「……つと、危ないぞ」

「わわっ……！」

その直後、自転車に二人乗りをしていたカップルが通り過ぎていった。都は胸に手を当てながら言う。

「あつぶねえな……あいつら。2ケツであんなスピード出しやがって」

「都さんもね。鈴鳴ってたの気づかなかった？」

「そうだったけ？ ……でも、ありがとな」

「ん、いいよ」

そう言い残すと、竜造はさっさと歩いていってしまふ。

「あっ、ちよっと待てよー！」

程なくして彼らは目的地である『ベイサイドアベニュー』に到着していた。

数年前に新しく出来たここは、連日のように買い物客でこった返している。

「うっわ、すげえ所だなこっつて……。てか、あのステージなんだよ!? イベントでもやんのかあ？」

「かもな……。俺もよく知らないよ、あまり行った事ないし」

「手探り状態……ってやつか。へへっ、おもしれえじゃねえか！」

宝探しみてえでさー！」

「そんな発想ができる都さんがうらやましいな。……まずどこに行く？」

「えっと……。まあ、適当にいろいろ入ってみようぜ」

都は竜造の手を引き、本当に手当たり次第にいろいろと入っている。

そして、特定のブランドのみを取り扱った専門店ですべて足を止めた。

その落ち着いた雰囲気は、Hexagramにも負けていなかった。

「うっわ、こんな店があるんだ……。交響曲？　ここで扱ってるブランドなのかな……」

「なんか婦人服ばかりのように見えるよ。それじゃあ俺は入っても意味ないな」

「えー？　せつかくだから入ろうぜ。それにさ、何かおれに似合いそうなの見繕って欲しいし」

「えっ！？　俺が！？」

「だっておれわかんねえもん」

「それは俺だって……」

「何でもいいんだって！　それこそ直感で！」

「だったら都さんが直感で選べばいいのに……」

都は、戸惑う竜造の背中を押しながら店内に入る。

「ほれ、もう逃げられないぜ！　さあさあ、選べ！」

「なんだよそれ……。じゃあ、これ？」

竜造は、店内の独特な雰囲気戸惑いながらもひとつの商品を指差した。

それは薄茶色の、小さなベレー帽だった。

「帽子？　服じゃなくて？」

「何でもいって言ったのはそっち。苦情は受け付けられないぞ」

「確かにそうだけだよ……。じゃいいや、それにするわ。貸して」

都はその帽子を取ると、スタスタとレジカウンターに持っていつてしまう。

「あっおい、試着とかしなくて大丈夫か？」

「いいよそんなの、めんどくせえもん」

「いいのかわ……。それで似合わなくても文句言わないでよ」

「文句なんか言うかよ。竜造くんがおれのために選んでくれた物だもん、大切にしなきゃな……」

「……へ？」

「同じ事は2回も言わねえよ！ ほら、買ったから次行こうぜ」

購入した帽子を小脇に抱えながら店を出る都。そしておもむろに被り始めた……が、どうやらサイズが合わないようで、なかなか被れないでいた。

「くっそ、キツいな……」

「だから言ったじゃん……ははっ！」

「あっ！ 笑うなんてひでえな！」

「や、違う違う。被るんならそれ外そうぜ。タグとか値札とか」

「あ、ホントだ。んだよあの店員、これくらい切ってくれてもいいのによ。……うりゃ！」

都は、帽子についていた値札を結んでいた紐を歯で噛み切った。

野性味あふれる彼女らしい行動ではあったが、その様子を目の当たりにした竜造は若干都を見る目を変えた。

「へへっ、これでどうだ？」

「い、いいけどさあ……。女の子だったらもーちよい方法が……」

「なんだよ！ 男だから女だからなんて関係ねえだろ！？」

「ま、まあそうだけど……」

「じゃいいじゃねえか。ほら、次行こうぜ！」

帽子を被り直した都が次に向かった先は、小物を扱う店だった。

どうやら、この店で取り扱うものは全て315円（税込）で買えるらしい。

小さいながらもさまざまな品物を扱うこの店に、都はすっかり心を奪われていた。

「わわっ……。やべえやべえ！　ここすげえよ！　これ全部3000円なのか！？」

「みたいだな。最近こういう店増えてるよな。ここでも何か買おう……って、あれ？」

竜造が都に話しかけようとしたら、もうそこには彼女の姿はなかった。

はぐれてしまったのかと慌てて周囲を見ると、ちょこまかと店内を駆け回る都の姿が確認できた。

「なんだそっちか……。女の子の好みはわかんねーや」

居心地の悪くなった彼は店から一步下がっていた。都が戻ってきたのは、それから20分が経過してからだった。

「待たせたな、ごめん」

「いや、いいって。それにしても、随分買ったな」

「へへっ、まあな。帰ってつけるのが楽しみだぜ。……う」

そこまで言ったところで、都の腹は情けない声を上げた。彼女は赤面してうつむいてしまう。

「がうう……。恥ずかしい……」

「ははっ、もう12時だもんな。腹減ったんだろ」

「う、うん……。だったらメシにしねえ？　竜造くんも腹減ったろ？」

「ん、まあな。じゃあ昼メシ食うところ探そうか」

「うんっ！」

それと同時に、都は竜造の腕を掴んでいた。

「うおっ！？」

「あっ……！」

2人はお互いに驚き、距離を取る。だがすぐに都が口を開いた。

「ごっ、ごめんよ……。いきなり……。汗出てるぜ、大丈夫……？」

「あ……ああ……。さすがに腕掴まれるのは……ヤバかったけどな」

「がう……。なんでこんな事しちゃったんだろ」

「古賀センパイが……。いないからじゃないか？」

「えっ……？」

竜造がそう呼ぶ人物とは、潤のことである。

「ほら、都さんあの人の事が好きなんだろ？ でも今はカフェに来てない」

現在彼は再び外国旅行に出かけようとしているが、その事実を知っているのは一人しかない。

その一人は、都ではない。

「都さんは、古賀センパイに甘えたいっつか、優しくしてもらいたいわけでしょ？ でもその相手は、今はいない」

「う……」

「だけど、今は俺と一緒にいる。そんな俺を……古賀センパイと重ね合わせちゃったんじゃないかな？ 無意識のうちに」

「そ……そうかも……。でも、なんでわかったんだよ……？」

「ああ、やっぱりそうだったんだな」

「なっ……。きつたねえ！ カマかけてやがったのか！？」

「そう思われたのなら謝る。……でもそこははつきりさせておきたかったんだ。俺の中でも、都さんの中でも」

「そうかよ。……確かにおれは、キミと潤さんとを重ね合わせてたかも知れねえ」

「……」

「今思えば、キミの女の子嫌いを治してやろって思ったのも、実はおれが寂しかったから……誰かのぬくもりが欲しかったから、その口実にちょうどいいのになって……」

「やっぱり寂しかったんだな」

「そりゃ寂しいよ！ せつかく潤さんの彼女になれたのに、本人がいないから結局おれはひとりぼっちなんだぜ！？ おれ……もうひとりぼつちはイヤだ！ 誰かと接していたい！」

「都さん……」

「ほら、おれだつて一応女の子じゃん？ だからさ、男の子と一緒に居たいって気持ちがどこかにあるんだ。マスターとか大人の人とじゃなくて、キミとかの同年代の人と、さ」

「都さん、一つだけ教えてくれ」

「なんだ……？」

「俺は、古賀センパイの代わりになれるか？ というか、今日今まで一緒に過ごしてきて、代わりになれていたか？」

「……正直、そうとは言えない。やっぱりおれは……潤さんのことが一番好きだから。それだけは変わらないし変えない」

「都はキツパリと言いつつた。だが竜造はショックを受けたという表情にはなっていなかった。」

「ひでえこと言うけど、キミは潤さんの代わりになんかなれないし、これからもそうはならない。断言する」

「そう……か。ごめん、変なこと聞いた。……でも、俺はそれでもいい」

「それでもいい、って……？」

「俺は都さんにとってはどうでもいい存在かも知れないけど、それでもいいってこと。古賀センパイがいない間の、寂しさのはけ口だろうが構わない」

「どうでもいいなんて思ってない！」

「いや、例えばの話だよ。でも、その言葉が聞けて嬉しかったりするよ」

「……そう？」

「ああ。だからさ、もし都さんさえよければ、また今日みたいに遊びに誘ってほしい。その時は、悩みとか聞こうと思うから」

「ありがと、いろいろと。そんじゃさ、メシ行こうぜ」

「……ああ」

「どちらともなく手を繋ぎ、歩き出す。彼らの間には奇妙な縁が結ばれていたのだった。」

ちょうどその頃……若干大きめのリュックサックを背負った一人の青年が空港に到着していた。自称バックパッカー、古賀潤だ。これより何度目かになる外国旅行に行くようだが、そんな彼を見送るのはたった一人だけ。

どうやら、自分が外国に行くという事実は盟友、秋野圭輔にのみ伝えたようだ。

「いよいよ出発か……。いつもこんな調子で外国行ってるのか？」

「いや、見送りがいるのは今回が初めてだ」

「マジで？　じゃあオレ邪魔者だったか？」

「いやいや、そんなことねーよ。やっぱ来てくれりゃ嬉しいしさ。

……でも、お前以外の奴には教えたくないってのが本音だ」

「と、言うこと？」

「ちゃんと理由を知っていて、それをむやみに言いふらさないって確信してるから。それは自分で一番分かってるだろ？」

「ん、まあ。自分で言うのもアレだけどな」

「そういうわけだ。……ともかくオレは、自分なりに答えを出すと同時に、あつちでいろいろ文化に触れて、見聞を広げてくる」

「キレイごと言っちゃって。ホントは美味しいものの食べ歩きだろ？　あそこは美味しいものばかりだからなあ」

「う……。ま、まあ、当たってるだけに否定は出来ない。でもな、考えてもみる。食文化に触れるってのも、立派な事だとは思わぬか？」

「わかったわかった、そういう事にしとく。……で？　みんなには言っただけなのか？」

「なんだ、まだ誰にも言っただけじゃなかったか。そろそろ不審に思う奴も出てくる時期だろうから、言うなら言っでもいいぞ」

「おう。んじゃ、聞かれたら言うくらいにとどめておくわ」

「サンキュ……。あ、そろそろ行くわ。搭乗時間が近いみたいだから」

「そうか。くれぐれも気をつけるよな」

「わかってるよ、そっちこそな！」

互いの拳を突き合わせると、潤は行ってしまふ。

次に彼がこの地に戻ってくるのは、年が明ける10日ほど前になるのだった。

翌、日曜日。この日もオフの都は、幼なじみの果緒梨を交えた4人組で遊びに行く事になっていた。

だが、当日になっても行く場所が決まっていないようだ。

「ねーみんな！ どこ行きたい？」

「はいはいー！ ミーは本屋さんに行くのがいいと思いますです！」

「わたしはペット屋さんがいいなあ……」

「おれ、どこでもいいよ！」

「もーまったく、あたしらってホントバラバラね。んーじゃあ、瑞奈とクリス、ジャンケンして！」

「いえーす！ みずなちゃん、まけないですよ！」

「わたしだつて負けないもん！ じゃーんけーん……」

「ほいつ！」

「……やったですー！ ミーのかちです！」

「うーん残念、負けちゃった。かおりゅん、じゃあまずは本屋さんだね？」

「ちつがうよー！ まずはカフェでお昼食べてからでしょ！？」

「あつ……そうだったっけ」

「……なんかだまされた気がするです。ぺてんですか？ オレオレさぎですか？」

「あははっ！ みんなやつぱおもしれえな。……じゃあカフェまで競争だあ！ ビリになったらみんなにおごりだぜ！」

言うのが早いが、都は真つ先に走り出していた。

それに反応した果緒梨とクリスもほぼ同時にスタートを切ったが、

ただ一人瑞奈だけはすぐにスタートできないでいた。

「あ〜ん、みんな待ってよ〜……」

「いらっしゃ……というか、おかえり」

力任せにカフェのドアを開けた都を咎める事もせず、落ち着き払った声をかけるマスター。

客はほとんどおらず、自分でコーヒーを作って飲んでいるほどだった。

「ふう……疲れた。ねえマスター、かおりゆんとかまだ来てないよな？」

「果緒梨ちゃんは、ね。でもほれ、あの席見てみな」

「え？……ええ！？ み、瑞奈！？ な、なんでもういるんだよ！？」

「えへへっ。わたしの勝ちだね」

「え、だってお前、スタート遅れてたじゃねえか。……さては！チャリ使ったな！？」

「使っていないよ〜……。わたし、ちゃんどこまで走ってきたもん……」

「証人はここにいるよ、瑞奈ちゃん。……まあ都ちゃん、彼女の話も聞いてやるうじゃないか」

「わ、わかったよ……。ごめんな瑞奈、信じてあげなくて。……でもよ、なんでそんな速ええんだ？」

「速いというか……単純にあれくらいの距離なら全力で駆け抜けられるから」

「は！？ どんな運動能力してんだよ！？ 軽く1キロはあったぜ！？」

「だって……わたしテニスしてるから。知らなかった？ 優香お姉様の指導の下で、週に3回くらいやってるんだよ」

「マジか……！ 初耳だぜ。くっそお〜〜！！ ぜってえおれがいちばんだと思ってたのに〜〜！！」

都が地団太を踏むと同時にドアが開き、長い金髪をなびかせながらクリスが入ってきた。

「はふう、ひふう……。あいむべりいたいあーど……。み、ミーは……。なんばんですか……。？」

「お疲れさん、クリスちゃん。安心しな、キミはビリじゃないから「ホントですか……。？ や、やった……。です……。あ、みゃこちゃんとみずなちゃん……。さつきぶり……。です……。」

「お疲れさん。随分息が上がってるじゃねえか。クリスは走るの苦手か？」

「ちょと苦手です……。ミーはあまり走らないスポーツさんが好きかもです」

「そんな事言ってもねえ……。スポーツってだいたい走るからね。うん……。体操競技とかその辺かなあ？」

「えとえと……。よくわからないです……。それにしても、かおりちゃん遅いですねー」

「ホントだな。かおりくん、こんな走るの遅いのか？」

「そうなんだよ。あの子、行動はせっかちなのに走るのは遅いの」

「なんでだろうな……。？ ちょつと心配になってきたぞ」

なかなか到着しない果緒梨を心配した都が立ち上がるうとしたその時、ようやく果緒梨が到着した。

「はあ……。はあ……。せえ……。はあ……。う……。」

「おせえぞかおりくん！ みんな待ちくたびれてたところだぜ？」

「だって……。しょーがないじゃ……。ない……。！ あたしっば……。足遅いんだから……。っ！」

「これでかおりくんがみんなのお昼おごる事になったね。お金大丈夫？」

「こついつ時のために……。ちょこつとは余裕持たせてあるから……。大丈夫……。！ てか、座らしてマジ」

完全に疲弊した果緒梨をイスに座らせると、ようやく呼吸が整ってきたようだ。

「ふう……疲れた。まあ、負けたのは仕方ないからね。今日はあたしのおごりだよ！」

「ちよーっと待った！」

「……誰!？」

果緒梨が負けを認めておごり宣言を出したと同時にドアが開けられ、圭輔が登場した。

「なーんだ圭輔さんか。どうしたんだ？」

「果緒梨ちゃーん、全額自腹とかそんな大それた事を軽々しく言っちゃアカンぜよ。……そこでだ！ ここはこのオレがおごるってことで、どっスか？」

「えっ!？ マジ!？ いいの!？」

「いいともいいとも。……ま、その代わりつつっちゃんだが、ちよっただけ話を聞いて欲しいかな、って」

「ん？ なにかおれらに言いたいことでもあんの？」

「お話したい事があるなら、言えるときに言っておいたほうがいいです。ミーたちはおとなしく聞くです」

「サンキュ。んじゃマスター、この子たちの勘定はオレが持つってことで。……さて、話だけだな。特に都ちゃんによく聞いて欲しい。

……潤のことだから」

「なに!？ 潤さんのことだって!？ どうしてるかわかんのか!？
なあ!？」

「まあまあ落ち着け。順序立てて話すから。……それとも結論から言っっちゃった方がいいか？」

「それがいい! 早く言っ言っ言っ!」

「わーっつたよ! あいつはな……昨日、海外に飛んだ」

「……っ!」

圭輔の言葉とともに立ち上がり、その場を去ろうとする都。

だが、当然のごとく果緒梨たちに阻まれてしまうのだった。

「なにすんだよ! 離せよ!」

「どこに行くつもりなの!？ 海外つつたっつてどこの国かわから

ないんだよ!？」

「そんなの知るかよ!! おれも向こう行って、潤さんを探すんだよ!!」

「お願いだから考え直して、みやびょん。今から行ったってムリだよ!」

「ムリかどうかなんてわかりっこねえだろ!? とにかく離せ!」

「みやこちゃん! かんがえなおすです! やけいしにみずですよ!」

「……いい加減にしないか!」

「……!? ま、マスター……?」

初めてマスターの怒声を聞いた都は体をすくませ、その場に座り込む。

「これ以上の暴挙は……許すわけにはいかない」

彼女の前に立ちはだかったマスターは、明らかに怒りの表情を浮かべていた。それだけに穏やかな声が余計に恐ろしく思えてくる。

「圭輔くんはキミがそういう行動を取ると思ったから、敢えて潤くんが行った国を言わなかったんだ。にもかかわらずそういう行動に出るとは、正気の沙汰とは思えない」

「だって、だって……」

「だってじゃない。僕の納得する答えを出さない限り、キミの望む行動はさせられないぞ」

「今から行って……潤さんを探して……どうやって行くかは、その飛行機とか船とか使えば……」

「ふむ。随分と都合よく行くんだな、キミの考える事は。行けばすぐ見つかるのか。それに、自分専用の乗り物があるのか」

「いや……それは……」

「あるのか?」

「がっ……」

「どうなんだ?」

「うっ……ぐっ……えぐっ……!」

「はい、キミの負け」

「ちよつとマスター！ いくらなんでも酷すぎ……」

「いや、ここはマスターの方が正しいぞ果緒梨ちゃん。たまにはきつにお灸も必要だろう」

「そ……そうかも知れないけど……」

「……っ！」

マスターに言い負かされた都は、泣きながらカフェの裏手に回り、自分の部屋に戻っていった。

「マスター！ どうすんのよ！？ みやびよん泣いちゃったじゃないの！」

「圭輔くん言った通り、お灸をすえてやっただけだ。痛かったり辛かったりするのは至極当然のこと。ま、明日にはケロっとした顔で戻ってくるだろうさ」

「あーそーですか！ ……なんか気分悪い。瑞奈、クリスマス。悪いけどもう帰るわ。じゃね」

「ありがとうございます」

「……ベーーーーーだ……」

都が一方向的に責められたと判断した果緒梨もまた、足早にカフェから去ってゆく。

残された瑞奈とクリスマスは互いに顔を見合わせ、ため息をついた。

10月も終わりを告げようかという、秋の昼下がりのことだった。

「くそ……。くっそおおおおお！！ ざけんじゃねえええええ！！

！！ うああああっ！！」

ベッドにある枕を殴りつけ、鬱積した靄を振り払おうとするも、そいつはしつこくまとわりついて離れない。

いつしかその枕に、数個の黒点を作っていた。

「うっ……ぐっ……！ ……なんで……どうして……！！？ おれが何したってんだよ……！！？」

そのまま倒れこみ、枕に顔をうずめて嗚咽交じりの声を出す。

「潤さんに逢いてえのに……なんでそうさせてくれねえんだよ……!? 潤さんも潤さんだよ、おれになんにも言わないで勝手に行くちまうなんて……!」

そのまま数時間泣き続けていると、ドアを開ける音がしたではないか。ちらつとその方向を見ると、学校から帰ってきた千奈美がいた。

「都ちゃん、入るよ?」

「……うん」

「電気もつけないで……。よいしょ」

千奈美がスイッチをつけると、部屋が一気に明るさを取り戻す。都は咄嗟に毛布を被った。

千奈美は、そんな彼女に近づき、ベッドに腰をかけた。

「ね、都ちゃん? 何があったか、私に話してくれないかな?」

「……いいの?」

「もちろん! 私はあなたのママ代理なんだから」

「わかった。あのな……」

都は千奈美に全てを打ち明けた。潤への気持ちが嘘偽りでないことも含めて。

「……。うん、うん。なあんだ、そんなこと」

「……は!? そんなことって何だよ!? おれはすっげえ悩んでんだぞ!? それなのに、たったの一言で片付ける気かよ!」

「ごめんね、そんなつもりじゃないの。ただ……、私に比べたらその程度、ってことよ」

「どういうことだよ……?」

「だーりんはね、このお店を持つために5年間、ヨーロッパ各国を回って修行してたのよ。その頃から……私たち付き合ってたの」

「えっ……? てことはちなみさんは、マスターを5年も待ったのか!?」

「そつだよ? あと、このお店を開業するために必要な資格を取る

ための勉強にも付き合ったり……」

「よく5年以上も待ってたな……。おれ、5年どころか1ヶ月も待ってそうにねえよ……。実際今だって……」

「本当にその相手の事が好きなら、いつまでだって待てると思うんだけどな。私だけかな？」

「がう……」

「都ちゃんは、潤くんの事がどれくらい好き？」

「どのくらいって……そりゃ、おれの方から告白したんだから、そんくれば好きって事になるよな……」

「そうよね。それじゃあ、そんな風に悩む事なんかないと思うんだけどね」

「なんでだよ？」

「それはさっき言いました。本当にその相手の事が好きなら、いつまでだって待てると思う……って。……こっちもね、私の方から告白したの」

「ちなみさんも……」

「うん。その時のだーりんは……やっぱり戸惑ってた。結局はつきりとした答えはすぐには返ってこなかったの」

千奈美は当時の事を思い出しているのか、遠くを見ながら語っている。

「……でもね、旅立つ前に言ってくれたんだ。『僕が帰ってくるまで、待っていてくれますか？』って。今思うと……あれは私を試していたのかも知れない」

「試していた……って？」

「いつ帰ってくるか分からない、不確定要素だらけの相手を守つことになるけど、それでもいいの……みたいな感じ？」

「なるほどね……。そう考えると今のおれらと被る部分もある」

「でしょ？ 今のあなた達も、きつとそうだと思う。潤くんも、きつとどこかで都ちゃんを試してるのよ」

「潤さんが……おれを試してる……？」

「多分、だけどね。こんな感じじゃないかな。『オレはしばらく都ちゃんの元から離れるけど、それでも待っていてくれるか?』みたいな、ね」

「潤さん……。そうだったのか……?」

「違うかもしれないけど、そう思ったらちよつとはマシになるんじゃないかな。出来る? 都ちゃん。彼のこと……待てる?」

「おもしれえじゃねえか! やってやんぜ、潤さん! おれは待つよ、ああ待ってやるよ! おれ……負けない。絶対に負けないもん!」

都は決意を新たに立ち上がるが、千奈美に礼を言うためかすぐに座りこむ。

「……ありがと、ちなみさん。だいぶ楽になった……」

「うふふ、いいこいいこ」

千奈美に励まされ、新たに決意を燃やした都。

泣きはらした瞳からは、その赤さと同じくらいに赤々と燃える炎が立ち上っていた。

第5章：Transfer Student

月日は流れ……師走も押し迫ったある日のこと。

カフェHexagramで働く都は、すっかりウエイトレスとして板につき、ちよつとした名物にもなっていた。

そして彼女はマスターに様々な料理を習い、今では彼の手を借りずともキッチンを動かせるようになっていた。

その気になれば、彼女と絵実梨だけでもこの店を営業できそうだとマスター本人から言わせるほどだった。

「うれしいなあ、2人ともこんなに成長してくれて」

2人が働く姿を見届けながら、マスターがしみじみと漏らす。

「よかつたじゃないか。ダーマスも、人を育てるっていう喜びを知る事が出来たんだな」

カウンターを挟み、マスターと会話をするこの男の名は須藤孝太郎。高校教師である彼は、実はマスターと旧知の仲でもあった。

生徒である果緒梨たちの紹介でHexagramの存在を知ってからは、こうして時間を見つけては足繁く通っているようだ。

「うん、まあね。……教師の目から見て、あの子はどう？」

「ふむ。クラスに一人いると、彼女を中心とした騒がしいグループが出来そう……かな」

「なるほどね。実際元気づきるほど騒がしいよ」

「実はそういった子の方が扱いやすいと言えば扱いやすいんだ。そういう子は、基本的に抱え込まないからさ。だからもし、何かあったとしてもすぐに察してやれるはず」

「ふむ……」

「でも、あの子はその枠に収まらない気がする。何かあったら抱え込みそうだな。わりと内の内の気持ちは隠し通そうとしてるんじゃないかな。もしかしたら、だけど」

「そうなのか……？ キミが言つと重みがあるな」

「正直、あの子は手強そうだ。ぼくもああいったタイプの子はあまり受け持った事がない。実際、今どんな悩みを抱えているかが分からないし」

「あ、それならわかるぞ。あの子には告白した相手がいるんだけど、その相手が外国に行つて帰つてこないから、どうしていいか分からないってのが今の悩みだ」

「そっ……か。一般論なら、そんな奴とは別れてまた新しい相手を探せつて言つんだらうけど、それじゃ双方とも合意はない」

「全くもつて同感だ。僕もそれは強要したくない」

「あの子自身が納得のいく答えを見つけない事には話にならない。

結局は自分が決める事だからね。……で、あの子自身の答えはもう出ているのかい？」

「恐らくは。とりあえずは、帰つてこない彼を待つ事になっているみたいだ」

「そうか。それなら今は大丈夫か。ま、長い目で見守つてやってくれよ。保護者として、な」

「ああ」

「何かあつたら……いや、なくても青山さんとかが教えてくれるか。その時はまた足を運ばせてもらつよ」

「悪いね、恩に着るよ」

そこまで言いながら、マスターはお互いのグラスにワインを注いだ。この日は珍しく、マスターもグラスを傾けていたのだ。

このカフェには一応アルコール類も置いてあるのだが、全てそれなりに値が張るので、学生が中心の常連組はなかなか注文しないのであつた。

ところ変わつて、ここは海斗や果緒梨たちが通う学校、汐野学園。今は2学期期末テストの返却の最中であつた。その結果に一喜一

憂する生徒達。

「やった、あたし78点！ みんなは!？」

「くっ……負けた。オレっち63点です」

「あはーはー！ ミーは31点ですー！」

「ね、瑞奈は？」

「わたし？ うわぁ、97点だって！」

「すげ……！」

「わんだほー！」

「ほれー、そろそろ静かにしようなー。……えー、今回のテストはみんな本当に頑張ってくれました。平均点も他のクラスより高かったよ。満点も一人いたし」

「いくつー？」

「想像通りの返事、ありがとう。えーっと、キミたちE組は65・4点だ。いつものように30点未満は赤点だけど、このクラスにはいなかったな」

「は!？ 高けえ！ オレっち平均以下でっすか!」

「えと、えと……」

「安心してね、桜庭さん。赤点は、なし！」

「やったですー！ ありがとですー！」

「……さて。これからちよっとみんなに提案というか、言いたい事がある」

孝太郎は急に表情を厳しくし、皆に呼びかける。

「実はね、すごく時期ハズレなんだけど、このクラスに新しい仲間を迎え入れようかと思うんだ」

「ええっ!？ どとど、どういうこと!？」

孝太郎の言葉に、たちまち教室内はざわめき始める。彼はその様子をしばし見た後に再び言う。

「ほーれ、静かに。……この時期にしたのには理由がある。ほら、今はテストも終わってもうすぐ2学期も終わるでしょう。で、数日もしないうちに冬休みだ」

「う、うん」

「とりあえず、その期間だけでもみんなと一緒に高校生活を送ってもらいたいかな、って思ってた」

「あのっ、それって認められるんですか？」

「校長先生の承諾は頂けました。後日、教育委員会にも通達してくださるそうです。誰でも教育を受ける権利を平等に持っているんだから、その権利を行使しないとモったいないよ」

「そ、そうだけどさあ……」

「ま、高校は義務じゃないから、もしその子がもうヤダって言ったら止めないけど」

「そんな能書きはいらねんでっす！ そんなことより！ 一体誰なんでっすか！？ 男でっすか、女の子でっすかっ！？」

「なーにをそんなに鼻息荒くしてるのかなキミは。それは来てからのお楽しみだ。さて、そろそろ時間だね。お疲れ様でした、さようならっ！」

その言葉と同時に三々五々散らばる生徒達。その中には海斗もあり、彼は部活のためさっさと出て行ってしまったが、果緒梨たち三人は孝太郎を取り巻いていた。

「ねね、コタローせんせ。ちょっと聞きたい事あるんだけど……」

「さっきの話については黙秘権を行使させてもらうよ」

「……やっぱりダメなんですか？ お願い！ わたしたちにだけでもいいから教えて！」

「おしえてくださいです！ ぷりーずてるあす！」

「はいはい、黙る。どんなに聞かれようとも、今教えるわけにはいきません」

「ケちゃんぼ！ いーもん、マスターに聞いちゃうから！ 瑞奈、クリス、行くわよ！」

「わわっ、かおりゅん待って〜！」

「……しーゅーー！」

このまま話していても埒が明かかないと思ったか、果緒梨はさっさ

と教室を出て行ってしまふ。

それにつられて、慌てて瑞奈とクリスもその後を追っていった。

「ふう……。ま、こういう事になるのはある程度予想してたけどね。

……さてと、あそこに連絡しておこうかな」

ぼつりと眩きながら、ゆっくりと席を立つ孝太郎。まだ教室内に残っていた生徒達に挨拶を交わしつつ、教室を出て行くのだった。

数分後カフェに着いた3人は、整わない息遣いのままマスターに尋ねた。

「ま……マスター……！ はあ……はあ……」

「教えて欲しいことが……はあ……あるの……」

「しーくれつと……おぺれーしょん……です……。 はあ……はあ……

……」

「どうしたんだい、みんなして血相変えて。教えてほしい事？ なんだい、言ってみな」

「マスターならそう言ってくれろと思ってた……はあ……。 あ、あのね……。今度うちのクラスに、新しい子が来るっていうのよ」

「ふむ」

「それが誰なのかな……って」

ガタンッ！！

果緒梨の言葉に、思わず座っていた椅子から転げ落ちるマスター。彼がこのように驚きを露にするのは極めて稀な事だった。

「ま、マスター！ 大丈夫……？」

「まあね……。というかキミたち、ずいぶんと見当違いな質問を投げかけてくるもんだな」

「あつ……。そう言われてみればそうかも……」

「えとですね、ミーはさいしょからへんだなあって思ってたですよ。でも、かおりちゃんがせかすですから、ミーのおはなし聞いてくれそうになかったですから……」

「わたしも……。だからかおりゅんはせつかちだって言われるんだよ

「？」

「うっ……。せっかちなのはしょうがないじゃん……。」

「まあ……。コタローの事だ。恐らくは僕の想定通りの事をしてくるだろう。まあ一応、今度彼が来たら聞いておいてあげるよ。それとなくね」

「ホント!? ありがと、マスター!」

「やっぱりましたーさんはやさしいひとです!」

「……。あれ、そういえば今日は都ちゃんいないの?」

「ああ、さっきなんか電話がかかってきて、用事があるからってどこかに出かけたよ」

「ふっん……」

さて、そんな都はというと、何故か汐野学園の職員室にいた。

彼女の前には孝太郎が座っており、周囲には他の教師も多数いたが、私服姿の都を咎める者はいなかった。

「さて、神崎都さんだっけ? よく来てくれたね」

「う、うん……。あ、あのさ、おれをこんなところに呼んで、何の用?」

「単刀直入に言うただね……。この学校に、通ってみないか?」
「て件で」

「……。えっ!? おれが!?!」

「そう。聞いたところだと、キミはまともに学校に行ってなかったそうじゃないか」

「がっ……。そうだけど……」

「で、どうする? 今の気持ちとしては」

「そんな、いきなり決めらんねえよそんなこと」

「……。青山さんたちと同じクラスになれるよ、って言ったら?」

「えっ!? かおりゆんたちと!?!」

「そういうこと。何も心配する事はないぞ。校長先生にも了解はいただけだし、大丈夫だ」

「うつうつ……。でもなあ、かおりゆんたちともつと一緒にいられるようになるのはでえけど、カフェのお仕事もあるし、学校つづーのに縛られんのもイヤだし……」

「何も『通い続ける』とは言わないさ。とりあえず2学期の終業式、今月24日まで試験的に通ってみて決めてくれて構わない。それでも無理だつて思ったらそれでもいい」

「だけどよ、学費は？ 制服は？ 教科書は？ 学校通うならよお、そついうのいるだろ？ 日数少なくとも……」

「よくそこまで考えが回るもんだ、感心するよ。でも、そこも心配する事はない」

そついうと孝太郎は、都の頭に手を置きながら言う。

都は、自分の顔が赤くなっているのではと思ひ、少しだけ顔を下げた。

「実はね……こんなこともあるつかと、教科書一式は保存してあつたりするんだ。制服もマスターの奥さんのがあるはずだからそれを使うといい。なかつたらこつちで用意するし」

「いや、あるはずつて意味わかんねえよ。何年前のだよ？ 仮にあつたとしても、制服変わつてたらダメじゃねえか」

「ああそつか、じゃあ制服はこちらで用意だな。学費もどうせ数日なんだからタカが知れてる。それくらい、ぼくのポケットマネーから出そつじゃないか」

「すげえ……。すげえけど……。なあ先生、なんでそこまでしてくれんだよ？ おれなんかのために……」

「キミにいろんな事を教えてあげたいと思つて。……教育者によくあるわがままな欲求だけどさ」

「おれに……。いろんな事を……？」

「そつ。……厳しい事を言うつとだね、キミは世の中を知らなさすぎる。あのマスターについていけば、確かにあのカフェで働く分には事足りるだろう。でも、キミはそれでいいのか？」

「がつ……。わかんない……」

「まあ、そうだろうね。まあでも、せつかく教育を受ける権利っていうのをみんな平等に持つてるわけだから、それは使っていかなくちゃもつたないな、って思うわけで」

孝太郎は、今まで穏やかだった表情を急に厳しくして続ける。

「他の国には勉強したい、学びたいって気持ちがあるのにもかかわらず勉強できないっていう子がいるんだからさ」

「そう……だけど……」

「その子たちのためにも、都ちゃんの明るい未来のためにも、どうかな？」

「……かおりゆんたちには話したのか？ おれが転入するってこと」

「いや、まだ。誰かが新しく入ってくるって事は伝えただけ。……」

みんな、凄く楽しみにしているぞ」

「う……う……。がう……。わ……。わかった……。じゃ、じゃあ、とりあえず、さっき言った期間だけ通わせて……。もらおうかな」

「本当か！？ よかった、よく言ってくれたね」

「へへっ。やつぱな、かおりゆんたちと一緒にいられる時間が増えるってえのはおれの中ででかかった」

「なるほど。……んじゃ、面倒な手続きとかはこっちで全てやっておこう。マスターにも、一応言っておいて」

「うん、そんぐれえならやるよ。で、もういいのか？」

「そう……だな。ごめんね、時間取らせちゃって。それでは……次は教室でお会いしましょう」

「あははっ、カフェでも会つかも知れねえだろ？ そんじゃまたな！」

こうして、期間限定で学校に通うことを決めた都は、小さく笑みをこぼしながら職員室を出てゆく。

時間はすでに午後の5時を回っており、周囲はいよいよ闇に包まれようとしていた。

その足でカフェに戻った都は、まだそこに残っていた果緒梨たちの質問攻めに遭っていた。

「あー！ みやびよんだ！ お帰り！ ねね、どこ行ってたの？」

「わわっ、なんだよかおりゆん！？ それに、みんなも……」

「みーんなみやこちゃんのご帰還をまつてたですよ」

「いつもお店にいるのに、さつきまでいなかったから気になっちゃったの。どうしてたの？」

「あー、そういうことか。えっとな……」

「……ちよつと待った」

都が3人の質問に答えようとしたところに何故かマスターが割って入り、都の言葉を遮った。

「なんだよマスター！？」

「今は言う時ではない。わかるね？」

「わかんないよ！ ねーマスター！ どーして止めたの！？」

「ぶーぶー！ 納得できないです！」

「マスター、どうして隠そうとするの？ なんだか今日の先生みた
い
い」

「あーはいはい、黙らっしやい。……ちよつと都ちゃん、こっちに
不平不満をぶつける3人を尻目に、マスターは都を連れてカウン
ター奥のキッチンへと姿を消した。

「がう……？」

「さつきまで、コタロー先生の所にいたでしょ」

「……！？ なんでわかんだよ！？」

「キミが帰ってくる前、本人から電話もらったんだ。そんな事だろ
うとは思っただけど」

「さすが先生だ……やる事が早いぜ」

「僕は、キミが学校に通う事には賛成だ。やりたいことをやるとい
い。でも……」

「でも？」

「いやさ、コタローもみんなには秘密にしてるわけだしね。だから、このまま秘密にしてやった方が個人的にはいいんじゃないかな、ってさ。言うも言わないも都ちゃん次第だけど」

「秘密にしておく理由がわかんねえよ。どうせいつかは分かる事なんだし、早かろうが遅かろうが関係ねえよ。それに……おれ、隠し事へたつぴだから、すぐバレちまいそうだもん」

「ふむ、そう来たか。隠し通せないんじゃないや。仕方がないな。コタローにはあとで謝っておこうか……」

「え？　じゃあ言っちゃっても……いいのか？」

「僕からはもう何も言わない。都ちゃんに任せました」

「うん！　ありがとよっ！」

その言葉とともに、マスターの腕を掴む都。もちろん、掴んだ瞬間に離れたのだが。

「あつ……」

「こらこら、何をしてるんだ」

「へへへ……。つい嬉しくなっちゃったからよ！」

そう言っていたはずらっぽく笑う都の額を指先でつつくマスター！

そして都は嬉々として店に戻ってゆく。

(本当にオープンだよなあ……。あんなんで潤くんを待てるのか？)

「あつ、みやびよん！　どうしてたの？」

「いや、ちよつとな。それより……おれ、みんなとおんなじ学校に行く事になったぜ！　2学期終わるまでだけどな」

「えっ……。ええええええええええええっ！？」

都の言葉を受けた3人はそれぞれ違う反応を示した。

瑞奈は放心状態になり、クリスは体全体で驚きをアピールし、果緒梨は都を抱きしめていた。

「みやびよん……みやびよん！　あたし……すんごく嬉しい！　ま

た、みやびよんとおんなじ学校に行けるのが！」

「かおりゆん……。うん、おれもすっげえうれしいぜ……！」

「えとえと……。『開いた窓がふさがらない』というのはこのことですか？」

「それを言うなら開いた口だよ。でもビックリしちゃった。先生が隠し通そうとしたのはこの事だったんだね」

「ていうかよお、隠す必要なんてねえよな。先生も人が悪いよなあ」

「ねー、そーよね！ もーコタロー先生ったら！ もう口利いてあげないんだから！ ……はれ、みやびよん？ どったの？ 目が赤いよ？」

「……」

都の小さな異変に気づいた果緒梨が指摘をすると、そこには今にも涙をこぼさんとする都の姿があった。

「みやこちゃんがないてるです……。はんかちーふです、使うといいです」

「へへ……。悪いな、クリス」

「都ちゃん……。どうしたの？ どこか痛いの……？」

「ちげえよ……。ぐすっ、みんなとおんなじ教室で……。今みてえにワイワイやれると思うと……。おれ、うれしくて……！」

クリスから手渡されたハンカチを臍に押し当てながら言う都を、果緒梨は再び抱きしめる。強く。

「かおりゆん……」

「あたしも……。うれしいの。瑞奈だってクリスだってそう。まだ知らないだろうけど、海斗や稲村くんにも教えたらきつと喜んでくれると思う」

「そっか……。2人はまだ知らねえんだよな……」

「みやびよん。2学期終わりまでじゃなくて、その後もずっと学校に来て！ そして、あたしたちと一緒に卒業しようよー！」

そこまで一気に言い切った果緒梨の目にも、いつの間にか涙が浮かんでいた。

都は指先でそれを優しくすくうと、彼女もまた相手を強く抱きしめた。

「うん……うん！ かおりゅん……。おれ、またひとつ幸せを見つけたぜ。それは……」
『かけがえのない友達が出来た』こと……！」
声を震わせながら、力強く宣言する都。

「かおりゅんもそうだし、瑞奈もクリスも……おれの大切な友達だ……！ みんな、ありがと……うっ……！」

抱き合いながら涙にむせぶ都と果緒梨。いつしか瑞奈とクリスの目にも光るものが宿っていた。

そして、いよいよ都が初めて学校に行く日がやってきた。着慣れないセーラー服の制服を、手伝いも借りてようやく着込むと、千奈美は思わず都に抱きついてしまう。

「きゃ〜ん、都ちゃんかわい〜！ ウェイトレスさんのかっこもかわいかったけど、女子高生姿もいいね！」

「そ、そうか？ へへっ、なんかうれしいな……」
そして5分後、都のドレスアップは完了した。それまでほとんど手入れされていなかったセミロングの髪を2つに結び、落ち着いた雰囲気を感じさせている。

「あら、その髪型も似合うわね。やっぱり髪型いじるのが、楽しいでしょ？」

「うん……うん。でもおれ、そういうのよくわかんねえよ。この髪型も、ゴムがなんか痛えし。結わかなくてもいいのに……」

「わかんないことを教わるのが学校よ。しっかり勉強するんだぞっ！」

「うん！ ……じゃあおれ、行ってくる！」

「行ってらっしゃい！ 気をつけてねっ！」

千奈美に見送られ、足取りも軽く階段を下る都。

そのまま店の前に出ると、今度はマスターに声をかけられた。

「もう行くんだ？」

「うん。いろいろ説明があるから早めに来いだと。ふわ〜あ、眠い

「や」

「なるほど……。まあ、今日から晴れて女子高生、ってわけだな」
「な……。なんだよお。だからって何かが変わるわけじゃねえだろ？」
「いや、変わる。今まではこのカフェのウエイトレスとしてしか見られてなかったのが、今日から学生としても見られるようになるんだ。それぞれで振舞い方を変えなきゃならない」

「がっ……。いきなりそんな事できんのかな……。？」

「出来るさ。だってキミは一人じゃないんだから。カフェには僕がいたように、学校にはコタローや果緒梨ちゃんたちがいる。分らなかったら、みんなにいろいろ教えてもらおうといい」

「あははっ、ちなみさんと同じ事言っただな！　なんか、すげえ気が楽になった」

「そうか。……。気が楽になったのはいいけど、時間は少しずつツラくなってるんじゃないかな？」

「……。わわっ！　やっべえ！　じゃあおれ、行ってくる！」

首から提げている懐中時計を見ると、孝太郎との約束の時間まで残り10分となっていた。

都は慌てて学校に向けて走り出すのだった。

「はあ……。はあ……。な、なんとか間に合った……。みてえだな……。えっと、職員室はっつと……」

肩で息をしながら校内に入ろうとする都。しかしその直後、誰かと衝突してしまう。

「……。いつてえ〜！　いきなり何すんだよ！　気いつける！」

「すみません！　大丈夫ですか……。っつて、え？　あれ？」

「……。あ！　竜造くん！？　どうして!？」

「それはこつちのセリフだよ、都さん！　一体どうしたんだ？」

「じ……。実は……。っつて！　もう間にあわねえ！　ゴメン竜造くん、またあとでな！」

「あっ……。」

痛む鼻を押さえながら、都は一目散にその場を去る。

「都さんがこの学校の制服着てた……？ まさか……な。そんな事、あるはずない……」

「遅れてゴメン！ 先生！」

都は力任せに職員室のドアを開けた。室内の教師は全員都の方に振り向いたが、彼女はそんな事はお構いなしに入り込む。

……とその時、奥から低く、しかしよく通る声が都に向けて発せられた。

「2分遅刻。10分遅刻で1回の欠席とみなし、正味3回の欠席で退学。いいね」

「……へ？」

「冗談だ、冗談。……ま、何はともあれ。おはようございます」

「お……おはよう……。で、話つてなに？」

「ああ、それか。 magari なりにキミはこの学校に入学したわけだから、その事を他の先生方に言っておく必要があるからさ。挨拶したら？ 今ここに何名かいらっしやるから」

「う……。がう……。できねえよ……恥ずいもん……」

「なんだ、気が強く見えるわりにはシャイなんだな。ごめんよ、ぼくが悪かった。それじゃあ、せめて校長先生にだけは会いに行こうか。……大丈夫、ぼくも行くから」

「本当……？」

「ああ、そうさ。ほい」

「……！」

孝太郎は都の手を優しく包み、壊れ物を扱うがごとく校長室へと連れてゆく。

なんとか校長に挨拶を済ませた都は、孝太郎に連れられ、自分のクラスとなる2・E教室の前に差し掛かっていた。

このドアの向こうには、彼女の知らない世界が展開されている事

だろう。

「さて、どうします？ ぼくと一緒に入るか、それともぼくが先に入って、あとから入るか……」

「うん……。先生と一緒にいる！」

「わかりました。……心の準備はいいですか？」

「すー、はい……。うん、大丈夫」

ひとつ呼吸を整え、力強く返事をする都。そして、ついに孝太郎が教室のドアに手をかけた。

「来たよ！」

「マジだ！ 今から楽しみでっすね！」

ドアの開く音と同時に、教室内にいる全員の視線が都たちに向けられた。特に男子生徒が向ける視線は強かったようだ。

そんな熱視線に耐えられず、都は思わず大声を張り上げてしまった。

「……つぎつてえな！ そんなにジロジロ見んじゃねえ！ 何が珍しいんだよ！」

その声とともに静まり返る教室内。孝太郎はまだ興奮している都をなだめながら教壇の前に立った。

「はいみんな静かに……って、すでに静かになってるな。いいことだ。それじゃ……前から言ってたと思うけど、今日からこのクラスに新しい仲間が加わる事になりました」

その新しい仲間となる都は、今まで浴びた事がないであろう皆さんの視線に気圧され、心臓が高く鳴動し始めた。

「では神崎さん、自己紹介してください」

「ふあっ、ひゃい！！ お、おれ……じゃない。わたしは神崎都……です。このクラスには知り合いが何人かいるから、ちょっとうれしいです。みんな、よろしくしてください……」

「はい、よくできました。それじゃ、神崎さんの席だけ……」

「はいはい！ はいはい！ はいっ！ ここ！ あたしの隣空い

てる！ つーか空けた！」

「わかったわかった。静かに。それじゃ……青山さんの隣ね」

「やった〜！ みやびよ〜ん！」

「わーい！ かおりゆ〜ん！」

こうして、2年E組には新たな仲間が加わる事となったのだ。

時間はすでに昼休みを迎える時刻になっていた。都は仲良し3人組の中に加わり、昼食を食べていた。

「いや〜、授業って退屈だな。みんなよくガマンできるよなあ」

「そんな事ないない！ あたしだって退屈なんだから。眠気との戦いよ、いっつも」

「でも、おもしろいものはおもしろいよ？ コタロー先生のとか……」

「みずなちゃんはおえらいさんですねー。ミーには国語さんがちよとむずかしで、わかんなくなるとあきらめちゃうです……」

「つーか、この後もあんだろ……？ 眠いよ。な、みんな。もしおれ寝ちやったら起こしてな」

「あ、もちろん！ あたしが真っ先に起こすよ！」

「サンキュー、かおりゆん。……あれ、海斗くんは？ さっきまでいただろ？」

「あ、海斗くんならね、稲村くん呼びに行ったよ」

「あー、今きたみたいですねー。おべんと持つてるですよ」

昼休みが始まると同時に教室を出て行った海斗は、どうやら竜造を呼びに行っていたようだ。

行く前はやや渋っていた竜造も、都が自分の視界に入った途端にその瞳を輝かせ、都のいる席に近づいていった。

「み、都さん……。やっぱり……。今朝制服姿だったのはそういうわけだったんだね」

「おう、竜造くん。朝言えなくてゴメンよ。……へへ、学校で学ラン姿ってえのもなかなかしっくり来てるじゃねえか」

「そりゃそうさ。でも、都さんだっていつものウエイトレス姿とはまた違ったよさがあるじゃないか」

「あれあれー？ なーんかいい雰囲気してない？ もしかしてみやびよんと稲村くんって……きゃ〜！」

「え？ うそつ、だって都ちゃんも潤さんのことが……」

「わー、わー！ みずなちゃん、言ったらダメですー！」

「潤さん……。はああ、どうしておれを置いてっちまったんだよ……」

「あああう……。ごめんね都ちゃん……」

「……なーんてな！ 気にしてんなよ、瑞奈！」

「……ふえっ？」

「気にすんなつつつてんだよ！ おれ……潤さんのことはおれなりにケリつけたからよ。潤さんはまだ帰ってこねえけど、おれは待つことにしたんだ」

都は視線を窓の外に向け、小さく呟く。

「逢えねえのはツライけどさ。おれ、潤さんに試されてるんだから……勝たなきゃなんねえんだ」

「試されてる？ 何のことですか？」

「潤さんは、おれが待てるかどうかを試してるんだよ。おれは潤さんに告白した。でも、それがどれだけ筋通ってるか、それがどれだけマジかなんてわかんねえから試してるんだ」

「話の内容がイマイチ見えてこねえです……」

「バカだなお前は。都さんは古賀センパイのことをそれだけ好きだってのを証明したいんだよ」

「竜造くん、サンキューな。だから、勝ちてえじゃん？ それによ……。潤さんだって、こんなに想ってくれる女の子がいるって事は嬉しいだろ……？」

「りょうおもいはひとのゆめ、儂いですー。みやこちゃんとじゅんさんはりょうおもいで、とつてもとつてもすういーとです。じゅんさんはかほーものです。かいしよなしです」

「潤さんがうれしいと思うなら……おれもうれしいからさ……。が
う……」

「や〜ん、みやびよんかわいい〜！ すごく健気〜！」

「……へっ、そうか？」

「そうですすよ！ やっべえ、オレっち都ちゃんにホレちまいそー
ですす！」

「海斗くんも？ おいおい、冗談は顔だけにしてくれよ」

「がっ……。言っに事欠いてなんちゅー事をつ……。！ オレっち、
リアルにへこみそ……」

「よ……。よかった……。な……。ははっ、それだけ考えてるんなら、
俺の入り込む隙はなさそうだ」

「ん？」

「なんでもない、独り言さ。……海斗、俺もう行くわ。5限目、体
育なんだ」

「そうか？ んじゃまた部活でな！」

そう言っつと竜造は足早にその場を去っていった。

「……？ なんだか寂しそうだったな。なんでだろ？」

第6章：Reunion

こうして、都の初めての高校生活は終わりを告げようとしていた。最初に啖呵を切ったせいでもはや怖がっていたクラスメイトも、彼女の普通の姿に安心したのか次第に打ち解けてきたようだ。

そして、帰りのホームルームが始まった。

「みんな、今日もお疲れさんだったね。それと……神崎さん。初めての高校生活、どうだった？」

「へっ、なんだよいきなり！？んなこと聞かれても、よくわかんねえよ。たった1日だろ？まだ受けてねえ授業だってあるしよお」

「ま、そんなもんか。どうだろう、このまま続けられそう？」

「うん、それは大丈夫。そりゃ、最初はめんどくせえとか思ったけど、みんなよくしてくれるし……」

「そっかそっか。そいつはよかった。みんなも、是非とも神崎さんと仲良くしてやって欲しい。そして……終業式前に行われる球技大会で優勝しよう！！」

「わっ、コタロー先生が珍しく熱血先生になってる……」

「うおおお！！先生っ！うオレっち！やるでっす！うおおお〜！！」

「そしてここにも熱血してんのがいるし……」

「おお〜。ほつとですねー。セイシュンまつしぐらですねー」

「はい、原田くんありがとう。部活前に燃え尽きないようにな。……それじゃ今日はこれでおしまいだ。では……さようなら。みんなお疲れっ！」

その言葉と共に三々五々散ってゆく生徒達。海斗も部活に行くためか、足早に教室を出て行ってしまふ。

「海斗くん、もう行っちまいやがった。もっとゆっくりしてきゃいいのよ」

「アレは野球バカだからさ、野球やらせときゃ人畜無害なのよ」
「かおりゆん……なんかみさき姐さんみてえだな」
「えーそう？ あたし、あの人に憧れてるんだあ……。あの姐御肌、おねーちゃんにはないからね」
「わたしは優香お姉様みたいになりたいなあ……。はあ……。うつとり……」
「ムリムリ、あんたじゃ。まずサイズがね」
「うう……。かおりゆんがいじめる……」
「いじめっこ！？ いじめはだめですよー！？」
「ほほーう、いじめか。ぼくのルールブックによると、いじめが発覚した場合は、加害生徒に無期停学を言い渡す、と書かれているなあ」
「ちよ、違つて。てか先生、ここにいて大丈夫なの？」
「いや、なんか楽しそうだったからさ。まだみんな帰らないんですか？」
「んーどうしよ。みんな、どする？」
「この続きはカフェで落ち着いてやろうよ」
「あつ……。そうか。おれ、カフェのお仕事どうしよう……」
「いいんじゃないの？ 学校行くようになったし。終わった後また働くんだよ？ 大変じゃない」
「がう……。だけど……」
「とりあえずいくだけいつて、ますたーさんにご相談するといいと思うですよ？ 相談は大事です」
「どつちにしろカフェには行くんだ……。都ちゃんの仕事の件についてはぼくもダーマスと話しておきたかったし、こつちの仕事が一段落したらぼくもカフェ行くかな……」
「よっし！ そうと決まればさっさと行くよみんな！」
「どおあつ！？ 待てよかおりゆん！」
「ミーも行くです！ おいてけぼりはさみしいです！」
「あーん、みんな待つてよ……」

「おやおや、もういなくなっちゃった。元気があって、良き哉良き哉」
全員がいなくなってから満足げにうなずいた孝太郎。この時点で、教室に残っている者は彼のみとなった。

ガターン！！

「いらっしやい」

普通にドアが開く音とは明らかに違う音を出しても、この店のマスターは全く気にも留めていない。

だが、当然の事ながら一般客は何事かと思い、その音が発せられた地点に目を向ける。

一瞬のうちに注目の的となった4人の女の子たちは、照れ笑いを浮かべつつ4人がけの席についた。

そして、そんな彼女達のもとへ歩み寄るマスター。

「お帰りなさい。何にする？」

「その前にちよつといいか？ マスター」

「なんでしょ」

「おれ……どうしたらいいかな？ 学校行くようになったから……カフェの仕事どうしたらいいのかな……って」

「ああ、そういう事ね。……質問を質問で返しちゃうけど、都ちゃん自身はどうしたいと思ってる？」

「おれ自身が……どうしたいかって？ うん……」

「都ちゃん。私はひとりでも大丈夫だよ？」

「絵実梨さん……。マスターはおれが抜けても大丈夫か？」

「僕からはノーコメントだ。都ちゃん、もうそろそろそういう事も一人で決められるようにならないといけないぞ」

マスターは都の目を真っ直ぐに見つめ、心を覗き込むように語り掛ける。

「人生という長い道を歩む過程には、重大な選択をしなければならぬ時もある。都ちゃんにとっては、今がまさにその時じゃないかな？」

「ただど……わかんねえもん……」

「……いつまでも誰かが助けてくれる、そんな甘い考えはそろそろ捨てようか。もうそろそろキミも大人になるんだ、その準備という意味でも、な」

「おお……。ますたーさんがスパルタです……」

「わ……わかったよ……。自分で決めるよ。ちょっと待ってて……」
その言葉を最後に、頭を抱えつつテーブルに突っ伏して考え込んでしまった都。彼女の結論は、どうなるのであるうか。

ちょうどその同時刻、数日前から外国へ飛んでいたバックパッカーの潤が、再び日本へと降り立っていた。

他の誰にも帰国を伝えていなかったため、たった一人で帰途にく。

「あゝ、やっぱり日本はいいなあ……。……さて、携帯の確認っと。どれどれ……」

潤が歩きながら折りたたみ式の携帯電話を操作すると、小さな音と共に本体が震えだした。

「やっぱりな。……でもほとんど来てないか。直樹と圭輔と、あと適当なメルマガと……ん？ こりゃ誰のだ？」

受信した数件のメールの中に、彼自身も知らないアドレスから送られてきたメールが来ていたようだ。

恐る恐る開いてみたメールの内容はこうだった。

件名：はじめまして。

本文：こうしてメールを送るのは初めてだったかな？ Hexagramのマスターこと増田六です。

キミのアドレスは圭輔くんに教えていただきました。個人情報云々で気に障ったなら許して欲しい。

これを見る頃キミは日本に帰っているだろうから、それを踏まえた上でお願いしたい事がある。

都ちゃんに会いに来てやって欲しい。あの子は、キミをずっと待っている。

生意気にも親心を持ってしまった馬鹿な男の戯言だが、聞いてやっってはくれないだろうか。

カフェで待つているよ。それでは。

なんと、メールの送り主はマスターであった。それを読み終えた潤は携帯を折たたみ、何も言わずに空港をあとにした。

しかし、彼が向かった先はカフェではなく、一人暮らしをしている自分の家であった。

当然、誰もいるはずがない……と思ったが、ドアを開けるとそこには無二の親友である圭輔と、ほか数名の青年がたむろしていた。

圭輔は、突然の友の帰国に、全身で喜びを表現するのであった。

「お……おおおおおお！？ 潤！ 潤じゃないか！ 帰ってきたんだな！？ くうく、待ちくたびれたぜこの野郎！」

「お前もな、よくオレんちを守り通してくれやがったな！ 合鍵預けた甲斐があるってもんだ！ 感謝してんぜ！」

玄関先で騒ぐ2人を見ていた他数名は居心地が悪くなってしまったのか、自分が興じていた事を中断した。

そして、その中で最も温厚そうな1人が圭輔のもとにやってくる。

「ね、圭輔くん。その人がこの家主さんなの？」

「お、そうだった。お前からこいつの事知らなかったよな。紹介しよう、こいつがこの家の家主である古賀潤だ」

「うっす。初めまして、お三方」

「お前らも名乗れや」

「よっしや！ じゃーオレから行くぜ！オレは森野翔司ってんだ。今年から大学に通ってる20歳、いっちょよろっしく！」

「あ、僕は嶺山拓真です。僕も大学生だよ。よろしくね、潤くん」

「……手塚周一。翔司と同じ大学行ってる」

「ふ〜ん……。みんな大学生かい、ご苦労なことって。オレは古賀潤。気ままなバツクパツカーさ。圭輔にはいろんなところで世話になってるよ。よろしくな」

「また圭輔繋がりか……。お前、一体どれだけ人脈あんだよ？」

「さあな。いちいち覚えてられない……。ってくらいだろう。……。そうだ潤よ、お前カフェ行かないのかっつーか都ちゃんに会いに行かないのか？ あの子、ずっとお前の事待ってたぞ」

「あ……。ああ……。そのつもりだが……」

「だが？」

「……いやな、言いくいんだけどさ、オレ実はまだ自分の気持ちに整理がついてなくて……。こんな半端な気持ちじゃ、あの子になんか会えないよ」

「おつとつと？ カフェのアイドルをとりこにしちまったイケメンさんは、実は意外とヘタレだったのかい？」

「おいおい、冗談キツイなお前。初対面だったのによお」

「へっ、どうせまたお決まりの茶化しだろ。お前もいちいち目くじら立ててんなよ、めんどくせー」

「ちょ、ちよつと！ 何言い争いしてんのさ……!!」

「そうだぞお前ら！ ったくよー、オレから見たらお前らなんざどんぐりの背比べだっつーの！ ……まあな、潤よ。今は気持ちの整理がついたつかないの問題じゃねーだろ」

「じゃなー！ また来いよー！」

「んじゃ、オレらも行きますか」

「ラジャー」

そして圭輔、潤も身支度を整え、カフェへ向けて走り出した。

その頃、都はまだ悩んでいた。

彼女は一度悩み始めると、決めるまでかなりの時間を費やしてしまう。この時ももうすでに30分以上は悩んでいるのだが、未だに明確な結論が出せずにいた。

そんな時、相変わらなくたびれた格好の圭輔と、格好だけでなく肉体的にもくたびれている潤がカフェのドアをくぐった。

「いらつしゃい」

「……？ ……！ 潤さん！ 潤さ〜ん！！」

潤の姿を久々に見た都は考え込むのをやめ、潤に勢いよく抱きつく。

だが今の潤には、彼女を受け止めるだけの体力・気力がともに不足していたようで、バランスを崩し転倒してしまう。

「わわっ！！ 潤さんゴメン、痛かった……？」

そう言いながらさらに潤に接近する都。そして……彼の口をふさぐ。

「……へへっ、ちよつとずるかっただかな？ でも……おれ、すっげえうれしい……。逢いたかった、ずっと待ってたんだ！！ うわああ〜〜ん！！」

しりもちをついたままの潤に抱きつきながら泣き出してしまった都。

潤は少し戸惑いながらも、彼女の髪に手を伸ばし、ゆっくりと撫でる。

「ごめんな……。何も言わないでいきなり旅立って」

「えぐ、えぐっ……」

言葉をかけるも、都は泣くばかりで返事が出来ない。

そんな2人のもとに歩み寄ったマスターはひとつの鍵をちらつかせ、潤に耳打ちをする。

(これはうちの鍵だ。裏手に回るとドアがあるから、こいつを使って家に入ってくれないかな)

(えっ、でも)

(僕が許す。これじゃ他のお客さんの迷惑になるし、都ちゃんもキミと2人つきりの方が落ち着くだろうし)

(……わかった)

潤は都を立たせ、手を引いて店を出た。

そして、店の裏手に回り、ドアを開ける。

「都ちゃん、入るぞ」

「くすん……。あ、ああ」

「階段、上げるか？」

「……出来ないって言ったら？」

「……こうする！」

「ひゃうっ!？」

潤はおもむろに都を抱き上げた。都は突然の事に驚いたが、いつしかそのまま身を潤に委ねていた。

そして、2Fの都の部屋のドアを開け、そのままベッドに下ろした。

「はあ……。ここが都ちゃんの部屋なんだ。なんにもないな」

「まあな。だつてよお、なんにも持つてきてねえし……。服だつてほとんどちなみさんに借りてるし。ちよつと小さいけど……」

「……あっ! そう言や都ちゃんが制服着てんじゃん! それもちなみさんの? ツーかコスプレ?」

「なっ……。ちげえよ! 今日からかおりゆんたちとおんなじ学校に通う事になつたんだよ。似合ってる?」

「ああ、すつごくくな。メイド姿もいいけど、そっちもすつげえかわいいで」

「へへっ……。やっぱりうれしいな……。一番大好きな人にそう言われるとさ……」

都が照れながら言うと、潤は急に表情を暗くして呟く。

「……都ちゃん。本当にオレなんかでいいのか？」

「えっ……。どういうことだよ？」

「オレは……キミに告白されたその日に外国に行った。いや、逃げた。……あの時のオレには、都ちゃんと付き合う資格なんて無かったんだ」

「ちよつと待てよ！ 誰々と付き合うのに資格なんかいるのかよ！？」

「いるんだよ！！……オレの中ではそうなってる。オレの中で何も整理がついていない、そんな半端な状態で付き合っても楽しくない。そう考えたから、オレには資格がないんだ」

「そんな事ない！ おれは潤さんといっしょならなんだって……」

「だからっ……。！ そんな簡単に片付けるなよ！……じゃあよ、こんな事してもいいのか？」

そう言うと潤は、沈んだ表情を突然厳しいものへと変貌させ、都をベッドに押し倒す。

そして、上から覆い被さるような体勢を取り、両腕の自由を奪った。

都は咄嗟に身構え、抵抗の姿勢を見せると……潤は掴んでいた腕を放し、言い放つ。

「ほら、拒否したじゃないか。男つてのは、女性にとってはどこまで行っても恐ろしい生き物なんだよ。今で分かっただろう？ いっどこでこんな事されるかわかったもんじゃない」

都から離れた潤は、彼女と目を合わせないまま言葉を紡ぐ。

「オレは、こういう光景をいくつも見てきたんだ。その中には思い出したくもない事だってあった……。だからオレは距離を置いた。自分を見つめなおす為に」

「……そのせいでおれがツライ思いしたってのは考えてねえのか？」

「ああ、考えてない。自分の事でいっぱいだったし、他人の事考える余裕なんかなかったからさ。……だからオレには都ちやんと付き合う資格がないって言ってるんだ」

せつかく帰ってきた最愛の人が突然こんな事をのたまい始めた。都にはそれが理解できない。

今まで会えなかった分たくさん愛してくれと思っていた。しかしふたを開けてみたら、付き合う資格がないと言われる始末。

「自分の事がキャパオーバーしてて、そのせいで他人の事に気が回らない。そんな奴が他の人と一緒になんかなれるのか!? どうなんだよ!」

ついに怒鳴られてしまった。都は先ほどから彼の態度に腹を立てつつも必死に抑えていたが、ついに抑えが効かなくなった。

「ざけんなよ……」

「ん?」

「ざけんじゃねえって言ったんだよ!! なんだよ、そんなにウジウジしゃがって! それでも男かよ! それで状況悪くなったらキレるとか、意味わかんねえよ!」

目に涙を湛えつつ、怒鳴り散らす。マスターはここまで想定して彼らに合い鍵を託したのだらう。

「潤さんがそんな人だなんて思わなかった……。戻ってくるのを心待ちにしてたのに……」

「なんとでも言え。オレはもう言うだけの事は言ったつもりだ。言いたい事があるのなら、あとは都ちやんの番だ」

「帰れよ……。話す事なんかねえよ! もう二度と顔なんて見たくない! とつとつどこにでも行きやがれってんだ!!」

「そうかよ。んじやな」

激昂する者を逆撫でするような潤の言葉に、ついに都は我を忘れてしまった。

「……………うあああああつ!!」

「ぐあつ……………! 痛てえ……………!」

都は、お世辞にも長いとは言えない爪で潤を引つ搔いた。彼の頬には数本の切り傷が生じていた。

「そうか、それが望みか。オレを傷つける事で気が済むのなら、いくらでもそうすりゃいい。甘んじて受けようじゃないか。来な」

「ふーっ……ふーっ……。うあああっ！！」

続け様に都は、潤の腹部を強打する。

明らかにケンカ慣れしているその一撃は、彼にかなりの痛手を負わせた。

「ぐう……あっ……！！」

「うらあっ！！」

「……っ！ ぐぼっ……」

「つああああっ！！」

「……！！」

そして……都の渾身の蹴りが、潤を壁まで吹き飛ばした。

「はっ……やべえ！！」

彼女はそこでようやく我に返ったか、傷つき倒れた彼に駆け寄るのだった。

「うっ……ぐう……！ 気は……済んだか……？」

「しゃべんじゃねえ！！ 潤さん……ごめんね、痛かった……？」

「ああ……痛かった。でも、殴られてやっと分かった。都ちゃんが心に受けた傷は……この程度じゃないって事がな」

「……？」

「さっきさ、オレが都ちゃんに何も伝えず距離を置いたら、傷ついたって言うてたじゃないか……」

「そ、そうだけど……その時は、おれどうかしてたんだよ。ホントはさ……潤さんがおれを試してたって思ってた……」

「試してた……？ オレが都ちゃんを？」

「うん。おれから潤さんが離れても、おれは待ち続けられるのか……って感じで試してたんじゃないの？」

「いや……別に」

「そう……。まあ、それはいいや。そう思う事で……。おれはこうして待てたわけだから……。さ……。潤さん」

「ん……？」

「さつきはあんな事言っでごめんなさい。おれ、どうかしてたんだ……。でも、おれは今でも潤さんの事が好きだ。……。あなたを、おれだけのひとにしたいの……。潤さんは……？」

「オレにとやかく言えた義理はない。だから、都ちゃんのしたい通りにするとい……。うおわっ!？」

潤が言い終わらないうちに行動に移した都。

その勢いは相変わらず強く、潤は床に横たわる体勢となった。

それは皮肉にも、先ほど潤が都の自由を奪った際の格好と酷似していた。

「み……。都ちゃ……。ん……」

「潤さん……。おれ、この辺がなんか熱くておかしいんだ……。妙にドキドキしちまつてるし……。どうすりゃいいかな……。？」

潤に覆い被さった都は、自分の胸の辺りを指差しながらとろけるような声で呟く。

制服についていたりボンはすでに外されており、ベッドの上に無造作に置かれている。

（くそ……。どうすりゃいい!?! このままこの子を受け入れるか、拒絶するか……。ええい、ままよっ!）

その時だった。潤は無言で都を抱き寄せ、一気に距離を縮めた。2人の距離は、それこそ目と鼻の先にまで近づいていた。

「潤さん……。おれ……。すっごくうれしいの……。……。今度はそっちから……。してちょうだい……」

消え入るような声で呟き、目を閉じた都。潤はひと呼吸置き、彼女の瑞々しい唇を包み込んだ。

（あーあ……。ついにやっちまったぞオレ。これで圭輔との『モテないギルド・改』も解散だし、一人旅も出来なくなるし、この子のわ

がままに付き合わなくちゃならなくなるし……)

口づけを交わしながらそう考えるも、いつしか涙を流していた都を見てしまったのは、そんな考えが急速に消えていくのであった。

(……ま、それは後回しでもいいか。それよか……今は、都ちゃんとの一時を楽しんどかなくちやな)

2人の距離は、今ここでゼロになった。

外国に行ってしまった、いつ戻るかわからない待ち人を待ち続けた彼女が見つけた幸せのひとつ『好きな人が出来た事』は『愛する人が出来た事』へ昇華したのだった。

そこから数分後、制服を着なおした都が恥ずかしそうに呟いた。

「がう……。こんなドキドキしたの初めてだぜ……。なんていうか、やっぱりおれも女の子だったんだ……」

「当たり前だ。こんなかわいい女の子どこにもいないぞ。オレだけの大切な……彼女だからな」

「うん！……へへっ、ずっとずっと一緒にいようぜ。約束だからな……！」

「分かってるよ。どこか出かけるときは、ちゃんと連れて行く」

「うれしい……！ ねえ潤さん？」

「なに？」

「がう……。こ、今度は……あなたの家にも行きたいな……」

「お、オレんち？ あんなどこでよけりやいつでもいいよ。……っ」

「かさ、一緒に住むか？」

「……っ！？ いいの！？ ホントにいいの！？ え、だってだって、家族は……？」

「いないよ。いや、都ちゃんみたくホントにいないわけじゃなくて実家にいるけどさ。今一人暮らししてるから……うおっ！！」

「行きたい！ そうしたい！ おれ、あなたと2人で暮らしたい……」

「……！」

「あなた……。ホントにいいのか？ オレは構わないけどさ」

「おれもその方がいい！ マスターには……事情話す。あの人ならわかってくれるからな」

「んじゃーさ、一緒に話つけてみるか？ 一応、あの人がキミの保護者って事になってるみたいだからな。なんだろ、娘さんを僕に下さい……じゃないけどそんな感じかね」

「おれ……もう潤さんだけのものだよ……」

「……嬉しい事言ってくれるじゃんかよ」

「へへ……。んっ……」

どちらともなく口づけを交わし、どちらともなく口を離す。

そして、二人並んでカフェに戻るのであった。

「……おや、帰ってきたんだね」

「みやびよん、潤さん、おかえりっ！ ねね、何話してたの？」

「言つか？」

「おう！」

小さく目配せをしてから、都がもったいつけながら言う。

「えっとな……おれな……。じ、実は……」

「なになに？ 恥ずかしがらずに早く言っちゃいなよ！」

「わかったよ……。おれ……。潤さんの家で暮らす事になった！」

「ぶーーーーーー！？ な、なんだって！？ ぐっ、げほっ……」

……

「ちよ、も、何やってんのよバカ圭輔。都ちゃんが潤の家で暮らす事になったって言っただけじゃん……。って、ええええええええええ！？」

「あらまあ……。それは驚きですわね……。古賀さん、あなたにそんな甲斐性がありましたの？」

「えと、えと……。こ、これがいわゆるひとつのすきゃんだる、ですか？」

「ちよっと違う気がするけど……。でも都ちゃん、よかったね！」

……。あれ？ かおりゆん？」

「……っ!!」

「きゃっ! 痛い……」

先ほどの都の言葉を聞いてから全く動かなくなった果緒梨だったが、瑞奈が声をかけた瞬間に勢いよく駆け出し、そのままカフエを飛び出して行ってしまった。

「ちょ、待てよかおりゅん! どこ行くんだよ!!」

それにつられるように都もカフエを出て行く。残された全員は呆然とするほか無かった。

「……な、なあ? 都ちゃんは何か果緒梨ちゃんの逆鱗に触れるような事言っただのか?」

「わからん! 全くもってわからん!」

「は、やっぱりダメねアンタら。果緒梨ちゃんがどーゆー気持ちだったかわかってあげられないなんて」

「私にもだいたいは把握できました。ですが……都さんだけでは事をさらに泥沼化させてしまいかねません。みさきさん、私達も向かいましょう」

「もちろんよ、お嬢。ちょっと男ども! アタシらの荷物、ちゃんと見ときなさいよね!」

「あ、ああ……」

「ひゅう、これが年の功ってやつかい?」

「バツカ……! またお前は余計な事を……! オレ知らね。みんな、オレら奥に引っ込んでようぜ。これからとんでもねえ事が起こるから!」

圭輔の提案で、潤とみさきと優香以外の者は全員カウンター奥に引っ込んだ。

そして潤は、みさきと優香の2人に詰め寄られるのだった。

「こゝらあ……。そんな事ほざきやがるのはこの口かあ!? ええ!?」

「ひゃ、ひゃめへふへえ……」

「いいえ、やめませんわ。……あなたは、私達を怒らせてしまいま

した。その罪を償いなさい。……みさきさん、押さえつけておいてください」

「あいよっ、お嬢！」

優香に言われるがまま、潤を羽交い絞めにするみさき。

潤の目の前には、空手の基本姿勢を取りながら呼吸を整える優香の姿があった。

その気迫はあまりにも強く、離れているはずの潤やみさきにも感じられるほどであった。

「ちょ、マジ勘弁してよ……。土下座でもなんでもするからさ……」

「情けない声出さない！ 男のクセに！ そんなんで都ちゃんとやってけんの!？」

「それとこれとは別問だ……うおあっ!!」

潤が情けない声で許しを懇願したその刹那、優香が一步踏み込んできた。

そして、流れるように左脚を大きく振り上げ、潤の脳天に向けて一気に振り下ろす！

「くっ……!!」

覚悟を決めた潤は目を閉じた……と同時に体の力が抜けてしまい、その場に倒れこんだ。

「……。まったく、本当に決めるわけがないでしょう。死者が出てしまいますわ」

「お嬢……。そーやってさらりと恐ろしい事言わないでよ……」。

「アタシもビビっちゃったじゃ〜ん」

「そうでしたか？ それは失礼をいたしました。……さて、余計な時間を食いました。私達も向かいましょう」

「あ、あいよ！ そんじゃみんな、行ってくるからね！」

倒れたままの潤をほったらかしにし、みさきと優香の2人も果緒梨と都を追いかけた。

第7章：New Life

「待てよ！ かおりゆん！」

都の告白を聞いてシヨックを受け、カフェを飛び出した果緒梨。だがその行動も空しく、追いかけてきた都に捕まってしまふ。

「来ないで！」

「そういうわけにもいかねえよ！ ……そら、捕まえた！」

「いやっ！ 放してよ！ 不潔！」

果緒梨は心底から拒絶するように都の手を振り解く。

その行動に腹を立てた都は果緒梨の胸倉を掴みあげ、声を荒げる。

「ちよつと待てよ。不潔ってどういう事だよ！」

「不潔だから不潔って言ってるの！ みやびよん……不潔だよ……。」

一人暮らしの男の人の家に上がりこむなんて信じらんない！」

「そつちこそ信じらんねえよ！ 好きな人のところに行くのなんて普通じゃねえか！ そつちの考えを押し付けんじゃねえ！」

「う……」

「それによお、おれが潤さんの家に行く事がかおりゆんに何か迷惑かかったりするんのか！？ 何も迷惑かけてねえならいいだろ！？

なあー！」

「だけど……だけどっ！」

都に言い寄られ、ついに反論の言葉をなくした果緒梨。するとそこに、凜とした声が響き渡った。

「そこまですわ！」

「まーまーお2人さん、ここはアタシらおねーさんに任せときなさい。……とりあえず双方の言い分を聞こうじゃないの。んじゃ果緒梨ちゃんから」

「あ……あたし？ ……あたしは、男の人の家にそんな簡単に上がりこんでもいいのかどうかって言ってるの。だってそうでしょ？」

「ま、そーだわね。他には？」

「それに……みやびよんは今、マスターの家に住まわせてもらって
るじゃない。そっちの方が絶対安心して暮らせるのにどうしてわざわざ
大変な方を選ぶわけ？」

「確かにそうですわね。他にはありますか？」

「……。あたしはっ！ ……あたしは、みやびよんの一番の親友だ
から！ みやびよんの事を思っ言ってるの！」

「……わかりました。以上でよろしいですか？」

「いいわよ。あたしはもう言う事は言ったもん」

「はいはい、落ち着きなさいよ。……じゃあ都ちゃん」

「おれ……？ っていうかよお、好きな人の家に行くのがどうして
不潔なんだよ。どうして不潔とまで言われなきゃなんねえんだよ！

そこが一番わかんねえよ。教えてくれよ！」

「だって……だって……！ ぐすっ、みやびよんを……っ！ 取ら
れちゃうと思ったからっ……！」

「……へ？」

（やっぱり。思った通りね、お嬢）

（そのようですわね）

果緒梨が自分の本心を吐露したと同時に、小声で相談を始めたみ
さきと優香。どうやら彼女らの想像は当たっていたようだ。

「あたしも……みやびよんの事が好きだから……大好きだから！！

だから……他の誰かに渡したくなかったの！！」

彼女は、涙声でさらに続ける。

「それに……あたしは、潤さんにはみやびよんを任せておけないっ
て思う。またあの時みたいに心無い言葉でみやびよんが傷つけられ
るかも知れないと思うと、気が気じゃないの！」

「だから……どうしてそう決め付けたんだよ！？ まるで、潤さんの
ところに行ったらおれがダメになっちゃうように言っでんじゃねえか
だからかおりゆんはせっかちだっ言われんだよ！ まだ始まって
もないのに決め付けられちゃたまんねえよ……っ、これはこな
いだかおりゆんがおれに言ってくれた事じゃねえか」

都は、以前言われた言葉を思い出していた。

自分の気持ちに正直になれなかった頃。

気持ちを伝えるのを戸惑っていた頃。

告白の失敗を恐れて、行動が出来なかった頃。

「ほら、『まだやってもいないのに勝手に決め付けちゃえるの？』
って言うてくれたよな。おれ、今でもはつきりと覚えてるぜ。どう
して……意見変えちまうんだよ!？」

行動を起こそうともせず諦めるのは一番いけないことだと、果緒
梨が教えてくれた。

まさかそれをそっくりそのまま言い返すことになるとは、都も思
っていなかっただろう。

「はいはい、ブレイクブレイクよー。落ち着いてねーん、都ちゃ
ーん」

今にも掴みかからんとする勢いの都を引き止めるみさき。その間
にゆっくりと優香が割り込み、語り始める。

「お互いの言い分はある程度分かりました。私も、果緒梨さんは少
々焦りすぎているように思いますわ」

「優香さんまでそんなこと言うの……?」

「ですが彼女の言い分も分かります。古賀さんに女性を預けるのは
不安を覚える……という意味ではありませんがね」

「まわりくどいな……。結局どっちなんだよ!？」

「これは失礼。私もみさきさんと同意見ですわ。……果緒梨さん」
「……なによ」

「これだけは言うておきます。……たとえ都さんが古賀さんの家に
住むようになったとしても、都さんはあなたから離れてゆくわけで
はございませんことよ」

「そそ。つーかさ、なんで誰かを取った取られたとか言うわけ?
アイツン家に潜り込んだからって都ちゃんがアイツのもんになるわ
けじゃないんだし」

みさきは呆れたような仕草を見せ、諭すように言った……と思っ

たら、直後に大声でまくし立てる。

「ていうか！ 人間ってーのは、最初っから誰のもんでもないの！ 人の所有権なんか誰も持ってないっつーの！ 人間はモノじゃないんだから！！」

「……っ！」

「わかるでしょー？ だから、都ちゃんは潤の家に住み着くことになるかもしれないけど、だからってアンタとの接点がなくなるわけじゃないのー！」

「みやびよん……本当なの？」

「当たり前じゃねえか！ おれがかおりゆんとの接点を絶つわけねえだろ……？ 一番のおともだちなのに……！」

「ほらね。焦りすぎだったっしょ？ はー、なーんでこんな簡単なことがわっかんないかなー？ 今なら遅くないから、謝っちゃいな」

「う……うん！ ご、ごめんねみやびよん……。あたし……また先走りすぎちゃった」

「へへっ、しっかりしてくれよホントによお……。大丈夫。おれは何があっても、かおりゆんから離れねえから……。どこにも行かないから！」

「うん……うん……！ ありがとう……ごめんねっ……！ うぐっ……っ！」

「どうやら、丸く収まったようですわね」

「そーね。ま、たまにはケンカも必要っしょ。雨降って地固まる、かな」

「ふふっ、その通りのようね」

わだかまりの解けた都と果緒梨は、みさきと優香を引き連れてカフェへと引き返す。

その頃にはもう6時を回っており、辺りにはすっかり闇の帳が下りていた。

「やあ、お帰り」

だが、そんな彼女らを出迎えたのはマスターではなく孝太郎であった。

「わっ、コタロー先生!? 来てたの?」

「ああ、さっきね。とりあえず仕事がひと段落したからさ」

「お帰り、都ちゃん。ちよっといいかな?」

「あ、うん……。そうだ、お仕事のことだ……」

「で、どうするか決まった?」

「がっ……。まだ決まってねえや……」

「そうか。ならば教師として言わせてもらおう。うちの学校の校則には、原則としてアルバイトは認めていないとある」

孝太郎は座ったまま真剣な顔で、都に語りかける。

「もしこのまま都ちゃんがここで働こうものなら、ぼくはその事実を知っているながら見て見ぬふりをしたという事で学校から何らかの処分を下されるだろう。それは困る」

「う……」

「……と、ここまでは最低な教師の一例でした。もちろんアルバイトを肯定するとまでは言わないが、生徒の自主性を尊重するのが教師としてのあり方……。なんじゃないかなと思う」

「言うね、コタロー。伊達に教師やってないな」

「そいつはどうも。結局、決めるのは都ちゃんだ。ぼくが答えを出してもいいし、そっちの方が早いかもしれないけど、それじゃあ都ちゃんの『個』を尊重している事にはならないからな」

「うむ」

「主義の押し付けは一番やってはいけない、だからぼくは都ちゃん自身に答えを出してもらいたんだ。……どうする?」

「……。マスター、ごめん!! おれ……。ここで住むのもやめるし……。仕事も辞める!!」

「……!」

今まで苦悩を続けてきた都がついに出した結論、それは『ここで生活を終える』という事であった。

その言葉を聞いたマスターは、本当に一瞬ではあるが笑顔を消し、悲しみの表情に変えた。

だが、それに気づいたのは目の前に座っていた孝太郎のみであった。

（まさか、こいつがこんな顔するなんて……！？）

「そうか。よく決めたね。……今までありがとう、本当に助かったよ」

「な、なんだよお……。しみりすんじゃねえよ、今生の別れってことじゃねえだろ？」

「確かにそうだ、すまなかった。……ははは、生意気にも親心なんか持ってしまったようだよ。……どうする？ もう今日出発するのかな？」

「……。今日一日だけ、ここにいる。荷物まとめるとかあるし、ちなみさんにお別れしてねえし……」

「そう……か。という事だ、潤くん。残念だったな」

「ま、仕方ないっしょ。こっちだって部屋片付けたりとかしなきゃなんねーからさ」

「何言ってるんだこのスケベ！ ベッドの下のアレ、しまい場所変えようぜ！」

「バツカお前、オレはそんなとこに置いたりしねーよ！ 第一、ベツドなんか持ってないし……」

「ほくお？ じゃあ他のどこかにはあるかも知れないんだな？」

「くっ……。てめえ、カマかけやがって……」

「ねー都ちゃん、ホントにこんな奴でいいのー？ 他にもっといいのがいそーなのに」

「おれには潤さんが一番カッコイイの！ ……ね、潤さん」

「あ、ああ……そうだな……」

「けけえーっ！ おアツいこって！ マスター！ カキ氷くんな！」

「はいよ、カキ氷」

「おお、これこれ！ そうそう、季節外れの柿をキンキンに凍らせて

……つて、なんだよこれ!？」

「見ての通り、カキ氷」

「わかつてるよ! つーかなんか違うし……。それよりも! なん
でそんなとこ入ってんの!？」

「なんでだろうねえ。なんか冷凍庫覗いてみたら入っててさ。恐ら
く入れたまま忘れてたんだろう」

マスターと圭輔の息の合った漫才に、その場に居合わせた全員の
表情が緩むのであった。

そして翌日……。昨晚から寝る間も惜しんで荷造りを進めていた
(とは言えほとんど持ち物はなかったが) 都は、その荷物を朝方カ
フェを訪れた潤に託した。

「それじゃ潤さん、これがおれの荷物だよ。つってもそんなない
けどよ」

「どれ? ホントだ、軽いや。こんだけでいいの?」

「いいんだよ。足りなかったら……。これからいっしょに増やしてき
ゃいいじゃねえか」

「なるほど、そういうことね。これから学校だっけ?」

「うん。帰りはそっちに行きたい……。けど、おうちわかんねえよ?」

「ああ、そうだったな。終わる時間さえ分かれば、学校まで迎えに
行くつもりだ。そんで一緒に行こう」

「うん! おれ……。うれしい……」

小さく呟きながら、潤を抱く都。そして、少し背伸びをしながら
彼に口づけをする。

「はは、積極的だな」

「うん! んじゃ、行ってくる!」

飛び跳ねるように学校に向かう都を見ながら、潤も自宅へと戻っ
ていった。

「さっつてと、片付けでもすっかあ。しっかどこから手をつけり

「やいもんかね……」

「都から預かった荷物をテーブルに置き、改めて自分の部屋を見回した潤。」

「モノ自体が多いわりには整っているものの、それでもしまい切れていない本や置物が床に放置されているので、お世辞にも人が住むのに適した環境とは言えない。」

「いやはや、こんな部屋にや女の子は呼べねーよな。よし、こういう時は人海戦術だ！」

「何かを思い立った潤は携帯電話を取り出し、慣れた手つきで操作をする。」

「あーもしもし、オレだオレ。いきなりだけど、今手え空いてる？」

「そして数分後……。」

「で、結局ヒマなのはお前らだけってことか」

「いるだけありがたいと思いなよ。せつかく休講だったのに……」

「どうせ自主休講だろう。ならば手伝ってやってもいいと思うがな」

「潤の呼びかけに心じて来てくれたのは、彼の中学校時代の友人である中村和也と綿引直樹。」

「2人とも中学時代は部活でテニスをやっていたが、和也は肘の故障により、直樹は自分の限界を感じ断念してしまったという。」

「で、オレらはどうすりゃいいの？」

「んーそうだな。とりあえずさ、床に置いてあるのを種類別に分けて一箇所にまとめといてくれ」

「わかった」

「潤の指示で動き始める2人。言い出しっぺの潤もまた、いるものといらないものを選別しているようだ。」

「えーつとこれもいる、これもいる、これも……」

「おーいおい、いるものばかりじゃなかよ。こんなの何に使うの？」

「バツカお前、これはお世話になった人からもらった大切な花瓶だ

よー」

「だったら花瓶としてちゃんと使ってやらなきゃ。こんなところに転がしてるんじゃ、宝の持ち腐れじゃんか」

「う……。わ、わかった。直樹、1000円やるからこれに合いそうな花買ってきてくれ！釣りはやる」

「お、ホントに。んじゃちよつと行ってくるよ。よっこいしょ」

直樹は潤から花瓶と金を受け取り、外に出て行った。

「いいか！くれぐれも落とすんじゃねえぞー！」

「心配なら自分で行けばいいじゃないか……」

「バツカお前、そうしたら誰がこの掃除を指揮するんだよ？それに、お前らだけじゃいるものといらないものの判別がつけられないじゃないか」

「なるほど、それもそうか。で、捨てるものはあるのか？」

「いんや、やっぱあんなまなさそうだ。なんだかんだ言って、どれもオレの大切なものだよ。……見てみる、これ。オレらが中坊のころの栄光だよ」

「どれ？」

潤は和也に古びた箱を見せる。その中には今でも輝きを失っていないメダルが入っていた。

「これは……」

「そうだ。オレらが全国制覇した時のメダルだよ。……正直、あの時お前がいたら勝ててなかっただろうよ」

「いや……。それはお前らの努力の結晶だ。おれがいたところで結果は変わっていない」

「それだけじゃない。ここには……他にもそういったものがたくさんあんだよ。捨てられねーよ……」

「そうか……。実家に送るってのはダメか？」

「ダメだな。自分の手元に置いときたい。それに……今日から都ちやんが来るからさ、話のネタになんじゃん」

「なるほどな。……おれも、都萌とはそういう話題が尽きないよ」

「あーそうそう、ともちゃん元気？ 最近会ってないからさ」

「まあ、元気だよ。でも困ったもんだよ、いつまでも泣き虫でさ」
「んなこと言って、そういうのもかわいいとこだって思ってたんだろ
く？」
「う……。そ、そんなこと今はどうだっていいだろ……。ほら、続
きやるぞ」

「はいはい」

和也に促されながら、潤は再び作業に取り掛かった。

片付け始めてから20分ほどが経過しただろうか、その頃ドアを
ノックする音と同時にドアが開けられた。

そこには、色とりどりの花を挿した花瓶を持った直樹がいた。

「ただいまー。ほれ潤、これでどう？」

「おおー！！こりやすげえエキゾチックっつかアジアンなテ
イストが出てんじゃん！お前、センスあるなー！」

「や、そうじゃないんだ。花屋のおばちゃんが見繕ってくれてさ、
ちよっとおまけしてもらっちゃった」

「そっ、その花屋どこだ！？今度お礼言いに行かねーと」

「ははっ、義理堅いなお前は」

「そりゃそーだ！いいかお前ら、人と人との繋がりほど大切に尊
いものはないんだ。金で買えるものじゃねーんだぞ。これに関して
は、自分の振舞いが全てを決めんだよ」

潤はここまで言ってから2人に向き直る。

「お前らも……。こんなオレを信用してくれてるから今こうしてここ
に来てくれたんだよな。……。本当にありがとう。感謝してる」

「……。おいおい、よしてくれよ。今さら何言ってるんだよ」

「そうだよ！今さら確認するまでもなく、オレたち親友じゃない
か！そんな奴の頼みなんだぞ、断る理由がどこにある！？なあ
和也！」

「もちろんだ。なかなか会う機会もないが、だからこそ大切にした
いしな」

「ありがとよお……。お前らみたいな友達を持って、オレは本当に幸せだぜ。……っと、そろそろ昼か。メシでも食いに行くか！」

「え、いいの？ まだ全然終わってない……」

「あとでいいんだよ。どうすんだ？ 腹減ってんだろ？」

「言われてみれば。何だかんだでもう12時になりそうだからな」

「よし、決まり！」

半ば強引に2人を外に連れ出した潤は、片付けもそこに食事をしに出かけた。

一方その頃、都は学校にいる……。はずが、もう学校の外に出ようとしていた。

間もなく2学期が終了する関係で、この日から学校が午前中で終わってしまうためだった。

「ねーみやびよん。これからどうすんの？」

「えっと、今日から潤さんの家に行くことになってんだけど、まだどこにあるかわかんねえから迎えに来るまでここで待ってるつもりだ」

「そっか。で、いつ迎えに来るか分かるの？」

「いや、わかんねえ。……っーか！ 今日おれが半ドンだったの教えてなかった！」

「あちゃ、マジ？ んじゃきつと4時ごろ終わるもんだと思ってるね……。今からでも遅くない、潤さんに連絡しないと！」

「がっ……。だけど、おれ連絡先わかんねえもん……」

「ごっめーん！ あたしもわかんないんだ。瑞奈、クリス、わかる？」

「わかんない……。ごめん」

「みーとうー……。わからないです……」

「困ったね……。あ、海斗か稲村くんはどうかな……。って、ダメだ。あいつら部活だ。まったく、こんな寒い中でもよくやるわよね」

「オレっちたちがどうかしたでっすか？」

「ぶっ!? いるし! あれ、部活は?」

「ああ、今日はないんだ。自主トレしとけだって」

「ちょーどよかった! 2人のどっちか、潤さんの連絡先知らない!? ねえ!」

「わわっ! ちょ、ちょっと慌てねーでくれでっす!」

「古賀センパイ? えっと……。あ、あった」

「オレっちもあるでっすよ」

「よっしゃ! 悪いけど、連絡してくれねえか?」

「お安い御用さ。じゃあ俺が引き受けようか」

「竜造は落ち着いた様子で、潤に連絡を始めた。」

「……もしもし、古賀センパイですか? お久しぶりです。……すみません、ちょっと待っててください」

「そこまで言っつて、竜造は果緒梨に尋ねる。」

「そっだ青山さん、古賀センパイに連絡したはいいけど、これからどうするんだ?」

「あ、みやびよんに代わってあげて。ほら、あたしら潤さんの連絡先誰一人として知らなかったからさ」

「なるほどね。……それじゃ都さん、ほい」

「竜造は都に自分の携帯を手渡した……が、彼女にはその使い方がわからなかった……。」

「わっつと……。ど、どうやんのこれ?」

「いや、普通に電話するように使えばいいんだよ」

「こ、こう? えっと……もしも?」

「都が竜造の携帯から潤に話しかけたと同時に、電話機の向こうから何かが倒れる音がしたが、都は気にせず話を進める。」

「あ、竜造くんが代わってくれたんだよ。用件? おれ、学校終わったから迎えに来て。……うん、今日半ドンだったんだ。言わなくてゴメンね」

「わあ、恋人同士の電話って感じが出てる〜」

「ですね! ミーはとてとてもエキサイトしてきましたです!」

「……え、今カフェで昼メシ食ってんの？ おれも……交ざってもいいかな。……いい？ いいの！？ やったあ！ ……うん、わかった。おれも今から向かうよ。待っててね……」

都はそこで会話を終えた。その様子を察した竜造は彼女に声をかける。

「終わった？」

「あ、うん。どこ押せばいいんだ？」

「あとはやっとかからいい。貸して」

「ほい。……あ……」

竜造に携帯を返した都は、その際に彼の手に触れてしまっていた。「あ、代わりました。……すみません、さっきは何も言わないで代わっちゃって。んじゃまた今度」

電話越しに平謝りをしながら竜造は通話を切った。

「はは、怒られちゃった」

「ありがとな竜造くん！ じゃおれ、もう行くわ」

「あ、ばいばーい！ 潤さんによろしくね！」

言うのが早い、都はさっさとその場から去ってしまった。

ガシャーン！！

「はあ……はあ……」

「いらっしやい」

都はカフェのドアをいつもより強く開ける。ここまで乱暴な扱われ方をされても、何故かこの店のドアはビクともしていない。

「お、都ちゃん！ こっちこっち！」

「……潤さん！」

4人がけのテーブルに腰掛けていた3人の中に飛び込む都。

都合よく潤の隣が空いていたので、そこに誘われるように席に着く。

「へへ、うれしいな……」

「潤、その子がお前の彼女か？」

「へー、かわいいじゃん。気の強そうなところがまたいいよね。よかったな、潤」

「……お前ら誰だよ」

「おつとと、マジで気が強そうだ。あ、オレは綿引直樹。潤とはもう幼稚園の頃からの付き合いだっけ？ ま、そんな間柄さ。よろしくね」

「おれは中村和也。潤とは中学からの知り合いだ。今日はこいつの家の片づけを手伝ってたよ。よろしく」

「へえ〜。潤さんも友達多いんだな。あ、おれは神崎都つてんだ。

潤さんの彼女。2人ともよろしくな！ ……え？ 今片付けしてるつて……？」

「ああ、こいつが言うんだよ。『女の子を部屋に呼ぶんならこんな部屋じゃダメだ！』つてんでオレたちに手伝い頼んできてさ」

「バツカお前、ちげーよ！ 『こんな部屋に女の子呼べねー』つて頼んだんだよ！」

「どっちだつて同じだろうが」

「そうだよな……。どっちだとしても、潤さんがおれのためにそうしてくれたのには変わりねえもんな……。ありがと。おれ……すっげえうれしいの……」

静かに言いながら潤に抱きつく都。そして、小さく口づける。

「おーおー、見せ付けてくれるねえ。ねえ和也、お前もあいつことするの？」

「はは……勘弁してくれよ。まあ、ああなるのも悪くはない。というか最近……してくれない」

「ぶっ！？ してくれないって……何を！？」

「いや、何をつて……。最近会えてないから自然とそうする機会が少なくなってるし、そのつもりで……」

「なんだよそつちかよ……」

「なに想像してたんだよこのスケベ！」

「ちよ、違うよ〜」

「あははっ！ みんな楽しそうだな。……潤さん」

「……はい？」

「おれたちも……今みてえにずっと笑いあっていけたらいいな。そりゃ……おれは他のみんなに比べたら共有した時間は短いかも知れねえけど、時間なんて関係ねえよな」

「都是愛する人の顔を真っ直ぐに見据え、少しだけ目を潤ませて言う。」

「おれ、がんばってそういうの埋めていくから！ だから……おれを手放したりしないで……ね」

「あ……ああ、わかってるよ」

「よかったな、潤。大切にしてやりなよ」

「うるせーな！ 言われなくなつてそうするわい！ んなこと言う前によ、直樹よ。お前もさっさと彼女作りやがれ！ オレらん中でいねーのお前だけだろが！」

「あつ、その上から発言ムカつくな〜」

「なあ潤さん、まだ行かねえのか？」

「おおっとそうだった。そろそろ行くか？」

「うん！ 2人は？」

「……どうしたらいい？ まだ片付け終わってないだろう」

「和也、2人にしてやるうよ。潤もその方がいいでしょ？」

「バツカお前ら、そんな心遣いいらねーよ！ こうなったら都ちちゃんにも手伝ってもらう。いいか？」

「もちろん！ 早く行こうぜ行こうぜ！！」

「だー、引っ張んなって！」

「都に引かれるがまま、4人は店を出る。……会計もせず。」

「……はい、潤くん名義でツケ発生と。タダ食いは怖いぞ〜……ヒツヒツ」

「ちつちえ〜……」

都は素直に、潤の部屋の感想を漏らしたが、無理もないだろう。彼の住んでいるアパートである『もえぎ荘』は家賃こそ3万円未満（敷金、礼金なし）と信じられないくらいに安い。

だがその代償として本当に部屋とキッチンしかなく、トイレは敷地内にただ1つ、風呂はもちろんないという木造のアパートであり、そこに多くを望む方が無理な注文であるからだ。

潤の部屋は日当たりがよいためそんな古びた建物の中でもましな部類に入るのだが、それでも6畳一間と申し訳程度のキッチンのみでは、さすがの都も狭いと思ったのだろう。

「悪かったな、ちつちやくて！ オレの稼ぎじゃこれが精いっぱいだ……！」

「あつあつ、ごめんごめん。そんなつもりじゃねえんだ」

「わかつてる。……ま、将来的にはオレも手に職をつけて、もっといい家に引越したいもんだぜ」

「そんな時は……もちろんおれもいつしよ……だよな？」

「ああ……もちろんだ」

「……はいはい、らぶらぶなのは分かったから続きやろうよ！」

「お、悪い悪い」

甘い雰囲気になりそうになった2人を強制的に現実に取り戻す直樹だった。この中で唯一彼女のいない彼なりの抵抗なのだろうか。

それから3時間後……。

「よし、こんなもんでいいだろ」

「そう？ ま、最初来た時よりは随分マシかな」

「確かに。これなら誰を呼んでも恥ずかしくはないだろう」

「2人ともありがとな！ 今度なんか奢るぜ」

「いーっていーって！ お前も生活苦しいんだろ？」

「そうだぞ。見返りが欲しくてやったわけじゃないからな」

「へへっ、いい人たちでよかったな！」

「ああ、ホントそう思うよ」

「じゃ和也、オレたちはそろそろお暇しようよ」

「そうだな。これ以上いても仕方がないからな」

「というわけだから潤、オレらこれで帰るね。都ちゃんも、さよなら」

「またいつでも呼んでくれよ。……またな」

そう言い残すと、直樹と和也の2人は早々と帰ってしまった。

残された潤と都は、すっかり片付けられた部屋に背中合わせで座り込む。

「やっとふたりつきりになれたね、潤さん」

「ああ、そうだな。……」

「あっ……?」

潤はゆっくりと都の方に向き直り、背中から抱きしめる。

「あつたけーなあ……都ちゃんは……」

「うん……。おれも……あつたかいの……」

「こっち向いてくれ……都ちゃん」

「ん? あ……っく……」

言われるままに潤の方を向いた都は不意にくちびるを奪われる。

今まで都の方からは何度も済ませてきたが、こうして潤の方から求めたのは今回が初めてのことだった。

「……。今のは、約束のキス」

「約束の……キス……?」

「そう。これからずっと……何があっても一緒だっていう……な」

その言葉を聞いた都は感極まり、大粒の涙を流しながら潤を抱きしめた。

「潤さん……! おれ、最高にうれしい……! もう絶対、絶対に

離さない! だからあなたも……おれから絶対に離れないで……ください……」

「わかってるよ。……都ちゃん」

「なあに……?」

抱きしめられたまま潤が言う。彼も、都を力強く抱きしめてから続けた。

「愛してる。オレは、キミを1人の女性として……愛すると決めた。だから……ずっとずっと一緒にいて欲しい……」

「うん……うん……！ おれも……愛してる！ 大好き……っ！
うう……っ、うわあああ~~~~ん！！」

（これで……これでよかったんだよ……。これで……）
嬉しさのあまり泣きじゃくる都の頭を優しく撫でながら、心の中で呟いた潤であった。

こうして彼らはひとつ屋根の下で暮らす事になり、2人の仲も急速に深まっていった。

だが、今の彼らには、これより後に訪れる厳しい現実が待ち構えている事など知る由もなかった。

第8章：Neglect

「ほーれ、都ちゃん起きろー!」

不意に目を覚ました潤が、隣で寝ている都を起こしにかかる。

だが彼女は寝ぼけており、全く取り付く島がない。

「ん〜……なんだよ〜……。昨日は疲れっちまったんだよ、もつとゆっくり寝かせるよ〜……」

「バツカ、そりゃオレだって同じだって! それに! 学校あるだろ? 遅刻しちまうぜ!」

「何言つてんだよ〜……。今日は休日じゃねえかよ〜……。カレンダー見てねえのか?」

「へ……?」

都の指摘を受け、潤はテレビの上に置かれていた卓上カレンダーを見る。

「え〜っと今日は23日だから……あつ! 休みじゃん!」

「だろ〜? ったくよお、せつかくの休日なんだからゆっくり寝て過ごしたかったのによお〜」

「んだよ、いつの間に休日になつてたんだよ。全然知らなかったぜ」

「あははっ、そうだな! ……でさ、潤さん」

布団の中でパジャマを着なおした都が潤に近づき、後ろから抱きつきつつ尋ねる。

「なに?」

「お休みの日だし、こうして早起しちゃったんだからさ、2人でどっか行かねえか?」

「ん〜……ちよつと待つてな。予定確認してみるから……」

そう言つと潤は床に放置されていた手帳を手に取り、パラパラとめくつてゆく。

「あー、今日は圭輔の家で顕共堂についての話し合いがあるんだつた」

「え〜マジかよ〜……。じゃーさ、おれも一緒に行く!」

「そう? 行ってもつまんないと思うけど、それでもいいのか?」

「うん! 潤さんと一緒なら……。どこだって最高の場所になるんだもん……」

「ははっ、そうかそうか。そんなじゃまずはカフェに行こう。そこで合流してから行く事になってるからさ。……おおっと、アレ忘れなように、だな」

「アレって?」

「これこれ。よ……。っと」

潤は収納棚の中からやや大きめの箱を大切そうに取り出した。

その箱の周りに何も置かれていなかったのと扱い方から考えて、中身は何か重要な物が入っているものと思われる。

「へー、なんだろこれ」

「開けんな!!!」

「ひっ……。!?」

都が興味本位でその箱に手をかけようとした瞬間、潤が突然怒声を張り上げた。

これには気丈な都もすっかり怯え、目に涙をためるのであった。

「がっ……。ごめんなさい……。ごめんなさい……」

「あっ、わりー……。っ」

その時だった。目に溜まった涙を少しずつこぼしながら、都が潤に抱きついた。

そして、本当に申し訳なさそうに呟く。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。えぐっ……」

「都ちゃん……。オレの方こそ言いききた……。悪かった」

「じゃあ……。もう絶対にいきなり怒鳴ったりしないで! 怖かったの……。! またあなたに嫌われたのかと思うと……。怖いの!」

「本当にごめん……。だから……。これで許してくれ」

「……。? んっ……」

その瞬間、彼らは結ばれる。

その行為は、都の恐怖や悲しみといった全ての負の感情を浄化してゆく。

「……。もう行くか？」

「もちっと……」

「わかったよ。……」

「潤さん……大好き……」

結局、カフェの開店時間に間に合わなかった2人は、来店と同時にマスターに冷やかされる事となった。

「いらつしゃい、ご両人」

「へいへい。もう何度も聞きました」

「あっそ。んじゃその辺座ってて。水とかおしぼりは勝手に持つてね」

いつものようにセルフサービスである事を強調するマスター。だが、この日は普段以上に素っ気無い。

その小さな異変に気づいたのは、今の時点では都ただ1人しかいなかった。

「さて、何にしようかね」

「おれ、潤さんといっしょのがいい！」

「そうか……？ 後悔すんなよ！？」

「がうう……。や、やっぱ自分で選ぶ……。えっと……それじゃあ

この『お姫さまのブランチ』でいいか」

「決まったか。じゃーオレは……って！ マスター！」

「なんでしょ」

「ちょっと聞くけど、お姫さまがあってなんで『王子さまのブランチ』ってのはないの！？」

「残念でした。今は作る気などありません」

「ひでえ！ 男女差別だ！」

「人にやさしく、特に女性にやさしく、をモットーとしておりますので」

「ケーツ！　どこが優しいだ！　オレを客としてなんか認めちゃいねーくせに！」

「お客様に対しては精いっぱいもてなすけど、キミは客じゃないからねえ」

「あーもー、こうなっちまったらガキのケンカにしかなんねーや。やめだやめ！」

「あ、そういう事言う。なるほどねえ。んじゃあ昨日のツケを10割増にしちゃおっかな」

「ちょ、そりゃ勘弁だつて！」

「冗談を冗談と見抜けないようじゃまだまだだ。ハツハツハ！　高らかに笑いつつ、マスターはカウンターへと引っ込んでゆく。

「ちえーっ、マスターには敵わねーや……」

「いいんだよ。おれにとつては……潤さんがいちばんなんだから……な」

「都ちゃん……」

2人の顔が近づいてゆく。……とその時であった。

そんな2人の様子を見ていたマスターが、凍りついた柿を持ちつつ近づいてきた。

「……何それ」

「凍った柿。つまり、カキ氷。いやさ、早いとこ解凍しとかないとつて思つてさ、この店で一番温度の高い所に持ってきたつもりなんだ」

「うっわ、すっげーあてつけ……」

それから数分もしないうちに、2人が待つていた圭輔がやってきた。

「んよーう……つて、もしかしてオレ、また空気読めてない？」

「んなこたねーつて！　帰んなつて！」

カフェのドアを開けたと同時に踵を返した圭輔を強引に引き止める潤。

その行為に屈したか、圭輔は帰るのをやめ、潤に耳打ちを始める。

(おい、なんで都ちゃんまで連れて来たんだよ!?)

(しょーがねーだろ、ついて来たいって言うんだからよ)

(確かにそうだけだよ、絶対つまんねーぜ?)

(それも言ったよ。でもいいんだって)

(つつたく……。飽きさせんなよ?)

(わーってんよ)

「なあ2人とも、どうしたんだ?」

「お、わりーわりー。んじゃ潤、アレ出してくれ」

「あいよ!」

潤は圭輔に言われるがまま、嚴重に覆われている箱を開けてゆく。この箱は、行きがけに都が開けようとして潤に大目玉を食らったそのものであった。

そして、ついにその姿が彼らの目の前に明かされようとしていた。

「ねえ、これって……」

「ごめん、ちよっと黙っててくれ。こいつはただでさえ臆病なんだ。外界に晒されるだけでも大変だったのに、騒音にまでやられちゃたまんねーからな」

「いいか、慎重に開けるよ」

「分かってるよ。……」

そして、最後の包みを開くと……煙と共に卵型の物体が姿を現した。

そこから潤と圭輔の2人は完全に物音を発しなくなった。会話も、筆談かジェスチャーのみになっていた。

都は取り残された気分になり、ゆっくりとその場から離れる。

「はあ……」

「やつぱり、あの空気にはついてけないでしょ。まったく、何をしてるんだか」

「うん……。どうなのかな、あれ。おれがいるのにほったらかしにされたみてえだよ……」

「まあ、そこは人それぞれだろう。どう思うかは都ちゃん次第。あれも受け入れられるか、そうでないかは、ね」

「う……。あつ。今の2人の顔、そう言えばおれが初めて2人と会ったときに似てる……」

この時の2人は、ノートパソコンと不思議な物体を挟んで難しい顔をしていた。もちろん、声はおろかキーボードを叩く音までもまったく出ていない。

この光景に、都は見覚えがあった。これはまさしく、都たちが初めて顔を合わせた時の光景であった。

そして1時間後……。

「よし、こんなものでいいだろ。潤、ちゃんと密閉したな？」

「ああ、この通り」

「あとはオレン家で続きやるから、それはこつちに預けてくれ」

「オツケー。いい結果を期待してんぜ！」

「任せとけ。あ、もういいぞ。都ちゃん連れてきても」

「お、サンキュ」

圭輔に言われるままに、潤はカウンター席に移動していた都の元に歩み寄る……。と、彼女は泣きながら潤にしがみ付いてきた。

「……？ み、都ちゃん……？」

「……ほったらかした」

「え……？」

「おれをほったらかした！ うっ、うっ……」

「あつちやく、泣いちまったか。悪い事しちゃったな……」

「やだ……いやだ！ 潤さん……！ お願いだから、おれをほったらかしのしないでよ……！」

「悪かったよ、ごめん……」

「もう終わったんだろ？ じゃあ2人つきりになろうよ……。お願いだよ……」

「わかった……わかったよ。わりーな圭輔、ちっと顔出すつもりだ

「ただ無理そうだ」

「そんなこつたるーと思つてたよ。オレに預けて正解だったな。……ま、この貸しは今度何かおこる事でチャラに……。……わかつたよ」

最後に冗談めかして言つたつもりであつたが、潤のあまりにも真剣な眼差しの前では通用するはずがなかつた。

潤と都の2人がカフェを後にしてから、圭輔はマスターにぼつりと漏らした。

「あいつ、絶対無理してやがんぜ」

「そうだな。だいぶ自分を押し殺しているようだ」

「つたく、何のために外国旅行なんて行つたんだよ。どこも成長してねーじゃねーか」

「何かイヤな予感がするな。今年中に何か起こりそうだな。もう1週間しかないつてのに……。何かが起こりそうな気がする。あの2人に」

「おいおいマスター、おつかねーこと言うなよ……。……」

2人の不安は、いよいよもって大きくなってゆく。

そんな彼らの不安をよそに、こちらの2人はすっかり上機嫌になつてきていた。

「潤さん潤さん！ どっか遊びに行こうぜ！」

「わーかつてるつて！ どこがいい？」

「えー？ おれに選ばせる気？ おれわかないもーん」

「ちえつ、こんな時だけ女の子っぽくしやがつて……。……」

「だつてそうだろ？ おれ女の子だし！」

「普通の女の子は自分の事を『おれ』なんて呼ぶのかね？」

「がう……。今さら直せねえよ……。ガキの頃からずっとそうだったし……。……」

「じょーだんじょーだん。へへ、そんな都ちゃんもかわいいぜ」

「がうう」

潤が都の頭を撫でると、彼女は嬉しそうにはしゃぐ。
そして都は、潤の腕を掴みながら並んで歩くのであった。

彼らは近所の商店街を見て周り、いろいろなものを物色していた。
リサイクルショップでは揃いのマグカップを発見したり。

本屋では都が料理のレシピ集を欲しがったり。

ゲームセンターのクレイゲームで潤がぬいぐるみを見事獲得すると、都が飛び上がって喜んで近くの女性客の鞆を買って、潤が平謝りをするなどしていた。

そして彼らは今、スーパーマーケットで夕食の買い物をしている最中であつた。

「いやいや、今日はいろんなところ行ったなあ〜」

「そうだな〜。ついかさつきゲーセンで潤さんが謝った奴、どっかで見えた事あるような気がするんだけどよ。潤さん、心当たりねえか？」

「いや、ないよ。気のせいじゃね？んな事より、オレ今からすげー楽しみなんだけど！都ちゃんの手料理が！」

「へへっ、今度は『おかしな』なんて言わせねえからな！期待しとけよ！え〜っとこれとこれと、あとこれ……」

潤と話をしながらも、自分の求める食材に次々と手を伸ばしてゆく都。

彼らの押すカートは、あつという間に食材で埋もれてしまつたのだつた。

こうして全ての買い物を終え家路につく頃には、辺りはすっかり真つ暗になっていた。

……と思われたが、町並みは翌日のクリスマスイブに備えてあるのか、イルミネーションがそこかしこに展開されており、充分に明るかつた。

「うわ〜、すっげえな……。そうか、明日ってクリスマスだっけか」

「そうみたいだな。去年オレ何してたっけ……。日本にいたかも怪しいもんだ」

「あははっ、でも今年はあるんだろ？」

「そうだな。なんとって、今年は独りじゃないからさ」

「それって……。おれのこと？ おれがいるから……。独りじゃないってこと？」

「もちろん。ありがとな……。都ちゃん……」

「潤さん……。あっ……」

都が言い終わる前に、潤は彼女の口をふさぐ。

2人とも両手に荷物を持ったままであったので、続いた時間はほんの数秒……。いや、まさに一瞬の出来事であった。

「……。うれしい……」

「帰ったらもつと……。しよっせ」

「うん！ ……へへへ、ぎゅっ」

「おおっ？」

都は両腕で潤の腕にしがみつく。荷物の重みが気になるだろうが、彼女は全く気にしていない様子だった。

「このまま……。帰ろ？」

「……。ああ」

その頃カフェでは、どこか気の抜けたマスターと客がいないため暇をもてあましている絵実梨がいた。

「ね〜マスター、たいくつだよ〜」

「そりゃ僕も同じだよ。はあ……。もう閉めちゃおうかな……」

「まだ6時じゃないですか〜。もう少し待てば誰か来るよ〜。……多分〜」

「しかし静かだなあ……。都ちゃんがいないところも違うのかね」

「そうだね〜。ちょっとさびしくなっちゃったな〜……」

「今頃何をしているのだろう。というか、都ちゃん達に限らず、こ

ここでカップル成立したみんなはどうしているのだろう……」

「来ないってことは、うまくいってるからじゃないの？」

「だといいけどねえ……それはそれで寂しいものだ。これは……わがママか？」

「う……わかんない……」

誰もいない店の中では、本当に静かに時が移ろう。

そんな空気を打ち砕く存在が訪れたのは、それから3分もしないうちだった。

「おいつすー！」

「……こんばんは」

「あ、みさきちゃんと優香ちゃんだ。いらっしやいませ」

「絵実梨ちゃんおいつすー！ 相変わらずのーんびりしてんじやーん！」

「え？ えへへへ。なんか、テンション高いね。何かあったの？」

「わかるー？ へへ、お嬢から説明してやって！」

「わ……私ですか？ 仕方ありませんわね……。そうですね……」

明日とあさつてにかけまして、昨年について同じケーキ屋でのアルバイトをいただけたのです

「そうそう！ 昨年のアタシらのおかげで売り上げが伸びたからって、また今年も頼まれたってわけー！」

「へえ、よかつたね」

「またあのような格好をさせられるのはいささか抵抗もありますが、お給料に惹かれました……」

「いくら？」

「あ……あの……。に、日給3万円……。夕方5時から夜10時までの5時間を……2日……」

「わあ、すごい！ いいな、いいな」

「だしょ！？ だしょ！？ つーかさ！ 2日で6万とかマジありえなくね？ やー、これもアタシがかわいいからよね！」

「あら、私の美しさに店主の方が目をつけられたのではありませんの？」

「……へっ!?!? ちょ、お嬢! お嬢がそんな事ゆーなんて!」

「冗談ですわ。うふふふ……」

「ねえお嬢。アンタいつからそうなったの？」

「あら、私は生まれた頃からこの調子ですわよ。お堅いだけではございません事よ」

「はあ、アンタってば底が知れないわねホント」

「え〜? じゃあ〜、瑞奈ちゃんはどうしたの〜? あの子の事だから〜、優香ちゃんの真似したがったんじゃないの〜?」

「ご心配なく。そうなる前に私の方から杭を打ち込んでおきました。今、絵実梨さんの仰いました事は容易に想像できましたので、言われる前に行動に起こしたままですわ」

「でも、けっこー寂しかったりすんじゃん? このこの」

「そ……そんな事ありませんわっ!」

「素直じゃないんだから〜。顔にそー書いてあるよ?」

「う……」

「あはは〜。やっぱりみさきちゃんには敵わないみたいね〜」

「へへー、アタシの勝ちー!」

その時、楽しそうな女性3人の談笑の中に、マスターが入ってくる。

「はっははは、キミたち本当に楽しそうだね」

「まーねン。マスターはどうなのさ?」

「僕かい? なんだらう、ちょっと寂しい……のかな」

「あ……。なんか……。ゴメン。アタシ軽率だったかも」

「いや、いいんだ。……せっかくだから話しておきたい事がある。マスターは突然表情を真剣なものにし、ゆっくりと語り始める。

「なんとというかね……。キミら常連組は、みんな僕の子供のように思ってたわけなんだよ、実は」

「子供……。ねえ。それにしちゃ、うちらずいぶん年食ってるけどね」

「だから、困った時にはいつでも手を貸すつもりだし、いつでもここに来て欲しいとも思っている。……僕はこの目でたくさんのカップル成立を見てきた。キミらに限らず、な」

「私たちに限らず……でしたか。私たちだけでも何度か迷惑をかけたかわからないと言うのに……」

「そういつた子たちはことごとく……ここに姿を見せなくなる。もう僕の力を借りなくともよい……と思えばいいのかも知れないが、やはり少々寂しいものがある」

「うう。マスター最近、すごく上の空……」

「今回もついこの間、都ちゃんがここから姿を消した。それが今……僕にとつて大きなものとなっているんだ」

「そーかもね……。確かにシユウや芽衣ちゃん、翔司に音遠ちゃん、凜子ちゃんたち……はちよつと違うか。でもみんな、最近ここに顔見せないじゃん」

「確かに……。私がここで働くようになってから、一度も見た事ないかも……」

「でしょ？ アタシだってわりとここ来てるけど、もー全然。学校でも音遠ちゃん以外はあまり会うことないし。その音遠ちゃんだって去年に比べたら会う機会激減しちゃったしさ」

「時の流れとは……こうも残酷なもの……なのでしょうが……」

「でもでも、いい変化だと思うよ？ ほら、ずうっと同じ場所にとどまっていたら、そこからの成長はないんだし」

絵実梨は下を向き、言いづらそうに言葉を発した。

「私だつて、会社勤めするようになったら、ここやめなきゃならないから……」

「そう……か。絵実梨ちゃんも間もなく辞めてしまうのか……。はあ、また一人……か……」

「ちよ、マスターどうしたのさ！？ マスターらしくないじゃん！ マスターは大きなため息とともに、力なく傍らの椅子に座り込む。「僕らしくない……か。はは、僕らしいって何だろうな。最近……」

わからなくなってきた。何が自分らしくて何が自分らしくないか、キミら自身ははっきりと言えるかい？」

「……言えますわ」

「お、お嬢……」

「私の自分らしさ、それは『今私が生きている事』。自分という存在がなければ、自分らしさ云々を語るなど出来るわけがありません。これは誰しもの統一見解でしょう」

いつになく弱気なマスターの姿に誰もが戸惑う中、優香だけは冷静だった。

毅然と言い放つその姿は、誰の目にも美しく見えていただろう。

「マスター、あなたは今自己を見失ってはいませんか？ 自分の子のように接していた都さん、いえ、他の方々が姿を見せない事でそうなっているのでしょうか……」

「……」

マスターは何も言わなかったが、優香はそれを肯定と判断し、話を先に進めた。

「だからと言って、あなたが失われたわけではないでしょう。現にあなたは、ここHexagramのマスターとして我々の前にいるではありませんか」

「……ああ」

「それこそあなたの自分らしさ、言い換えればアイデンティティではないのですか？」

「……確かにそうだ。僕はどうかしていたよ。……優香ちゃん、キミのおかげで目が覚めた。ありがとうな」

「そんな……。私など……」

「そうだ。僕はこの店の支配人。他に誰も、そう名乗れる者はいない。それが『僕』ってことだね。他の誰にも真似など出来やしない」「そ、そーね……。てーかマスター、随分と立ち直り早いのね？」

「まあね。済んだ事をいちいち気にしては先に進めないからね。……でも、都ちゃんとかが来なくなっって寂しいってのは本当だよ。」

潤くん、うまくやっていけるかな……」

「大丈夫だつて！ アイツつてアタシの知ってる男どもの中でも一番タフなんだから！ 何だかんだ言つて何でも出来ちゃうんだからさ！」

「だから不安なんだ。タフだから、1人で何でも出来てしまうから。だから一匹狼な気質もありそうだし、都ちゃんを置いて1人で先走るともわからない」

「考えすぎだよ。潤くんを信じてあげようよ……」

「わかつている……。わかつてはいるけど、どうにも不安要素が拭い去れないんだ……」

「マスターがこんなになっちゃうなんて……。こりゃマジでなんかあるかもだわ」

マスターの言いようのない不安は、日を追うごとに大きくなってゆくのであった。

そんな不安をよそに、潤と都の2人は一緒に夕食を作っていた。

とは言え、潤は実際に調理に関わっておらず、食卓周りのセッティングなりに奔走していた。

と、その時であった。突然調理の手を止めた都が潤に抱きついた。

「……み、都ちゃん？」

「おれ、うれしい。ずっと……ずっとずっと夢見てたの。好きな人と一緒に過ごして、好きな人のためにメシ作って、好きな人と一緒に布団で寝る……ってのを」

「……」

「それが……この3ヶ月で次々と実現できたのが……うれしくて……。あなたと出逢えてよかった。……大好きです、愛してます……」

消え入りそうな声で呟く都の愛を一身に受け止める潤。そして何度目か分からないキスを交わす。

……だが数秒もしないうちにその行為を中断する。

「がう……。なんでもうやめちゃうんだよ……」

「鍋、吹きこぼれてる」

「げっ！ やべえ！！ 火いかけっぱなしだった！！」

潤の指摘で我に返った都は大急ぎでコンロの火を消し、鍋の中身を確認する。

中のスープはすっかり煮詰まっており、少しこぼれてしまっていた。

「はあ。なくなんなくてよかった」

「料理してる時くらいはそっちに集中しようぜ、な？」

「がう、そっちからキスしてきたくせに……。でもごめんな、

潤さん……」

「まったく、困ったもんだ。まーでも、そこもかわいい所だぜ！

うらあゝ！！」

「わわわっ！ 髪が乱れる〜！ やだ〜！」

そう言いながら都の髪を乱暴に撫でる……。いや、揺さぶる潤。

不器用な彼なりの愛情表現だが、都にも伝わったかは定かではない。

都の手料理を堪能した潤は、安心しきった様子で横になる。

「か、食った食った。都ちゃん、ごちそうさまだあ」

「あははっ、おそまつさま。……。どうだよ、うまかったかよ？」

「そりゃもちろんだよ。思わず食いすぎた。眠くなっちゃまったわ」

「……一緒に寝ていい？ つーか、そっち行ってもいいか？」

「もちろんだよ。来な」

「潤さん……」

都は潤の隣に寄り添うように横たわる。このまま2人は布団も敷かず、コタツの中で寄り添って眠る事になった。

それから3日後のこと。

昼前まで寝ていた潤は、キッチンから聞こえてくる包丁の音で目覚めた。

「お、潤さん起きたか？」

「おう、起きたぜ」

「ったくよお、朝と昼いつしよになっちまうぜこれじゃあよお」

「へーいへい。じゃあなるべく来年からは早く起きてみるぜ。……」

つと、テレビテレビ」

布団から這い出した潤はテレビをつける。すると、ちょうど昼のニュースが始まる場所だった。

「……は？」

潤はその報道を見て一気に目を覚ました。

テレビに映し出される光景は、地震により発生した津波で町が水に飲み込まれていくというなんとも凄惨なものであった。

「は！？ ちょ、待てよ！ なんだそれ！？」

「どうかしたのか？ 潤さん」

「どうしたもこうしたもあるかよ！ 見ろよ都ちゃん、とんでもねー地震が起きたみたいだ！」

「ああ、それ朝から言ってたよ。それがどうかしたのかよ？」

「おいおい……。これ、オレが行った国がいくつかあるんだよ！」

「えっ！？ それ、やべえじゃねえか！」

「やべーどころの話じゃない！ ……ごめん都ちゃん！ オレ、今から現地に飛ぶ！」

「は！？ どうしてだよ！？」

「どうしてもだ！ 一度世話になったみんなの安否が気になるんだよ！」

「それはわかるよ！ わかるけど……行ったからってどうにかなるもんでもねえだろ！？」

「どうしてそこでダメだつて決めるんだ！ やらずに後悔するよりやって後悔した方がよっぽど尊い！」

「……っ！」

都の再三の静止を振り切って、潤は身支度もそこそこに一目散に駆け抜けていってしまった。

残された都は、未だに地震の中継をしているテレビに目をやった。
「うげ、何だよこれ。……って！ 潤さん行っちゃったよ！ ……
メシどうすんだよ、ふたりぶん作っちゃったよ……」
ひとり寂しく昼食を済ませた都は、救いの手を求めるべく重い足
取りで Hexagram へと向かった。

第9章：Finding Suddes

ドガシャーン!!

「いらつしゃい。開け方でわかる子も珍しいものだ」

あまりの衝撃でドア上部についていた小物が取れてしまっても、この店のマスターは顔色ひとつ変える事はない。

落ち着き払った様子で、来店した都に話しかける。

「はあ……はあ……。マスター！ 潤さんは……？」

「来てない。ニュースは見たよ。大方、現地に行くみたいなさ言っただらう」

「やっぱり……！ ひでえよ……。いつまでも……どこに行くにも一緒だつて約束したのに……」

「いや、彼の判断は賢明だったと思う。一緒に行ったら、きっと都ちゃんまで危険な目に遭うと思つての判断だらうからな」

「だからつて……！ そしたら！ 潤さんだつてあぶねえじゃねえ

か！ それに、残されたおれの気持ちはどうなつちまうんだよ!？」

都はカウンターを飛び越え、マスターに掴みかかる。

「大好きな人が危ない目に遭つてるかも知れねえつてのに、こつちはなんにもできねえんだぞ!？ 真綿で首絞められてるみてえだよ

……」

「彼なりの考えなんだよ、それが。だが、その様子ではろくな話し合いもせず、今を迎えてしまったようだな」

「そつだよ……。おれの話も聞かねえでさつさと行つちまうんだもん……。これでまたひとりぼっちになつちまつたよ……。おれ、どうすりゃいいんだよ……。くすん……」

「ふう……こりゃ困つたな」

雰囲気が重くなるのが手に取るように分かつてきた頃、唐突に店内の電話が鳴り響いた。

「あつごめん、電話だ。はい、Hexagramです。なに？ 潤くんか？ 今どこに……。そうか、これからボランティアの人たちに混ざるんだな」

『こんなこともあるのかと海外ボランティア協力隊に入ってたからな。こういう形で行きたくはなかったけどさ。……。もしかして、都ちゃんそつちにいる？』

「都ちゃんかい？ ああ、いるよ。……。わかった。あとでそう伝えておく。ともかく、もうそこまで行ってしまったのなら僕は止めないよ。くれぐれも気をつけて行ってくるんだ」

『あの子には本当にすまないことをしたと思ってる。いつ戻れるかわかんねーのがキツイぜ。……。あとでメール送るから、それ都ちゃんに読んでやってください。それじゃ』

店に電話をかけてきたのは潤であった。しかし彼は用件を伝えるだけでさつさと通話を切ってしまう。

「誰……。だった？」

「潤くんだ。今、ボランティア団体と合流して説明を受けるそうだし、いつ戻れるかわからない……。とも言っていた」

「そんな……。マジかよ……。またひとりぼっちじゃんかよ……。！」「……。来たな」

それから数分後、今度はマスターの携帯に着信が入る。

「潤くんからのメールだよ。都ちゃん、これはキミ宛てだ。キミが見るといい」

「え……。？」

マスターは都に自分の携帯を見せ、潤からのメッセージを伝える。

いきなりだけど、オレはしばらく帰れない。都ちゃんには本当にすまないと思っっている。だけど、どうか分かって欲しい。

オレんちの合い鍵は渡してあるだろ？ それ使ってオレんちを自由に使ってくれ。オレがいなくとも、あそこは都ちゃんの家でもあ

るからな。

家賃も心配するな、こんな事もあるつかと向こう1年間の家賃はすでに支払ってある。

光熱費云々は……オレの通帳から勝手に引き落とされるから問題ない。親も仕送りしてくれるし。

……ともかく、オレの事をそれでも待っていてくれるのであれば待っていて欲しい。虫が良すぎるけどな。

んじゃまたな。

潤からのメールを読み進めるうちに大粒の涙をこぼしてゆく都。

マスターはそんな彼女をそっと抱き寄せる。

「辛いのはよくわかる。でも、きつと潤くんも辛い。僕も以前大切な人を5年もほったらかした経験があるから、彼の気持ちがよく分かるんだ」

マスターは今回の潤の行動に賛同している節がある。自分も同じ経験をしたから、理解が出来るのだろう。

「お互いに辛いんだから……キツイかも知れないけど、潤くんの気持ちも少しはわかってやって欲しい」

「……そんなこと、すぐ出来ない……！ うっ、うっ……」

都のすすり泣く声が、店内に小さく響く。その声を聞いたのか、奥で休憩していた絵実梨が珍しく駆け足で店内に戻ってきた。

「どしたんですか……って、あれ…… あややや……」

「やあ、おかえり。もう休憩はいいのかい？」

「そんなことより、都ちゃんどうしたの？」

「それを説明するには、まず今朝のニュースを見ている事が前提だ」

「ニュース？ 地震のこと？」

「なんだ、見てたのか。……あの地震が起こった場所は、たまたま潤くんが行った国ばかり集中していたようだ。だから彼は大急ぎで現地に向かった。都ちゃんを置いて、な」

「そんな〜、ひどいです〜！一緒に連れてってあげたらいいのに〜」
「やっぱりそう思うのか。潤くんとしては、命に関わる事をするんだから都ちゃんにだけはそんな危険な思いをさせたくない、と思っ
ているんだろう」

「それはそうだけど〜、それとこれとは話が違つ気がする〜……。
大好きな人がいなくなるんだから〜……」

「絵実梨ちゃんとしてはその逆、潤くんが危ない目に遭っているのが気が気じゃない、って所か。そしてそれは都ちゃんも同じ思い、
と」

「ぐすつ……。当たり前じゃねえか！おれが無事でも、潤さんが
どうなってるかわかんなかったら、おれ気が気じゃねえよ！」

「う〜……。マスターはどうだったの〜？聞いた話だと〜、マス
ターもちなみさんを置いてどこかに行つたみたいだけど〜、その時
はどうだったの〜？」

「僕の話か。僕の場合は今回の潤くんのケースとは違い、明らかに
危険なところには行っていない。だからこそなのかも知れないな、
千奈美さんが快諾してくれたのも」

マスターもまた、自分の大切な存在を置き去りにしたまま自分の
都合を押し通した事があつた。

彼らの場合は相談を密にした結果、双方の合意の上で実現したの
だが。

「だが、普通5年もほつたらかきにされて平気なはずはないよな……。
あの子もだいたい強がっていたのかも知れないな、今にして思う
と」

マスターはそこまで言つて、汲んであつた水を一気に流し込んで
つぶやく。

「結局、男つてのは全員工ゴイスト……。なのかねえ。自分の愛した
人と自分自身とを天秤にかけたら、自分に傾いちゃうんだなあ……。
全員がそうとは限らないと思いたいが、ね」

「潤さんも……そうなのかな。おれの事より自分の事が大切なのかな……。くすん、そんなのやだ……。おれ、潤さんのいちばんでいたかったのに……」

「都ちゃん……。うゝ、どうしたらいいのかな……。」

再び店内を重苦しい空気が覆う中、2人の来客が現れた。

「あつ、いらっしやいませ。あゝ、海斗ちゃんと竜造くんだけ。こんにちは」

「ちっす」

「ども」

今シーズンでもトップクラスに冷え込んでいるこの日でも、2人はやや汗ばんでいた。

どうやら彼らはロードワーク中だったようで、その休憩としてここを訪れたらしい。

「お、都ちゃんじゃないですか。……。あれ、潤さんはどうしたんですか？」

「……いねえよ。おれを置いて……。遠い所行っちゃったよ」

「へ？ どういう事ですか？」

「2度も言わせんじゃねえ！！……。ひぐつ、潤さん……」

「まったく海斗が、そういうのに無神経に踏み込むなよ……」

「す、すまねえです……」

持っていたタオルで汗を拭いたあと、竜造は都の肩に手をかける。

「平気か？ 都さん」

(がっ……。！ 竜造が……。あいつが自分から女の子に触れ……。！？)

「朝のニュースは見たよ。……。古賀センパイが行っちゃったってのも想像した」

「うん……。その通りだよ」

「……。都さん。俺は以前言ったと思うけど、俺は古賀センパイがない間の、都さんの寂しさのはけ口でもいい。そして今が……。まさにその時だと思う」

竜造は都の目をまっすぐに見据え、はっきりと告げた。

「俺を……俺を、都さんの寂しさのはけ口として使ってやってくれ！」

「えっ……。えっと、だけど……」

戸惑う都。そんな彼女から視線をそらさない竜造。しかし……。

「だけどダメだ！ おれにはやつぱり潤さんしか……！」

「都さん！」

竜造の気遣いに心が動いた都であったが、それでも彼女の感情は収まらず、竜造を振り切つてカフエを出て行ってしまった。

「ふむ……行ってしまったか。だが竜造くん、よくやった」

「いや、まだですよ。……あんな事言つてたけど、本当はすごく辛
いはず……。だから、なんとか俺が彼女の支えになつてやらないと

……！」

「わあ、竜造くんが頼もしく見える」

「お前……っ！ いつの間にそんなに積極的になつたんでっすか！
？ ……はっ、もしかしなくてもお前、都ちゃんの事が……？」

「なんだよ、今頃分かつたのか。……ああそうだよ、俺は都さんの
事が……好きだ」

「やつぱり……！ 竜造、それならオレっちは親友としてお前をサ
ポートしてやるでっす」

「いや、やめてくれ。これは俺の問題だ、お前の力は借りたくない
」
「がっ……。どうしてだよ！ 親友だろ！？」

「だからだ！ ……頼むよ海斗、俺を親友だと思つてくれるんなら
……俺一人にやらせてくれ！」

「いや、できないでっす。友が悩み苦しんでるのを見過ぎさない
のが男の中の男でっすから」

「だったら……もうお前とはこれまでだ」

「……へ？」

「これまでだつて言つてんだ！ ……ここで、俺一人でやらないと
いつまでも変わらないんだ」

感情に身を任せ、親友であるはずの海斗を拒むような発言をした竜造。

「都さんを好きになり、さらにその先に進む事で、俺はようやくあの呪縛から解き放たれるんだ。それなのに……どうしてお前はそこで止めるんだよ！」

「いや……オレっち、そんなつもりは……」

「俺一人でやらせてくれないなら、お前なんか友達でもなんでもない。親友だから止める？ だったらそんな関係、こっちから願下げだ！ じゃあな」

強い口調で言い放ってから、カフェを出てゆく竜造。海斗はひざまづき、うつむいた。

「ごめんよ竜造……。オレっち、お前の気持ちを考えてやれなかった……」

「やはり彼もエゴイストか。海斗くん、キミもな」

「ダメだ……。こんなじゃ男の中の男には程遠いでっす……」

「うっ、うっ……。どうなっちゃうのかなあ……」

家主の姿がなくなり、急激に広くなった家の鍵を開け、コタツに滑り込む都。

傍らには、潤が脱ぎ捨てていったパジャマが無造作に放り投げられている。

彼女はそれに手を伸ばし、ぬくもりを確かめようとした……が、それはすっかり冷え切っていた。

「冷てえ……。冷てえよ……。潤さん……。くすん……」

それを抱きしめ小さくすすり泣くも、その声は潤には届くはずもない。

都はそのまま、ひとり寂しく眠りについた。

「潤さん……。せめて、夢の中だけでもいいから……。おれと一緒にいて……」

結局この日は終始この調子で終わってしまふ。

都は、夢の中で隣にいるはずの想い人に出逢えたのだろうか。

翌日、海斗とあのような形で別れてしまった竜造は、行きつけのバッティングセンターにいた。

普段より設定球速を10km/h上げ、150km/hに挑戦しているようだ。

店員に無理を言っつてこの設定速度にしてもらったらしい。だが、そんな球速でも彼は何とかくらいつている。

「うらっ！……どりゃあ！」

そして、最後の1球をホームラン級のクリーンヒットでしめくくる。

「くっ……。さすがに速かったなあれは……」

150km/hの投球を何度も打ち返した竜造は、終わった直後に腕の痛みを覚えた。

そんな時でも、考える事は都の事ばかり。

「都さん……。くそっ！俺はいつたいたいどうすれば……」

「……竜造！」

「うおっ！？誰だ……。っつて、海斗……。お前どうしてここに……」

「ほっとけるわけねーって言っつたろ」

竜造の前にはいつの間にか海斗が来ていた。

「……何しに来たんだよ」

「お前と……。仲直りがしたい！」

「……その話かよ。わかった、聞くだけ聞いてやるから話してみる」

「1日置いて考えたんだけど、オレっちはお前の気持ちを考えてやれてなかった……。お前が都ちゃんのことを好きになっつちまった……。っつて事も」

「的を射ねーな。結局、何が言いたいんだよ」

「だから！お前がやりたい事を応援するっつて言っつてんだ！」

「わかんない奴だな。お前の力は借りたくないっつて……」

「だから、オレっちの力は貸さない。貸さないけど、後ろで支えてやる……ってだけはするでっす。それくらいならしてもいいはずでっす」

「……ちっ。揚げ足取りやがって。確かにそれなら力を借りてないしな」

「もちろん、行き詰った時には相談だつて乗つてやる。圭輔さんやマスター、他にもたくさんの方がカフェにはいるから、全員の意見も聞いてやる」

「海斗……。どうしてそこまで……」

「何度も言わせるもんじゃねーでっす。お前が……オレっちの親友だからでっすよ」

「……歯が浮くようなセリフをよくもまあ、恥ずかしげもなく言えるよな」

「これ以上の理由があるか？ というか、こつこつ事すんのに理由がいるのか？」

「……つたく、そこまでされて邪険に断つちゃ、こつちが悪者になるじゃないか。よし！ お前の支え……ありがたく受け入れるぜ！

そして、前に進んでみせる」

「そうか！ じゃあまず、どうするでっすか？」

「そうだな……。都さんの連絡先を把握するのが先だろうな」

「なるほど。でもあの子ケータイ持ってねーでっすからね……。家電を誰かから聞くしか……」

「だな。……でも、お前は何もするな。昨日も言つたけど、今回の件は俺ひとりやらせて欲しいんだ。だからそつこつこのを聞き出すのも、俺だけでやる」

「もちろんそのつもりでっす。……でもお前、ホントに変わったよ」

「……そ、そうか？ なんだろ、好きになった相手のためなら何でも出来る……ってよく聞くけどさ、あれマジなんだな。今の俺なら……都さんのために何だつて出来そうだ」

「竜造……！ お前、メツチャ輝いてるでっす！ じゃあ善は急げ

だ、さつさと行動に移しやがれ！」

「わかつてるよ！ それじゃーな！」

海斗に背中を押され、竜造は駆け出す。

彼が向かった先は、仲間が待っているであろうHexagram。

「ごんちわ」

「やあ、いらつしやい。……その顔は、自分の気持ちに整理がついたんだな」

「さすがはマスターだ。見透かされちゃいましたね。……あの、秋野センパイ来てませんか？」

「ああ、来てたよ。今さつき帰ったけど」

「……っ！ 一足遅かったか！」

「圭輔さんに何か用事でもあったのかい？」

「あのですね……都さん、いや違うな、古賀センパイの家がどこにあるか教えてもらおうかと思って」

「なるほどね。……すまないな、僕はちよつと分からない」

「そうですか……。他に誰か知ってそうな人は？」

「圭輔くん以外で潤くんの家を知ってそうな子……ねえ。ああ、果緒梨ちゃんならもしかしたら……。絵実梨ちゃん、どうかな？」

「あゝ、果緒梨なら知ってるよ。遊びに行ったことあるって言うてたから」

「ホントですか！？」

「わつ、ホントだよ。電話して聞いてみる？」

「……お願いします」

「うん。ちよつと待ってて。電話使ってもいいですか？」

「いいよ。その代わり、3分で終わらせてね」

「うゝ、微妙だよ……」

絵実梨はそう言いながら、カウンター奥にある電話を手取る。

「もしもし？ うん、おねーちゃんだよ」

『おねーちゃん！？ どしたのどしたの！？』

「あのね〜？ 竜造くんが〜、果緒梨に聞きたい事があるんだって〜」

『稲村くんが？ なんで？』

「えっとね〜、都ちゃんのおうちを〜、教えて欲しいんだって〜。遊びに行ったからわかるでしょ〜？」

『そりゃわかるけどさあ……。理由も知りたいから今からそっち行くね』

「あ〜、来てくれるの〜？ ありがとうね〜。じゃまたあとでね〜」

「……3分41秒。タイムオーバーだ」

「う〜、見逃してよ〜……。あ〜そうだ〜。果緒梨ね〜、今から来てくれるって〜」

「あっ、ありがとうございます！」

「えへへ〜、どういたしまして〜。あ〜、来たよ〜。早いね〜……」

先ほどの電話から3分もかからず、果緒梨がカフェのドアを開ける。そしてせかせかとマスターたちの前に歩み寄った。

「こんちわー！ ねーおねーちゃん、来たよー！」

「早かったね〜。でも〜、用があるのは私じゃないんだ〜」

「わっとなと、そうだったそうだった。んで稲村くん、みやびよんの家知りたいんだって？」

「そ、そうなんだ。実は俺、都さんの連絡先が知りたくて……」

「ふ〜ん……。知ってどうするつもり？」

「いや、その……。元気付けてあげようかな、って……」

「……甘いつ！」

「……え？」

竜造の言葉を遮るかのように声を張り上げた果緒梨。竜造は何事かと思ひ、聞き返す。

「そ、それはどういっ……」

「甘いわよ稲村くん。ここのトリュフパフェよりも全然甘い！」

（なんだと……。砂糖足りないのかな……。あの子には）

「あたしはね、もうとっくの大昔からやってるの！ そーゆー事！

それでアレなんだもん……。一番仲のいいあたしでもできないんだから、稲村くんになんかできるわけない！」

「そんなの、やってみなくちゃわからないじゃないか。大昔つつたつて、まだ昨日の今日だろ。やる前から決め付けしないで欲しいな」
「だから！ これはみやびよんの問題でもあるの！ だから簡単に踏み入っていいもんじゃないの！ あたしはいいのよ、みやびよんの一番の理解者なんだから」

「その理屈はおかしくないか？ 今さっき言ったじゃないか。青山さんが働きかけても都さんの現状が変わってないって。それなのに青山さん一人で解決できるってのか？」

「出来る出来ないの問題じゃない。するの。あたしがするの」

お互い譲る事を知らない竜造と果緒梨。その2人の間に、いつの間にかカフェに来ていた海斗が割って入ってきた。

「はいはいはい！ 2人ともちつと落ち着けです！」

「海斗！？ お前いつからそこに？」

「そんなのどうだっていいじゃないですか。……果緒梨ちゃん！ なつ、何よ？」

「何をそんなにムキになってるんですか。オレっちはあなた友達じゃないですか！ 友達が困ってるのに見過ごすんなぞ、男じゃねえ！」

「友達……。あ、ありがとう」

「竜造だつて都ちゃんの事を真剣に考えてるからこそ、果緒梨ちゃんから都ちゃんの連絡先を聞いて自分なりに何とかしようとしてるんです」

「……じゃあ聞くけど、あんたらと協力すればみやびよんを慰められるの？」

「それはやってみなくちゃわからない。でも、やらないよりはやっただ方がマシじゃないか」

「あくまでも賭け、ってことね。いいじゃん、乗ってやろうじゃないの。……そうと決まれば今すぐ行くわよ」

「さつすが果緒梨ちゃんです！ ほれ竜造、行くぜ！」

「お、おう！ ……ありがとうな、青山さん」

「勘違いしないでよ。あたしはまだあんたらを認めたくはないんだから。あくまでも1つの可能性に賭けてるだけだかんね！」

「わかつてるよ」

とりあえず話がまとまったところで、足早にカフェを出てゆく3人であった。

「がんばれよ……みんな」

「ここからどのくらいかかるんだ？」

「ん〜と……。チャリで10分ちよつとつてところかな」

「なんだ、結構近いんでっすね」

「そう？ あたしにとつちや遠いけどさ」

「果緒梨ちゃんは普段運動しねーからそう思うんでっすつて。10分なら走ってでも行けるぜ」

「え！？ なになに！？」

「だーかーらー！ 運動してねーからそう思うつてー！」

「ちょ、マジゴメン。あたしチャリ乗りながら会話するとかいっばいっばいだし！ つーが無理、みたいなの？」

「……」

カフェを出発してから15分後、一行は寂れたアパートに到着した。

「こここそが潤の暮らしている『もえぎ荘』であり、今は都が一人で暮らしている。

「ここよ」

「はー……、ここか。なんと言っか……なあ？」

「ああ……。正直、クシャミしたらつぶれっちまうんじゃないでっすか？」

「同感。よくこんなボロ屋に住む気になったわよねー、みやびよん

も。あたしだつたら耐えられないな」

口々に文句をこぼしながら、都のいる105号室のドアをノックする。

「みやびよーん、いるー?」

「はいよ……って、かおりゆんだけじゃねえし!」

「へへっ、都ちゃん。昨日ぶりですわね。……目がはれぼつたいぜ、寝てたんでっすか?」

「……と、とりあえずよ、こんなせめえとこで話すものアレだしよ、あがれよ。中もそんな広くねえけどさ……」

3人は都が誘うままに家に入り、コタツを囲んだ。

「……で、どうしたんだよ一体?」

「うん、いきなり本題から入るよ。……あたしらね、みやびよんを元氣付けてあげたいなって思って」

「……。んな理由付けなんていらねえよ。遊びに来てくれたんだろ? へへ、うれしいな……」

「……強がつてる」

「え……?」

「強がつてるよ! ……昨日は出来るだけ触れないようにしたけど、みやびよんね、潤さんがいなくなつてから上の空すぎる! 気持ち分かるけどさ、見てらんなくて!」

「わかつてるよ、んなこたあ。……でもよ、それでどうしてくれるつてんだ? 潤さんを連れ戻してくれるつても言うのかよ?」

「それは……それは無理。でもね、それ以外にも何かできることはあるでしょ? それを、なんとかやってあげたいの。そうだよね、2人とも?」

「そのつもりです。都ちゃんはオレつちたちの大切な友達ですわから。困っている友を見過ぎすなんて、そんなの男じゃねえ!」

「そういうことだ。……どうかな? 俺には……その資格あるかな?」

「資格とか……そんなの関係ねえけど、うん……。何してほしい

かつてえのも……わかんねえし……」

都のこの言葉を最後に、4人の間に沈黙が流れる。

……その時、海斗が隣の竜造に耳打ちを始めた。

（竜造！ アレ言わないんでっすか？）

（えっ？ アレって？）

（アレでっすよ！ ほら、お前が都ちゃんを好きだって事！）

（……今なのか？ 今言うべきなのか？）

（オレっちとしては、今しかないと思うでっす）

（わ……わかった。やらずに後悔するよりは……やって後悔した方がはるかに価値のある事だからな。……よし！）

竜造は覚悟を決め、対面に座っている都に声をかけた。

「あ……あのさ……、都さん……？」

「ん？ どうかしたのか？」

「……ちよつと、こつち来てくれるかな？」

「ん？」

都はきよとんしながらも、言われた通りにしようと思立上がる。するとそれに合わせるかのように竜造も立ち上がった。

「あれ、竜造くんも立つのか？」

「ああ。ちよつとこつちじゃ話にくいことだから……移動しようかと思つて」

「ふ〜ん……。まあいいけどよ、寒いから早めに終わらせてくれよ」

「わかった。……じゃ、ちよつとこつちに」

竜造は、都を一度部屋から出す。とは言え6畳一間の住まいで部屋から出てしまう事は、家自体から出てしまう事になるのだが。

「……ど、どうしたんだよ？ そんな見つめんなよ、照れるじゃねえかよ……」

「あ……えつと……」

「だからどうしたんだつての。歯切れわりいなあ……。言いてえ事があるならハッキリ言えよ！ 男だろ！？」

「わかった。……言つ」

「……」

「都さん……。お、俺……。実は……。都さんの事が……。す……」

「……へーつくしよん！ あくくっそ！」

「……」

「わーりい！ 寒いからクシャミ出ちまった！ んで、何だった？」

「……」

「……なんて言っと思ったか？」

「え……？」

「バカだな、ちゃんと聞こえてたよ……。おれの事……。好きって言ってくれたんだろ？」

「……ああ」

「……うれしい。すげえうれしい……。けど、おれにはもう潤さんが……」

「今はいない。違うか？」

「う……」

「だから、いない間だけでいいから、俺を古賀センパイの代わりに……。してもらえないか？」

「またその話……。？」

「古賀センパイは、いつ帰ってくるかの目途すら立ってない。その間ずっと都さんが悲しい思いをしているのを……。俺はとも見えていられない……。！」

「がっ……」

唇を噛み、思索を巡らせる都。

その様子を神妙な面持ちで見守る竜造。

そして、都たちが戻ってくるのを待ち続ける海斗と果緒梨。

4人の思惑が渦を巻き、いよいよひとつの形を成そうとしていた。

第10章：A l t e r n a t i v e

寒空の下、2人の間には嫌な沈黙が流れる。

10分……。20分……。静寂は続く。

だが30分後、都は何も言わずに家の中に戻り、待機していた海斗と果緒梨の2人に話しかける。

「えっと……かおりゅん、海斗くん。悪いけど、ちょっと席外してもらえねえかな。竜造くんと……この部屋で2人で話したいから、さ」

「……おっけーです。邪魔者はさっさとおさらばするです」

「みやびよん、がんばってね。後悔しちゃうダメだからね」

「ごめんな、2人とも……」

「気にしないのっ！ んじゃ海斗、あたしらはカフェに戻るっか」
「ですすね」

都に言われた通り、席を外す海斗と果緒梨。都は、カフェに戻ってゆく2人の後姿を見守っていた。

完全に2人の姿が見えなくなったのを確認してから、都は竜造を部屋に呼び戻す。

……だが、部屋に戻っても相変わらず沈黙を続ける2人。

そんな雰囲気嫌ったか、都はなんとか言葉を発する。

「あ……あのさ……」

「……何？」

「いや、その……。お、おれを好きになってくれた……。ってのはすげえうれしいんだ。それはマジだぜ。……でも、なんでおれなんかを……？」

都の質問に、竜造は小さく呟くように答えてゆく。

「……都さんは、俺を変えてくれた。女性を見ると何も出来なくなってしまう俺を……。今なら、日常生活を送る上で全く支障がなく

なつたよ」

彼は物心ついた頃から、家族や親戚以外の異性を苦手としていた。女性が近づくと発汗・発疹等の諸症状を感じたので、自分から意図的に交流を避けてきた。

そんな竜造はいつしか、女子生徒からの陰湿ないじめを受けるようになっていった。

理由は単純明快。異性が近くにいるだけで挙動不審になる彼を気持ち悪いと思っただけ。

関わっても、関わらなくても自分に害を成す存在。それが異性。

ほんの数日前まで、竜造はそう信じて疑わなかったのだ。

「女性は怖い存在じゃない、それを教えてくれたのは……他でもない、都さんだったんだ。本当に感謝してるよ、ありがとう」

「へへっ、そうか？ 褒められると照れるじゃねえか。……まあでも、ホントにちよつと気を利かせただけなんだぜ」

異性がいるだけで挙動不審になる竜造を癒したのは、皮肉にも異性であった。

「それによ、前にも言ったけど、おれ自身男の子の事よく知らなかったからよ、お互い様だぜ」

「多分、その時からだったかな。いや、もつと具体的に言えば、あの時……都さんに触れられた時からだった」

「そうなのか？」

「ああ。以前は女子を前にしただけで動きが止まるといっつか、挙動不審になってたから気味悪がられて、俺と関わるうとする女子なんかいなかったんだ」

「ひでえ話だよな。同じ女として恥ずかしいぜ」

「正直、俺はそれでもよかった。その時まで。でも、都さんは違った。そんな俺でも普通に接してくれた……」

「あつたり前じゃねえか！ そんなんでどうして特別扱いしなきゃなんねえんだよ」

「そこだよ。その優しさに……俺は惹かれたんだ。自分では気づい

ていないかも知れないけど、都さんはものすごく……優しい人なんだ」

「はあ！？ やめてくれよ。こんなガサツなおれのどこが……あ……」

照れを隠せないのか、顔を赤らめながら否定をする都。竜造は、そんな彼女の肩をいつの間にか掴んでいた。

「な……何するの……？」

「そんな事はない。俺にだってわかるんだから、本人に分からないはずがない」

「そんなこと言われたって……」

「都さん。そろそろ自分の気持ちに正直になってくれ。そこは偽るところじゃない。そして……さっきの俺の気持ちにも応えて欲しい

……」

「がう……。でも……」

「すぐに出てこない？」

「うん……」

顔から火が出る、といった表現が最もよく似合うような顔になってしまった都は、竜造から目を反らして小さく呟く。

その時、竜造は都から手を離れた。

「わかった。今すぐに答えを出してくれとは……言わない。ともかく、俺の気持ちは伝えた。とりあえずは……それで満足だ」

そう告げた竜造の顔は、実に晴れやかだった。

「都さん、落ち着いたらでいい。それからでいいから、俺に答えを聞かせてくれよな。……それじゃ」

「……待つて！」

いよいよ立ち上がるうとした竜造の脚に、都はしがみつく。

そして同じように立ち上がり、目を潤ませながら呟いた。

「お願いだから、言うだけ言って逃げないで……。そういう事なら、今すぐ答え出すから！ だから……」

「わ……わかった。ほら、泣かないでくれよ……」

「くすん……。……。うん」

再び向かい合って座る2人。だが、結局沈黙が続いてしまつのであつた。

その頃……。カフェに到着した海斗と果緒梨の2人だったが、到着してから10分もしないうちに果緒梨が我慢の限界を迎えていた。

「あーもーまつたく！ ちよつとき、いつくら何でも遅すぎない！？ 海斗、戻ろ！」

「いやいや！ いくらなんでも早すぎです！ まだここ来て10分かそこらしか経つてないじゃないですか！」

「知らないわよそんなの！ ともなく、あたしは行くわよ」

「ダメです！ 竜造も都ちゃんも、今必死に戦つてんです！」

それに水を差すような真似したら、オレっちは許さないのでっすよ！」

「だけどさ！ わかるけど、待ちきれないの！ 止めてもムダよ、もう行くから！」

「がっ……。！ ちよつと！」

海斗の引き止めも空しく、果緒梨は大急ぎで都たちのいるもえぎ荘に戻つてゆく。

その様子を見て、慌てて海斗も彼女を追つたために出発した。

そして15分後、再びもえぎ荘に戻つた果緒梨と海斗。結局2人は、現地で合流する事になつたのだつた。

「なんだ、あんたも来たんだ」

「当つたり前です！ 果緒梨ちゃんだけじゃどんな事になつちまうかわかつたもんじゃねー」

「なっ……。どういふ意味よそれ！？」

「ごたくはいいです。ここまで来ちまつたんだから、開けるですよ」

そう言いながら、ゆっくりとドアを開ける海斗。

彼らには、ぼろぼろと涙をこぼしている都と、その様子を神妙な

面持ちで見守っている竜造の姿が見えた。

「……みやびよん!!」

慌てて果緒梨は室内に入り、都を抱きしめると同時に竜造をにらみつけた。

「ちよつと……。何みやびよん泣かしてんのよ! 何したのよ!

答えなさいよ!」

「ち……ちが……」

「……!」

回答に窮する竜造に怒りを露にした果緒梨は手を振り上げた……が、その後の動作は都によって止められた。

「みやびよん!? どうして止めるの!？」

「やらせねえ……。やらせねえ! かおりゆん……。竜造くんをぶん殴るつもりだったんだろ。そんな事……おれが許さねえぞ!」

「は!?! どうしてなの!? みやびよん、泣かされたんでしょ! ? ひどい事されたんでしょ!？」

「ちげえよ!! 泣いちゃったのはホントだけど……それはうれしくてだったんだよ……」

「いや、ちよつと待って。意味わかんないわ。わかるように説明して」

「竜造くんは……おれに好きって言うてくれたんだ……」

「あー、そー……。ま、そんな事だろーとは思ってたわ」

「おれにとつては……それがすげうれしくて……。気づいたら、涙が止まなくなつちまつて……」

「待って。ねえみやびよん、今すごく嬉しいのはわかるけど……それじゃあ、潤さんの事はどうするの?」

「えっ……?」

「ここで稲村くんの告白を受けたら、潤さんの事を好きでいながら稲村くんも好きになつたって事だよな」

「う……。そ、そうだけど……」

「それってアレよね。浮気だよな。ぶっちゃけ、裏切りだよな」

「裏切りだつて……？　ち、違えよ……」

「違う？　何が違う？　どこが違うの？　いい？　みやびよん。複数の異性を好きになるって事はね、それは立派な浮気。もつと言えば裏切りよ！」

果緒梨は明らかな怒りの表情を、都に向ける。

「そんなの……すつごい不潔！　いやらしいよ！　最低！！」

「……。最低、か……」

都に向けられる、果緒梨の辛辣な言葉。見かねた海斗が慌ててフオローに入る。

「ちよ、果緒梨ちゃん！　そいつあいくら何でも言い過ぎじゃ……」
しかし海斗のその行為も、いったん火のついてしまった果緒梨を止めるには至らなかった。

「うるさーいっ！　あたしは正論を述べてるだけじゃない！　間違つた事なんか言つてないじゃない！　そのどこが悪いの！？」

この世は言いたい事も言つちやいけないの！？」

さらにまくし立てる果緒梨。それらの言葉について都も観念した。

「……ごめん……」

「ん？」

「ごめん……なさい……。潤さん……。おれ……。あなたのことをいつまでも愛するって約束したのに……。竜造くんのこと……。好きになつちやつた……。うぐ……。っ……」

「都さん……。くっ、俺はどうすれば……」

自分の犯してしまった過ちを反省し、嗚咽を漏らす都。

そんな彼女の姿を見て、竜造もまた悩み始めた……。が、そこに海斗が助け舟を出す。

「竜造、ここで男を見せる。あとの責任は、オレっちが取ってやる」「ど、どういふことだ？」

「言われなきゃわかんねーようなら、所詮お前はそれまでの人間です。せつかくオレっちより優れたおつむ持つてるんだから、そんくれー自分で考える……！」

「……！ わかった！」

親友の言葉が、彼を奮い立たせた。

竜造は、未だに泣き続ける都の傍に移動し、彼女を優しく抱きしめた。

「……！？」

「よっし！ よくやった竜造！ やればできるじゃないですか！」

「ちょ、何やってんのよ！ ……海斗！ 何で見てるだけなの！？ 止めなさいよ！」

「何でも自分の思い通りになるとは大間違いです！ ここは2人に任せるべきです」

「だけどっ……！ みやびよんイヤがってんじゃ……って、あれ……？」

都は嫌がってなどいなかった。それどころか、自分を抱きしめてきた竜造を同じように抱きしめてさえる。

「……うそ！ どうして……？ 素で信じらんないんだけど……」
「信じらんないつつつても、実際オレっちたちの目の前で展開されてんだから認めるしかねーです」

「こんなのないわよ！ あたしは認めない！」

「無駄ですよ。……都ちゃんは、竜造のことも好きだったんだ。今ならオレっちも、圭輔さんのあの言葉が言えそうだ」

「……何よそれ」

「こほん。それは……『人を好きになるのは自由』ってことです。都ちゃんは、潤さんも竜造も同じように好きになっちまった。同じように愛するようになった」

「んなこと、この2人見りゃわかることじゃないの」

「でも、それは誰にも咎める事はできねー。何故なら、それは都ちゃんが必死こいてもがきまくってようやく出した回答なんだからな」

「……わかるけど、でも！ やっぱり納得できない！ こんな許されるの！？ 潤さんは、自分のいない間にみやびよんを取られちゃったのよ！？」

「まあ、そうでっすよね」

「だったら稲村くんは、潤さんからみやびよんを奪った悪人じゃないの！ 潤さんがこの事知ったら……きっと稲村くんの事を恨むわよ……」

果緒梨は頭を抱え、近い未来に起こりうる争いを想像してしまっ
た。

「そんなの……そんなのイヤ！ あたしの知ってる人どうしで争う
のなんて見たくない！」

「だからって、今さら戻せねーでっすよ！」

ネガティブな考えに至りかけた果緒梨を奮い立たせようとしたの
か、海斗は声を張り上げた。

「都ちゃんだって竜造のことが好きだからあいつの告白を受け入れ
たわけだし、今2人がああして抱き合ってる以上、オレっちたちが
ガタガタ言っただって変わんねーでっす！」

「くっ……！ みやびよん、本当にそれでいいの！？ このままだ
と、潤さんを裏切る事になっちゃうんだよ！？」

都は竜造に抱かれたまま、顔だけを果緒梨に向けて応える。

「違う。裏切ってなんかない。おれは潤さんだって大好きだし……
愛してる。でも、好きになっちまったもんは仕方ねえだろ！？ お
れは竜造くんの事も大好きなんだよ！！」

（大好き……とか……。くうう、悔しいでっすね〜）

海斗が一人関係ないことを考えている間、都は逆に果緒梨に問い
かけた。

「じゃあ逆に聞くけどよ、かおりゆんはどうなんだよ」

「あたしが今のみやびよんと同じ立場だったら、ってこと？」

「そう」

「決まってるじゃない。潤さんを選ぶわよ。先に付き合ってるんだ
もん、他の人が入り込む余地なんて与えるわけない」

果緒梨は確固たる答えを持っていた。それは、都が押し通そうと
しているものとは違っていた。

「だからあたしは、今みやびよんがやるうとしてる事……浮気は、裏切りとしか思えない。裏切りなんて最低で汚らわしい行為、あたしは絶対にしない。してる人の存在を疑うわね」

「かおりゆん……。どうしてわかってくれねえんだよ……！裏切りなんかじゃねえって言ってるんだろ……！」

「わかりたくないわよ！裏切り者の言い分なんて！」

「んだとお！？おとなしく聞いてりや言いたい放題抜かしやがって！裏切り者裏切り者ってなんだよ！！いい加減にしろ！！」

「なによ！裏切り者の言い分なんてわかりたくないって言っただけじゃないの！」

「……うるっせーんだよお！！！！！」

にらみ合い、今にも取っ組み合いになりそうだった2人を、海斗が大声で止めた。

「……つたく2人とも、言いたい事ばっか主張しやがって。それじやただのケンカじゃないでっすか！」

「そうよ？あたしらケンカしてんの。部外者は黙ってて」

「いや、黙ってるわけにはいかねーでっす。男としてこの事態、放っておくわけにやー、いかねーなー」

「海斗くん……。おれ……。裏切ってるんか……。ないよな……。？」

「言いたいことはわかるけど、肯定はできねーでっすね。どんな理由があつたにせよ、都ちゃんは恋人である潤さんがいるにも関わらず、今さっき竜造と抱き合った」

「抱き合ってたとか言うな、恥ずかしいだろ……」

「いやまあ、その辺は竜造をけしかけたオレっちにも責任はあるでっすけどね……」

「いや、お前は悪くない。お前は親友として俺にアドバイスをしてくれただけだろ。それを間違った方向に捉えたのは俺だから、やっぱり悪いのは俺だ……」

「今は責任の擦り付け合いしてる場合じゃないでっす。……ともかく、都ちゃんとお前はオレっちたちの前で抱き合った。それは紛れ

もない事実です。そこまではいいですわね？」

「あ、ああ……」

「そこでだ。果緒梨ちゃんはその事を都ちゃんの裏切りだって言ってる。言葉わりーけど、やっぱりその方がしっくり来る。……んだけど、どうしたいってのはまだ聞いてないですわね」

「どうしたい、って？」

「都ちゃんがどうしたいか、って事です。分かりやすく言えば、潤さんと竜造のどっちを選ぶか……かな」

「どっちを選ぶか？」

「そう。まず、潤さんはこの場どころかこの国にさえいない。だけど、きつといつかは帰ってくるはずだ」

「そりゃそうよね。自分の彼女がいるってのにいつまでもどっかに رفتりしてるわけないもんね」

「そんな時に都ちゃんが竜造と普通の友達以上に仲良くしてんのを潤さんが見ちまったとしたら、あの人どう思うんですかね」

「いい気はしないよ、そりゃ。だって自分の彼女が違う男と仲良くしてんだもん。普通の友達ならまだしも、抱き合ったりかはしないわね」

「果緒梨ちゃん、ちと言い方トゲトゲしすぎです。……まあそれはさておき、潤さんがいない間になんもかんでも決めちゃうのはどうかと思うわけです。オレっちは」

「あんたの意見ってのがなんか癪に障るけど、確かにそうだね。こうなっちゃったら、潤さんがいない間に答えなんか出せないもんね。あの人に立ち会ってもらわないと」

「……だけど！ いねえじゃんか……！」

「じゃあ、待てばいいじゃないですか。まだ答えが出せないようなら、待つてる間に答えを用意するとか。……その、帰ってくるまで竜造と一緒に考えるとか」

「……あたしも、海斗の意見に賛成。みやびよん、待とう？」

「……」

「ふう……だんまり、か。じゃあ稲村くん、どう？」

「……俺は、それでいい」

「さすがだぜ、竜造！」

「俺はうれしかったんだ。こんな俺でも……普通に恋ができたって事が。俺に恋を教えてくれた都さんには、感謝してもしきれない」

「恋つつつても、浮気相手としてじゃねーのよ」

「何とでも言うてくれ。俺は、それでもいいって決めてるんだし。

そして都さんが寂しい時は、そのはけ口になってやりたい……。何度も言うてきてるけど、これは曲げたくない」

「そこまで決めてんなら、あたしもう何も言うことはないわ」

「だからさ都さん、古賀センパイが戻ってくるまで、一緒に待とう……ぜ……？」

最後まで言い終わらぬうちに、都が竜造に抱きついた。そして、搾り出すように言葉を発する。

「あぐっ……えぐう……。おれも……それで……ひぐっ……いい……。あなたのことも大好きだけど……やっぱりおれは潤さんのことが忘れられないの……」

「……」
「でも……今いなくて……さみしいから……。だから……。だからあの人が戻ってくるまで……。おれの彼氏に……。なってください……。うっ、うっ……！」

「都さん……ありがとう。約束するよ、古賀センパイに負けないくらいに……。あなたを大切にしてみせるって！」

「うれしい……。！　うれしいの……。！　うっ……。うわあああ〜〜くん……！」

「……納得できないけど、これでよかったんだよね。ね、海斗」

「ああ、そうでっすね……。よかったなあ、竜造。都ちゃんを……大切にしていってやれよな」

海斗が小さく呟くと、竜造は無言で頷いた。

それを合図に、果緒梨が声を張り上げる。

「さつて！ あたしらはもう用済みっぽくね？ 帰るべ」

「そうでっすね。じゃ竜造、オレっちたちも帰るでっすよ」

「……ああ。海斗よ、本当にありがとう。お前がいなかったら、こんな結果にはなつてなかったはずだ。感謝するぜ」

「へっ、こんくれー朝飯前のさらに前の食前酒でっすよ。何より……お前の勇気がなきやこうなつてなかったはずでっす。……んじやな」

小さく手を振りつつ、海斗と果緒梨は部屋から出て行った。

「ね、海斗？」

「なんでっすか？」

「さっきのあんた、カッコよかつたよ。言う時は言うんじゃん、見直しちゃつた。さすがみさき姉さんの弟ね。……ちよつとだけ、好きになつてもいいよ」

「へっ！？ そそそそんな、ななな何言つてんでっすかつ！？ でででもマジだったら、お、お、オレっちはいつでも……！！」

「うっそびょくん うっさびょくん おもちつき〜 なに耳

まで真っ赤にしてんのー？ かーわいい〜」

「がっ……！ 純情な男心を踏みにじ……うああああ〜！！」
(……でも、カッコいいって思ったのはホントだよ)

「はい？ 何か言つたでっすか？」

「なーんも言つてないわよっ！ あーあ、あたし喉渴いちゃつたな
ー。カフエ行こーつと」

「あ、じゃあオレっちも……」

「は？ あんたも行くの？ ……カン違いされるのイヤだから海斗
先に行つてよね！」

「がっ……。全くもつて意味がわからんでっす」

「あーもー！ これだからあんたはいつまで経つてもみさき姉さん
を超えられないのよ！」

「なんでそこでねーちゃんが出てくるでっすか……。ますますわけ

わかんねえ……」

2人が他愛のない雑談をしながらカフェに向かう中、潤の家に残った竜造と都はお互いの気持ちを確かめ合っていた。

「……へへ、2人つきりだな」

「そうだね……。こつち来る？」

「うんっ！……へへ、うれしいな……」

あぐらをかいた竜造の足のの上に座ってみた都は、そのままの体勢で竜造を見上げる。

「うっ……。か……。かわいい……」

「なに？ 聞こえねえよー！ もっとはつきり言えよっ！」

「か……。かわいい」

「もう一回！」

「かわいいっ！」

「がうっ！ 竜造くん大好きー！」

竜造の言葉に喜びをあらわにする都は、そのまま彼に抱きついた。その勢いは、日々体を鍛えている竜造でさえも倒してしまうほどであった。

「あっ……。ご、ごめん……」

「いや……。大丈夫だ。それよりも……もっと近づいてくれるかな？」

「……？ こ、こっつ？」

横たわった竜造は、その体勢のまま都に顔を近づけるように頼む。その言葉を受け、彼女は少しずつ顔を近づけていった。

そして、都が竜造に覆い被さる格好になったところで抱きしめた。

「……っ？？」

「このまま……。しばらくこっつしていたい……。都さんを……。もっと近くで感じたいんだ……」

「なんだ……。そういうことかよ。だったらおれだって……。こっつしてたいよ。竜造くん、大好き……」

「……俺、幸せだよ。都さん……」

「おれも……。んっ……………」

言葉の途中で唇をふさがれた都。

この行動は、数ヶ月前の竜造からは到底考えられない事である。
この数分間のキスは、2人の絆をより強いものとした。

その頃……カフエに到着した海斗と果緒梨は、そこに残っていた、
もしくは加わった常連メンバーの質問攻めに遭っていた。

「よーよー！ あの2人どうなったんだよ？」

「そーよそーよ！ もったいぶつてないで早く教えなさいよ！」

「わたしも気になる。かおりゆん、教えて！」

「どうしたのです？ この期に及んで言い渋る理由はないのではな
くって？」

「……だーっ！ わかってるわよ！ ったく、あたしがこんなに急
かされるなんて初めてなんだけど！」

文句を垂れながらも、果緒梨は先ほどの出来事を余すことなく伝
えきる。

「……っと、そういうわけ！ わかった？」

「よーくわかった！ やー、竜造くんも思い切ったマネしたもんだ
ぜ。こりゃ潤のヤツが帰って来た時が見物だな！」

「またコイツは変な事考えて……！ ま、今回は海斗もよくやった
んじゃない？」

「げっ！ ねーちゃんが素直に褒めやがった！ こりゃ明日は史上
空前の大雪でつすね！ ……あれ？」

海斗がみさきを茶化すような事を言うも、何故か彼女は気分を害
することもなく、むしろ喜んでるようにも見えた。

「……本当に、アンタ成長したわね。アタシ……マジでうれしんだ
けどー！」

「ねーちゃん……………」

「……ま、確かにな。今回の件に関しては、お前のお手柄だ。った
くよお、お前もやる時はやるんじゃないか！ 見直したぜ！」

「みんな……！　そ、そんな、オレっちそんな頑張ったでっすか……？　も、もしかして、男の中の男に……近づけたでっすか！？」
「ああ、そうだぜ。今のお前は間違いなく、男の中の男だ！　誇りやがれ！　原田海斗……！」

「……うっ、うおおおおお……！！　オレっち……！　今のこの気持ち……　未来永劫なくさね……　でっす……！！！」

『男の中の男』と呼ばれて嬉しさがこみ上げてきたのか、突然大声で叫び始めた海斗であった。

「みんな、サンキューです！　オレっちはこれからさらに男を磨くために、また走りこんでくるでっす！　うっ、うおおおお……！！！」

海斗はそこにいる全員の褒め言葉に気をよくして、そのままの勢いでカフェを出て行ってしまふ。そこに残ったものは静寂であった。

「……ふう、うるせーのがいなくなった」

「ったく、単純バカっつかねえ。おねーさまとしてこっ恥ずかしいわ！」

「でもまあ、彼が頑張ったってのは事実ですよ」

「ホント。あたし目の前で見てただけど、別人かって思うくらいだったね」

「ふふっ……。今回の件は海斗さんの頑張りと稲村さんの勇気、そして……都さんの純粋な思いが結晶化したと考えるもよろしいでしょうね」

「んだな。そのどれかひとつが欠けても成り立たなかった。……なんだよ、オレの助言がなくてもやってけるじゃねーか。オレもそろそろ引退かなあ……」

「なーにたそがれてんのよ！　ガラにもない」

「だってよー、今までこーゆー色恋沙汰の時や必ずオレが背中押してやったからうまく行ってたんじゃねーのよ。それが今回はなあ……」

「……」
「あら、それは自惚れですか？　確かにあなたは最後の助言を致し

ました。ですがそれを活かしたのはあなたではなかったでしょう」
「ケツ！ シュウも翔司も潤もミネタクも、オレがいなかったらど
「なつてたか……」

「すねるなすねるな。……ほら、きつとこれは暗示なんだよ。他人
の事ばかり構うのはよして、そろそろ自分の身を固める……みたい
なね」

「んな事言うけどよあ……。こん中にいるってのか!？」

マスターにそそのかされ、圭輔は慌てて女性陣の顔を見回した。

しかし彼女達の返答はあまりにも冷たいものであった。

「……バカ言っでんじゃないわよ。これ以上アンタと腐れ縁したか
ないわ、ボケ！」

「冗談は性格のみになさいな」

「あたしパス！」

「わたしじゃ圭輔さんとつりあわないです……」

「私も……。ごめんね」

「えとえと……。ミーもそーりーです」

「ひ……。ひでえや！ お前らそこまで毛嫌いしなくたって……!」

「所詮、アンタの評価なんてそんなもんよ。自信過剰もたいがい
しなさいって事！ わかった!？」

「はあ……。女性恐怖症になりそ……」

「はっはっは、まだまだ春は来そうにないなあ」

完全に打ちのめされた圭輔を嘲笑うかのように見下ろすマスター。
しかし彼の表情には全く悪意はなく、むしろ哀れみさえ漂わせるほ
どであった。

こうして、神崎都という少女が中心となって展開された出来事に
も、ようやくひとつの結論が出ようとしていた。

彼女の出した結論が、果たして本当に正しいものであったのか。
それは誰にも言い切ることは出来ない。

終章：After All

月日は流れ、新たな年が幕を開けた。

都たち高校生もまた、高校2年生の最終学期を迎えたのだった。

「今日もクリスマス来なかったね」

「うん……。どうしたのかなあ。携帯も出ないし……」

「おかしな話だな。直接あいつん家乗り込んでみつか？」

「オレっち知らないですよ？ クリスちゃんの家なんて」

と、彼らは3学期になつてから何故か全く学校に来なくなつてしまったクリスの心配をしていた。

「コタロー先生もなんも言つてないし……。委員長とかなんか知らないかな？」

「う……。藤堂さんに聞くの？ ちょっと怖いな……」

「なにに、委員長だつて人の子。フレンドリーに聞いたら平気ですよ！」

「なに、私がどうかしたの」

彼らの背後に現れる、大きな影。

女子でありながら、180cmは楽に越えていそつな身長。

その高さから繰り出される鋭き眼光は、どんな人間をも萎縮させてしまうだろう。

彼女こそ、2・Eで委員長と呼ばれている存在、藤堂樹里であった。

ちなみにその委員長という通り名は、本人はあまりよく思っていないらしい。何故なら実際は委員長ではないからだ。

「わっ、藤堂さん……」

「いいとこに来てくれたです。ちつとオレっちの話を聞いて欲しいです」

「なんだよ。聞いてあげないこともないから話してみなさいよ」

海斗は最大限にフレンドリーに話しかけたはずだが、どうも雲行

きがよろしくない。

明らかに面倒そうに対応する樹里に、彼は幾分声を震わせた。

「あーえっと、3学期になってクリスマスちゃん全然来ないから気になつてんでっす。委員長、なんか知らねーか？」

「はあ？ 桜庭さんのこと？ 私が知るわけないでしょ」

「やっぱり……」

そう呟いたのは果緒梨だ。彼女は始めからこうなるのをある程度予測していたようだ。

「で、それ聞いてどうしようっての？」

「どうしようも何も、最近顔見てなくて気になったからさあ。委員長も気になってんでしょ」

「どうして？ 他人のこと気にする暇があつたら自分を磨いてればいいのに、ご苦労なことね」

「ああ！？ どういう事だよそれ！ クラスメイトが心配じゃねえのかよ!？」

「別に。仮に桜庭さんが戻ってきたとして、私になにかプラスに作用するとも？ だつたら心配するかもね」

「て、てめえ……!」

「なに？ ケンカでもしちゃう？ 私に勝てるとか少しでも思うのならかかってくればあゝ？ ねえ、神崎さん？ いつもみたいにさあ」

あまりにも心無い樹里の発言に怒りを募らせる都。それを見て火に油を注ぐかの如く挑発する樹里。

一触即発の空気の流れる中、瑞奈が上目遣いで樹里を見て言った。「藤堂さん、そんなこと言わないで……。わたしたち、クリスマスちゃんが心配なの……」

(うつ……。橋本さんっ、そんな目で私を見ないでっ……。！ らっらめっ、キュンキュンしひゃうっ……。！)

「……ふんっ。ともかく、知らないものは知らないんだからっ」

何故か顔を真っ赤にしつつ、樹里は話を打ち切つてその場を去つ

てしまった。

「あーあ、無駄骨だったみたいねー」

「こっ、この行き場のねー怒りは！ どっ、どこにぶつければいいんでっすかっ!?!」

「おれもだぜ海斗！ がうっうっ、イラついてきたぜ!！」

「……なーんであんな子が委員長なんて呼ばれるよーになったんだっけねー」

「えっと、だって藤堂さん頭いいし、運動だってすごいし、言うてることは間違ってるないし、それに……」

「それに?」

「お、おつきいし……」

「……あー、ねー。確かに規格外だわねー。身長も胸も」

「そんなのどうでもいいよ！ ったくよお！ あんなだから友達できねえんだよ！ こっちは受け入れ態勢できてんだから素直に友達になるって言えってんだよ」

「根は悪い子じゃないと思うんだけどねえ……。せつかく3年間同じクラスになるんだし、もーちつとみんなと溶け込んでもいいんじゃないかって思うわけよ、あたしゃ」

「うん……」

そんな彼らの元に、もうユニフォームに着替えた竜造が現れる。

「よっ、みんな……って、なんか空気重いな。どうかしたのか?」

「ああ!?! ……あつ！ 竜造くん!」

都の先ほどまでの荒んだ感情は、竜造の顔を見た事でどこかに飛んでいってしまったようだ。

抱きつかんばかりに接近し、話しかける。

「えっと、さっきまでキレてたけどもう平気。なに、これから部活なのか?」

「ああ。どうする? 今日は。部活終わってからなら体空くけど」

「……2人つきりになりてえな。7時すぎたらうち来て。メシ作っ

て、待ってるから」

「わかった」

「きつとだからな。約束……だからな」

「わかってるって。そんじゃそろそろ行ってくるわ。海斗！ お前も準備しとけよ！」

都の頭をそつと撫でながら呟く竜造。彼の顔からは、恐れや照れなど微塵も感じられない。

「あ、待てよ竜造！ ……んーじゃオレっちも行ってくるです」

海斗はそう言い残し、慌てて教室を出て行った。

「もう行っちゃった……」

「なんだろ、稲村くんの変わりよう。さわやか青少年系っつーか……。って、おーい？ みやびょーん？」

「うふふ……へへっ……。竜造くんに撫でられちゃった……。うれしいな……」

「行く、瑞奈。約一名キモいのがいるから」

「ふえっ？ う、うん。でもどこ行くの……？」

「どこでもいーでしょ！ そだ！ 久々に瑞奈んち行ってもいーい？」

「ふええっ！？ い、いいけど……お部屋散らかってるかも……」

「そんなの気にしないって！ ほらほら、こーんなスイーツな空間からはさっさとおさらばよー！！」

「ふえええええ〜！！」

果緒梨は瑞奈の腕を強引に引つ張り、教室から去っていく。

残されたのは、幸せいっぱいの顔で妄想にふける都ただ一人。

「へへへっ……。早く7時になんねえかなあ……」

都は竜造の告白を受けた日からずっと、彼との関係を深めていた。本当の彼氏である潤を待ちながらも、竜造を大切に想う彼女の選んだ道。

それは誰にも、正しいとも誤りとも言い切ることは出来ない。
ある者は間違いだと言い、またある者は正しいと言っだろう。
だがそれこそが、彼女が悩んだ末に行き着いた最良の選択であり、
周囲の人間もそれを認めている。
きっとそれが、解なき問いへの答えなのだから。

どこかの場所のどこかの時代、今日も彼らは生きている。
そして何かを、いつも探し求めている。それは、誰もが夢見る『
Precious Melody』。
今日もどこかで、誰かのもとへ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2447o/>

Precious Melody -3rd Stories-

2011年1月11日23時26分発行